
赤眼の狼

如月 晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤眼の狼

【Zコード】

Z6280X

【作者名】

如月 晃

【あらすじ】

ヘクセと呼称される吸血鬼。

その有り得ない存在を狩る為に結成された自衛隊少精銳の特殊部隊「HAWK」。

親がいなく、幼い時から自衛隊の訓練を受けた「赤眼の狼」と称される少年「直江幸成」と「HAWK」隊員はあるヘクセを追つて「華景市」に潜入する。

幸成が潜入を命じられた場所は高校であった……

幸成を取り巻く隊員や高校生達による青春学園ダークファンタジー

月夜の中の街。

街灯は無い。

その闇を照らすは月明かり。

雲一つ無い満月が照らす夜闇。

満月は青白く輝き、美しい。

昼とは違う澄んだ空気。

澄んだ空気は夜という物を形作る一つの事象であった。

その空気が不意に搔き乱されて風となる。

地面を叩く靴の渴いた音とそれに連なる呼吸の乱れた音が「静かな夜」という体系を崩していく。

その夜の中を転びそうになりながら脱兎の如く走つていく若い女性がいた。

その後ろからは不規則で粘着室な吐息が聞こえてくる。

獲物を追い詰める獵犬のようにつかず離れずの距離で翻るよう迫るのは男だ。

若い女性の後ろには中年で肉付きのいい中年男性が迫つて来ていた。中年の男は太つている割には足が速く、女性に張り付く様は無気味だ。

女性は助けを求めて悲鳴をあげるが、聞こえているのか聞こえていないのか、誰も家の中から出て来ない。

日本人は事件に遭遇しないように極力厄介事から遠ざかろうとする。他人の不幸よりも自らの身の安全だけを考えて……

月夜の光で影が伸び、既に女性の影は男に踏まれていた。

既に捕まつたも同然の状態で、いつでも捕まえられるのだと物語っている。

女性は月明かりの中を逃れるように大きな廃工場の中に飛び込んだ。光よりも闇を……

闇を求めた女性は鉄の扉を慌てて開け、門錠を掛ける。

女性は広い空間の中、後退りをすると扉を凝視した。

数秒の沈黙の後に体をぶつける音が扉の向こうこだまから聞こえてくる。

女性は尻餅を付くと、壁まで這つ。

「誰か！誰か助けてえ！！」

その悲鳴は虚しく廃工場の広い空間にこだま響した。

元は何かの生産工場であつただろうが、今はそのような機械は無く、ひどく殺風景だ。

鉄の扉が軋む音と凄まじい轟音。

「もうすぐ僕の血肉になるんだよ？もつと喜んでよ、デュフフフ」

男の下劣な声が轟音に混じつて聞こえてくる。

声音は下品で無気味、混じる息切れが澄んだ空気に絡み付く。

「誰かあ！！」

女性の悲鳴が響いた瞬間、扉が勢いよく開き、月明かりに照らされながら男が現れた。

男は口元を涎で濡らし、口元が異様に光っていた。

舌なめずりをする度に涎が口元を濡らして、月明かりで糸が引いているのが良く見える。

男は女性に歩み寄ると膝に手を当てて、先程擦りむいたであろう傷から流れ出た血を舐め取つた。

「美味しい血だあ……デュフフフフフ」

男は下卑た笑いを浮かべて女性を抱き抱え、その鋭い歯を首筋に突き立てようと口を開いた……

「イヤアアアアッ！！誰かあ！助けてえ！！」

女性の絶叫が轟いたその時、男の腕から血が飛び散つた。

男は思わず女性を取り落とすと、辺りを見渡し、怒鳴り散らす。

「誰だ！！何者だ！！」

「ヘクセ、ブラッド・ラスター。貴様を排除する」

廃工場の天窓から一人の少年が飛び降りてきた。

両手には先程、男の腕を撃つたであろう二丁拳銃が月明かりで光つ

ている。

右手にはスライド部分が黒い拳銃と左手にはスライド部分が白い拳銃が握られていた。

特異なのはその拳銃の銃口が一つ付いている事だ。

狩猟用の上下一連ショットガンの拳銃版のようなどころか？

黒い軽装の防弾チョッキは非常に動き易そうだ。

右目には青く光るヘッドアップディスプレイ（HUD）が光つていた。

その格好は特殊部隊を彷彿とさせる。

しかし、闇夜で光るのは右目のみだけではなかつた。

紅い左目。

月夜に照らされて顔は判然としないが、その光りを受ける左目の瞳は紅く光つている。

悪魔や化け物と形容するに相応しいその瞳は真つ直ぐと男を見つめていた。

「逃げて下さい」

少年は女性を僅かに一瞥しながら言い放ち、紅く光る瞳で扉に行くよう促す。

女性は涙を流し、這いながら廃工場から逃げて行く。

男は女性を追い掛けようとしたがその間に少年が割り込み、銃を交差させつつ、引き金を引いた。

銃のスライド音だけが響き渡り、銃の発射と同時に発生する発砲炎「マズルフラッシュ」も、銃声も、弾丸が音速に達する時の音「ソニックブーム」も無い。

男の体から血が噴き出し、次々に放たれる弾丸が男を吹き飛ばした。少年は素早く銃の弾倉を交換する。

刹那、吹き飛ばされた男が人間では有り得ない跳躍力で飛び掛かってきた。

少年は素早い身のこなしでそれを避けたが男の目的は少年ではなく、女性だった。

逃げる女性に飛び掛からうとしたその時、少年はワイヤーが巻き付けられた拳銃を構えて引き金を引く。

射出されたワイヤーの先端には銛のよつに尖ったフックがあり、ワイヤーはワイヤー同士、摩擦で擦れ合つ音を鳴らし、男の足に絡まつた。

「逃がすか！？」

少年はワイヤー付きの拳銃を引っ張ると男は女性に指一本届かず、後ろに引っ張られた。

凄まじい轟音とともに床が陥没し、コンクリートの破片が宙を舞う。少年はワイヤーを巻き取ると再び煙の中に銃口を向ける。
(こちらスカイアイ、被害者の保護を完了。心置きなくやつちやつていいぜえ、狼さん！)

「ロメオ、了解した」

少年はヘッドセットから流れた無線に吹き込む。

刹那、男は土煙から飛び出し、少年に飛び掛かつて来た。咄嗟の事に反応出来なかつた少年は男のタックルをまともに喰らい、宙を舞う。

同時に男は壁を蹴り、宙を舞つてゐる少年まで跳び上がり、腹部に一撃を叩き込んだ。

凄まじい速度で落ちていった少年の体は地面上に落下し、男同様に地面を陥没させた。

男は地面に降り立つと身動き一つしない少年に歩み寄る。

舌なめずりしながら歩み寄る様は先程の女性に對してのよつた下劣さは無いものの、やはり無気味だ。

男が少年を掴みあげようとしたその時、少年は目を開けて笑みを見せながら二丁拳銃を構えた。

「Spray with machine gun fire!!

(機銃掃射だぜ！！)

二丁拳銃の上下二連装の銃口から同時に四発の弾丸が、フルオート射撃で次々と男に吐き出されていく。

近距離で使われて拳銃は初めて真価を發揮する。

それを理解しているからこそその不意打ちは非常に効果的だ。

拳銃弾で弾き飛ばされた男は穴だらけながらも生きていた。

拳銃弾を受けて生きている例は珍しく無いが、その多量の穴で生きていらるるのは有り得ない。

少年は体を腹筋の反動で跳ね上げ、起き上ると同時に男も起き上がる。

拳銃で開けられた穴は塞がり、男は再び舌なめずりする。

「いい加減にくたばれよ、吸血鬼」

少年は舌打ちをしつつ、二丁拳銃の弾倉を交換した後、ホルスターに二丁拳銃を仕舞い、腰に差していた刃渡り30cmのナイフを鞘から引き抜いた。

少年はナイフを構えると左手で柄を逆手に持ち、柄の底に右手を沿え、切つ先を男に向ける。

月が雲の影に隠れ、周囲を消し去った。

紅い瞳がHUDの明かりに照らされて明るく光る。

数秒して雲の中から月が現れて周囲を照らし出した。

同時に二人は駆け出し、重く鈍い音が響き渡る。

月の明かりに照らされた二人の影は重なり合いながら静止していた。

男の胸にはナイフの切つ先が刺さり、鮮やかな血を滴らせてている。

二人の動きは止まつたように動かない。

不意にナイフから青白い電光が男の体に流れ、肉が焦げた匂いが漂う。

数秒の後に電光は消えて、少年はナイフを引き抜き、男を蹴り倒した。

男は痙攣しながら地面に倒れ、地面を血で濡らす。

紅い絨毯は鉄臭い匂いを発しながら瞬く間に広がり、水溜まりを作つた。

「こちら口メオ。任務完了だ。抹殺対象のヘクセは殺害した」
(了解。ああ、眠う……とつとと帰つて来いよ?)

「分かつてゐるよ」

少年は先程とは打つて変わつて柔らかな笑みを漏らすとHiroとくツドセツトが一体になつた装置に手を当てつつ入口に歩いて行く。その時、男が拳を振り上げ少年に殴り掛けられたとする。……

が、それより早く少年は二丁拳銃を構えながら振り返つた。

「Jack pot!!（大当たり!!）」

吐き出された四発の弾丸は男の眉間を撃ち貫き、男を吹き飛ばす。同時に男の体は溶けていき、コンクリートに溶け込んでいった。……

1 - 1・潜入調査（前書き）

第1話

吸血鬼……

誰もが一度は聞いた事はある単語だろう。

生命の根源と言われている血を吸う存在だ。

血を吸う存在などと笑う人もいるだろうが、実際、生物学的に利に適っている。

血液は高栄養の液体であり、ノミやシラミ、蚊等が良い例だろう。その血を吸う人間は「ヘクセ」と呼称されている。

勿論、存在は極秘で知っているのは政府高官と一部の優秀な自衛官だけだ。

大々的に公表すればという意見も有るだろうがヘクセの特徴がそれを困難にしている。

一つ、ヘクセは人間と同じ姿で、目視で見分けが付かない結果、人々は疑心暗鬼に陥り、暴動に陥る可能性が出て来る。

一つ、ヘクセは特殊な能力や並外れた運動能力を持っている。

ヘクセはその通り、特殊能力、つまりは超自然的な力操る事が出来たり、人間離れした身体能力を持つている。

前述の理由も加えると最悪の事態に陥ってしまう。

また、血を吸うという事はつまり、人間を必然的に襲うという事だ。さらに民間に伝えられないという事実を考慮した場合、被害者は何が何だか分からぬ内に捕食・吸血されるという事になる。

被害者は行方不明にするにしても、あまりに多過ぎる被害者に政府は特殊部隊を設立した。

「Hexe Annihilate Weapons and Killers」、通称「HAWK」は少數精銳の特殊部隊だ。

階級は問わず、若く優秀な自衛官達を集めて設立されたHAWKは言つてしまえば不正規部隊だ。

自衛隊の英才教育を施した親がいない子供や天才的な自衛官だけを

集めたこの部隊には徽章を六つも持つた化け物じみた自衛官さえいる始末。

どこの厨二病設定かと思うがそんな人物がいるのなら仕方ない。そして HAWK は、いや全世界の警察官や特殊部隊はある男を追っていた。

カズイクル・ベイ・シェペシュ。

彼は謎が多いが、大胆でヘクセ史上主義を掲げる秘密結社「シユトレイゴイカバール」を率いている。

シユトレイゴイカバールは言つてしまえばテロ組織だ。

人間は勿論、同胞のヘクセですら殺す集団であり、世界から極秘に狙われている。

様々な名前で呼ばれ、報道されている殆どのテロ組織がシユトレイゴイカバールなのだ。

そんな組織がある市に潜伏したとの情報を手に入れた HAWK は政府の特命を受けて、その市に潜入調査を開始した……

華景市。

80000人にも満たない人口の小さな市で 430 平方キロの面積のこの市に到着した一台の白いワゴン車。

「はい、御一行様、到着でございまーす」

口周りに無精鬚を蓄え、体格はがつちりし、糸目の男性は柄にも無い声で運転席から出て来る。

181cm の巨体に厳つい印象に、始めてみた人は熊を連想するだろ? その人物はノリノリで小さな莊、つまり、木造のアパートをツアーガイドのように紹介していた。

今年 34 歳の直江なおえ三村みつむら三等陸佐、それにしてもこの男、ノリノリで

ある。

「おっちゃん、何かキモいわ」

金髪のセミロングを後ろで結び、青い瞳の整った顔立ちの少年は頭の後ろで両手を組みながら小声で呟いた。

その声に口を尖らせた三村は先程の少年に切り返す。

「うつせ！ほつとけ！」

三村は17歳の日系ハーフの少年、ロイ・カブラギ陸士長を睨む。

「あらあらあ～、相変わらずですねえ、お一人さんはあ～」

ロングヘアの流れる黒髪に垂れ目で大人びた顔立ちの女性はロカッブの胸の前で腕を組む。

微笑みを湛えるその20歳の女性、比叡彩花^{ひえい あやか}三等陸曹はいつもの光景を温かく見守る。

「はいはい、そこまでですよ」

黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちのボーイッシュな少女は手を叩きながら一人を諫める。

「全く、相変わらずなんだから！」

19歳の少女、氷川優^{ひかわ ゆう}一等陸士は腰に手を当てながら嘆息を漏らす。

「と、そういう幸成は？」

ロイは周囲を見渡しながら呟くと、助手席で爆睡している少年を見付け微かに笑う。

「寝てるよ……」

ロイは頭をポリポリと搔きながら助手席に向かつて歩き、爆睡している少年の頭に一撃を叩き込んだ。

「ついた！」

少年は頭を押さえ、眠い目を開けながら、半ば憎らしそうにロイを見上げる。

その見上げた切れ長の目の片方、左の瞳は紅く染まっていた。

紺色のセミショートに整った顔立ちの少年は大きな欠伸を漏らすと助手席から降りた。

17歳の直江幸成^{なおえ ゆきなり}は六部屋ある荘を見て再び大きな欠伸を漏らす。

「着いたのか？」

「ああ。おっちゃん、説明をよろしく」

「おっ！」

三村は咳ばらいをするとワゴン車の荷台からノートパソコンを取り出し、ディスプレイを指差す。

そこに映し出されていたのは華景市の航空写真だ。

「今回華景市に潜入したのは他でも無い。ショトレイゴイカバールの情報を掴んだ。自分達はそれを殲滅する。ここまでにはいつも通りだな？」

三村の声に全員が頷くと、画面が変わる。

「今回、ショトレイゴイカバールがある財閥と接触した形跡が見付かった」

「財閥ですか？」

彩花は間延びした声で問い合わせる。

彩花が喋ると妙に気が抜けてしまつのはその口調か容姿か、判然としないがどちらにせよ和んでしまつ。

「神宮寺財閥。華景市を拠点とする財閥で市の資金源とさえ言える財閥だ。生命工学に突出した財閥だけに、ショトレイゴイカバールがその財閥に接近したのは何故か調べる必要がある。自分達はそれを調べながら、ヘクセを狩る」

「潜入調査ですか？」

「簡単に言えばそういう事だ」

優の声に答えた三村はエンターキーを押すと画面が変わる。

映し出されたのはストレートヘアでセミロングのボブカット、可愛い

顔立ちに赤縁の眼鏡の少女の写真が映し出された。

「神宮寺鳳寿、神宮寺財閥の御令嬢だ。現在、華景高校で一年生をやっている」

「成る程……ん？おっちゃん、さつき潜入とか言つたな？」

幸成は首を傾げながら苦笑いを浮かべると、三村はニヤニヤと笑つて幸成の肩を数回叩いた。

「察しがいいじゃないか？流石、HAWKでエージェントを担当しているだけあるな。お前には華景高校に潜入してもらう」

HAWKの隊員は五人。

その役職は五つあり、それぞれエージェント、オペレーター、メティック、メカニック、トランスポーターとなっている。

それぞれその名前の通りの仕事である為、察して頂くという形で……幸成はエージェント、ロイはオペレーター、彩花はメティック、優がメカニック、三村がトランスポーターを担当し、任務を行つている。

ここで話を戻そう。

「おっちゃん、それはおかしい！いや、確かに俺はエージェント担当だけど……俺、大学の過程修了してるし！」

「つべこべ言わない！お前は本来だつたら高校生だ。学校を嫌がるとは引きこもりの前兆か？」

「いやいやいや……！」

「はいはい。まあ、青春を楽しめるのですからいいじゃないですか？ウチはそんな余裕は無かつたですよお？」

彩花は幸成同様、大学の過程を修了し、医師免許を持つているが、高校での青春時代を送れなかつた。

そんな人の言葉を無下に出来るはずもなかつた。

「まあ、彩花さんがそういうなら……」

幸成は嘆息を漏らしながら呟くとロイが「羨ましいね」とほくそ笑む。

人の不幸でメシウマ、つまり「他人の不幸は蜜の味」という意味の笑いではないが、このロイの笑い顔、妙に腹立つ。

そんなロイに三村はこれこそメシウマという顔で言い放つた。

「ロイ、お前もだ」

「俺もかよ！」

「当然だろ？エージェントの補佐をするのがオペレーターの役目だ。明日からは新学期。そこにお前達が転校というシナリオで一年

生に入つても、『うづ

「ボクも一歳若ければ入れたのに」

優は頬を膨らませながらそっぽを向く。

何か、不安になってきたな、ホント……

幸成は空を見上げると苦笑いを浮かべたのだった……

登場人物：HAWK（前書き）

登場人物：HAWK

登場人物：HAWK

直江 幸成 (17)

階級：陸士長

コードネーム

「ロメオ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」では現地に赴く「エージェント」を担当している。大学の教育過程を修了している。紺色のショートヘアで切れ長、左目が赤い瞳のオッドアイ、身長は172cm、整った顔立ち。性格は平時は真面目で礼儀正しい好青年、有事は仇成す者は皆殺しにする冷徹な性格。ヘクセ秘密結社「シユトレイゴイカバール」を追つて華景高校に潜入調査をする事となる。

ロイ・カブラギ (17)

階級：陸士長

コードネーム

「スカイアイ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」ではエージェントを補佐する「オペレーター」。金髪

のセミロングを後ろで結んでいる。身長は174cm、青い瞳に整った顔立ちの日系ハーフ。女垂らしな性格で女性を見たら声をかけずにはいられないが、作戦時には眞面目に幸成をサポートし、監視カメラをハッキングするなどしてサポートする。共に華景高校に潜入する。

比叡 彩花 (20)

階級：三等陸曹

コードネーム
「アンビュランス」

一人称「ウチ」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」では治療を担当する「メディック」。垂れ目で大人びた顔立ち。身長は165cm。Dカップ。おつとりとした口調で喋る。18歳で大学の卒業過程を終了しており、薬品の知識は医者と同等かそれ以上。

氷川 優 (19)

階級：一等陸士

コードネーム
「アーキテクト」

一人称「ボク」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」ではエージェントの武器を作る「メカニック」を担当している。黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちの為、美少年に間違われるがボーアイシッシュな少女。Aカップ。身長は168cm。可愛い物と銃が大好きと変わった趣味を持つ。意中の人には尽くす性格。家庭的で家事が得意。

直江 三村 (34)

階級：三等陸佐

コードネーム
「フリューゲル」

一人称「自分」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」においてエージェントを輸送する「トランスポーター」を担当している。「HAWK」の中で最年長。口周りに無精髭を蓄えていて、体格はガツチリしており、目が細い。身長は181cm。面倒見がいい性格でノリがいい。部隊の仲間からは「おっちゃん」や「直江さん」と呼ばれている。

晴れ渡る青空。

雲の無い青空の薄い青は人の心を落ち着かせる。

その薄い青に輝く太陽は街を明るく照らしていた。

小さなこの市は中心街も人通りが少なく、車の通りも少ない。

田舎とも言えるこの市を中心街に幸成とロイが潜入を命じられた「華景高校」がある。

華景高校は生徒数が450人程度の学校だ。

華景高校から幸成達が暮らすアパート「雲莊」は徒歩20分。軽い運動には調度いい距離だ。

幸成は紺色のブレザーにネクタイ、淡い藍の鼠色がかつた色「湊鼠」のズボンに身を包み、カバンを肩に担ぎながら空を見上げた。

「晴れてるな……」

思わず呟いた幸成は左目に触れた。

流石に紅い瞳は隠さなければ、彩花が気を利かせて買ってきたのが黒のカラー・コンタクトだ。

実際、カラー・コンタクトで瞳は隠れたが、カラー・コンタクトは目にあまり良くないと聞く。

多少目に違和感があり、早く馴れなければと溜息を漏らす。

その時、幸成の横でロイの声が聞こえ、幸成は溜息を漏らして、ロイを見遣った。

単純に言おう。

ロイはナンパをしていたのだ。

ロイがナンパしていたのは墨を流したような美しい黒髪を肩まで伸ばし、左右前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている少女だ。身長は162cm、二重瞼で目鼻が整い、唇も潤い、綺麗なピンク色をしている。

HAWKの巨乳担当の彩花よりも大振りの胸が思わず目に入った幸

成は反射的に田を逸らしつつ、道の反対側にいるロイに歩み寄った。

「君つて華景高校の生徒? 何年生?」

「あの……えっと……」

返答に困つて、白く典型的なセーラー服を着た少女は怯えたように周囲を見渡している。

田舎だからナンパの経験が無いようだが、このプロポーションと姿なら間違いない東京等の都会でナンパかモデルスカウトに捕まりそうであった。

ロイが返答に困っている少女に、答えを待たずに次の質問をしようと口を開いたその時、幸成の拳がロイの頭に直撃する。

頭を押されたロイが口を開くより早く、幸成は「すいません」と少女に一礼し、ロイの襟を掴んで足早に学校に向かつて行った。

「何だったのかしら?」

少女はキョトンとしながら、ロイを引きずつて行く幸成を見送った。

「サヤ~、ねはよう」

サヤと呼ばれた少女は振り返ると、駆け寄つてくる小柄な少女に挨拶を返し、学校に歩いて行った……

先程の少女から離れた事を確認した幸成はロイの襟から手を離し、溜息混じりに呟いた。

「お前は何なんだ?」

「何なんだとは、何だ!」

幸成に毅然とした態度で返したロイはやたらと堂々としている。

本当に何なんだ、ロイツは?

「仮にも潜入だ!! 朝っぱらから堂々とナンパする奴が何処にいる

!?

「ハツハツハー！」ここに居ますぜ」
ロイは悪びれずに自らを親指で差す。

「ダメだ、コイツ……

幸成は紺色の髪を搔き上げると面倒臭そりに、苛々しながら多少声を荒げ、ロイに言つ。

「おっちゃんに目立つなって言われてるんだから少しば重しろ！
！ナンパは悪い事とは言わない……いや、悪い事だが……登校初日
でアホな事をやらかすな、アホ！」

「……幸成、声大きい」

ロイの言葉にハツとした幸成は周囲を見渡す。

学生や通勤者の視線が幸成に集まり、周りの視線を独り占めとはまさにこの事だった。

幸成は声のボリュームを落とし、続ける。

「とにかく、だ。目立つな！」

「はいはい」

ナンパしてた時より目立つてたんだが、ヒツツコミたい衝動を喉の奥で飲み下したロイは頭の後ろで手を組んだ。

なんだかんだ、気が付いたら既に学校の前、一人は校門の中に入つた。

華景高校は木造で、四階建ての学校だ。

木造と言つても、昭和をモテルにしたドラマで見るような風情がある学校ではなく、真新しい学校だ。

元々は古い学校だったが、神宮寺財閥が資金を出して、今の学校のような木の学校に新しく建て替えたという訳だ。

木の温かい雰囲気を醸し出す華景高校に入ると、木の心地の良い香りが一人を包み込む。

杉の柔らかく、温かい香りを一人は肺一杯吸い込むと、幸成は昇降口前の校内の案内地図を見る。

昇降口から右に曲がれば職員室、左は教室棟だ。

取り敢えず転校初日の挨拶にと、幸成とロイは上履きに履き換えて、

職員室に向かう。

「しかし、その監視対象者が一年生なら、一年生に編入させればいいだろうに……」

手を頭の後ろで組んだロイが咳くと、幸成がロイを一瞥して答える。「いくら潜入調査つて言つても、年齢的な外見は『」まかせない。しかも、学費は払わなきやいけないだろ？ 学費が一人合わせて二年分しか出なかつたそうだ……」

流石、貧乏部隊と二人は同時に溜息を付いた。

HAWKは民間に極秘で吸血鬼と戦つてゐる少數精銳の部隊、と聞けば最強と誉れ高い特殊部隊の「SAS」や映画等でも有名な「デルタフォース」といつた特殊部隊を思い浮かべる人も多いだろ。しかし、HAWKは吸血鬼（ベクセ）という非日常を相手に、しかも極秘で戦うという理由で防衛費は少ししかもらえていない。

何故なら、政府高官や一部の自衛官しか知らないヘクセという存在に防衛費を多く出したら、それこそ金の流れを辿つて最終的にHAWKにたどり着いてしまう。

貧乏とは言つても、最低限の弾薬の補給や武器の支給も行われているが、それもやはり最低限。

支給される弾薬は「9mmパラベラム弾」と言われる威力が低い拳銃に使用する弾丸と、武器は米軍が使用する「M9」とベレッタ社の拳銃「M92FS」のエリートモデル「M92FS-エリートIA」が数丁。

極秘部隊なら映画で暗殺に用いられる「サブレッサー」という弾丸の発砲音を抑制する装備も使うと想像するだろ？ が、実際サブレッサーは消耗品であり、用いる事が出来ない。

その為、わざわざ部隊に武器を改造する整備士（メカニック）という職業が設けられているのだ。

そして今回の潜入の拠点も木造六部屋の小さなアパートという訳だ。唯一、ヘクセは創作上の吸血鬼とは違い、心臓に杭を撃ち込む事をしたり、銀の弾丸でなければ倒せないという訳ではない事が救いだ

るつ。

それでも大量の弾丸が必要だが……

「「貧乏って辛いな……」」

二人は同時に呟くと、校長室の扉を開ける。
二人が挨拶をするより早く、学校長「佐藤正臣」は一人に笑顔を見せた。

「君達が、転校生は？」

「直江幸成です」

「ロイ・カブラギです」

「一人ともそう硬くならずに、気楽に構えて下さい。そこに掛けて下さい」

「「失礼します」」

二人は同時に答えると、黒いソファに腰掛け、佐藤も腰かける。

「君達には一年生のBクラスに入つてもらつ。この学校の事で分からぬ事があつたら、Bクラスの学級委員長に頼むといい」

「学級委員長？」

幸成が小さく呟くと、扉が開く音が聞こえ、優しげな声で入室の挨拶が聞こえてきた。

佐藤はゆっくりと立ち上がると声の主を見ながら「彼女が学級委員長の三神沙耶那さんです」

二人がソファから立ち上がり、後ろの校長室の扉を見ると同時に素つ頓狂な声を漏らした。

狐につままれたような、所謂ボカソとした顔で少女を見る。少女は、朝にロイがナンパしていた少女だ。

「貴方達は朝の……」

沙耶那は口を掌で隠し、驚いている。

第一印象は最悪だろ？……

幸成は恨めしそうにロイを見るが、ロイは運命の出会いといった表情で喜んでいる。

誰のせいで胃が痛んでいると思つてんだ、このスタイルッシュ能天

氣野郎？

幸成は軽く胃を押さえつつ、少女に会釈すると少女 - - - 沙耶那は満面の笑みで返した。

「直江さん、カブラギさん、校長先生からお話は伺つております。ようこそ、華景高校へ」

沙耶那は天使のような温かい笑みで一人を迎えたのだった……

職員室を出て、昇降口を通りた三人は奇妙な雰囲気だった。

初対面という事もあるだろうが、それよりも最大の原因は朝のナンパだろう。

いくら三神沙耶那が学級委員長で、寛大な人物でも流石にナンパは……

幸成は深い嘆息を漏らすと、「三神さん」と沙耶那の名前を呼び、歩みを止めた。

「朝は本当にすいませんでした」

取り敢えず今は謝るしかない。

失礼をしたのはこっちなのだから……

「この馬鹿が失礼な事を……」

「馬鹿野郎！ 可愛い女の子を見たら声をかける。基本だらう何の基本だよ？」

幸成は素早くロイの後頭部を押して、無理矢理謝らせた。

まるで犯罪を犯しても、悪びれない息子を謝らせる親の気分だ。

沙耶那は数回目をしばたかせると笑みを見せた。

「朝の事は気にしないで下さい。ビックリはしましたけど、気にはしてませんから」

鈴の音のように済んだ笑い声をしてみせる。

つくづく良い人で良かつたと思った幸成は顔を上げて笑みを返した。

「教育棟の三階が一年生の教室です」

沙耶那は階段を上がりながら続けた。

「二階は三年生、四階は一年生です

「一階は何の教室ですか？」

「一階は補習の教室ですよ。テストで赤点を取つたらその教室で放課後、一ヶ月の間勉強をして、その後追テストを行つて八割の点数を取つたら晴れて自由の身となります。とは言つても内容は難しく

なりますので、中々自由には成れないですが……お一人共、気をつけて下さいね？」

「だつてさ、ロイ」

幸成はロイを肘で小突くと「俺！？」と素つ頓狂な声を漏らす。大学を修了している幸成はともかく、高校を修了していないロイには少なからず関係のある話だろう。

その時、二人の様子を見ていた沙耶那は口に手を当てて笑った。

「おー一人は仲が良いんですね？」

「まあ、仕事の都合ですから……」

「仕事？」

幸成の「仕事」という単語に沙耶那は小首を傾げた。やつてしまつたという後悔よりも先にこまかす言葉が幸成の口から飛び出す。

「はい。身内の仕事の都合です。俺とロイの身内の、同じ仕事場で働いているので転勤したら毎回一緒に学校に転校になるんですよ」少なくとも嘘は言つていない。

HAWKのメンバーは身内同然だし、ヘクセを狩るという「仕事」には変わり無いからだ。

言葉とは少し変えれば真実にも偽りにも変わり、解釈の仕方でどのように捉えられる。

結局、言葉とはそういう物だ。

幼い時から話術を仕込まれた幸成には造作も無い。

「だからそんなに仲が良いんですね」

沙耶那は二つりと微笑み、階段を上り切る。

しかし、よく笑う人だと思い、幸成は沙耶那の後ろ姿を一瞥した。揺れる黒髪が窓から漏れる光を浴びて光り、その美しい色を際立たせる。

モデルのようなプロポーションに見とれているうちに、教室の前にたどり着いた。

一クラス約30人の男女共学の教室からは転校生が来るという事に

浮かれている為か、妙に騒がしい。

たいていの場合、男子は女子が、女子は男子が来たらテンションが上がるものだと聞く。

悪いな、一人とも男で……

幸成が自嘲的な笑みを見せると同時に沙耶那が教室の扉を開け、中に招き入れる。

二人は一礼しながら入室すると女子の黄色い声が響き渡り、幸成は思わず気圧された。

ロイは「どうと何故か英雄気取り（？）で手を振っている。能天氣でいいよな……

いや、俺が気負い過ぎ？

幸成は苦笑いを浮かべるとクラス全員を見渡す。

「自己紹介をお願いします」

沙耶那が一人を見ると、ロイから口を開いた。

「ロイ・カブラギ。よろしく頼むわ。ちなみに女性なら可愛ければ誰でもOKだ」

相変わらずだ……

とは言つても、こんな馬鹿が国の密命を受けた者だとは誰も思わないだろ？

「直江幸成です。早く馴染めるように努力します。よろしくお願ひします」

同時に女子の黄色い声が教室中を揺るがし、幸成は苦笑した。

何なんだ、この空氣は……！？

正午になり、雲莊で待機していた優が昼食のチャーハンを作つては、挨拶に廻っていた三村と彩花が帰ってきた。

一人は同時に居間に大の字に倒れる。

雲荘の一部屋の広さは居間が8畳、お風呂、トイレ付きでキッチン完備、と聞けば良いだらうがやはり貧乏部隊。

かなり古い建物であり、「キブリは勿論、蛇や蜥蜴も入って来る始末。

しかも、元は幽霊屋敷と言われていた為、優とロイから猛反対された。

ちなみに彩花は大賛成であった……

結局、三村のござ押しと予算の都合でこの雲荘となつたのだ。

「お疲れ様」

優はフライパンのチャーハンを二等分に皿に盛り、両手で器用に運び、中央のちやぶ台に置いた。

「どうだつた？」

優は蓮華をそれぞれのチャーハンに差しながら問い合わせる。

挨拶、というのは実際の所は建前であり、この街の噂を収集する為だ。

噂には都市伝説も含まれる。

つまりは口裂け女や人面犬等の話だ。

火の無い所からは煙りがたないとは言つたものだが、実際はその通りである。

口裂け女も、紐解けば様々な事件が、まるで伝言ゲームのように口頭で語られるうちに変化していったのがよく分かる。

ましてやヘクセ自体が殆ど都市伝説のような物であり、噂として語られるならまさしく、口裂け女のように語られているだらう。

そう踏んだ三村は情報、つまり噂を収集していたのだ。

「収穫有り、だ」

三村はチャーハンの蓮華を掴むと一口食べてから続けた。

「最近、この街で変死体が多発しているらしい。血を吸われた死体が、な」

「ヘクセですねえ」

彩花はのほほんと応えると、三村はチャーハンを搔き込む。作った本人としてはしつかり味わって欲しいと思うだろうが、任務の話の時はさして気にしていなかつた。

「学生達の間に流布していた『血吸い人』の話に酷似している『血吸い人?』

「夜、帰りを急いでいた女性が血吸い人に襲われて、血を吸われるという話だ。現代版吸血鬼伝説みたいな都市伝説だがそれが現代に蘇つたと住民達は噂している」

「噂つて凄いですねえ」

彩花はいつの間にかチャーハンを食べ終え、そしていつ煎れたか分からぬ紅茶を啜つてゐる。

彩花つて凄いと優は苦笑いを浮かべた。

「今回、シユトレイゴイカバールを相手にするという事情から、政府から偵察衛星を貰つた。アメリカ軍のお下がりだから、旧式だが

……」

やつぱり貧乏部隊……

が、偵察衛星を貰えただけ良しとしよう。

三村はチャーハンを食べ終えた皿に蓮華を置き、白いワイシャツの胸ポケットから煙草を取り出し、口にくわえた。

そして、煙草に火を点して、肺に紫煙を吸い込むと一気に吐き出し、小声で咳く。

「幸成、楽しくやつてるかな?」

「心配なんですかあ?」

彩花は新しい紅茶にミルクを入れて、スプーンで搔き混ぜると口に運ぶ。

飲む前に香りを味わうその姿は優雅で上品なお嬢様そのものだ。

「まあな……あまり人と触れ合つ事が無かつたからな、幸成は……」

「レンジャー徽章乙、空挺徽章、格闘徽章、体力徽章、射撃徽章を保有でしたつけ、彼?」

「特殊作戦徽章もだ」

徽章とは優秀な自衛官に送られる、言わば勲章と思つて貰えればいい。

それは様々なる物があるが、陸上自衛隊は15種類有り、そのうちの6種類を幸成が有している。

「幸成は小さな時から訓練を受けていたから、無理は無い。化け物じみた体力と回復力、そして瞬発力にあの瞳……自分だつて、最初はヘクセを疑つたさ」

三村は眉間に皺を寄せながら煙草を吐き出す。

過去を思い出しているようなその顔には深い皺が刻まれていた。

「ヘクセのフローロモン反応は陰性の為、人間という結果が出た。しかし細胞活性速度は通常の一倍。まるでヘクセと戦う事を運命付けられ、この世に生を受けたとしか思えないんだよ、幸成は……」「だから捨てられていたのかもしれませんねえ」

彩花は小さく呟くと、紅茶のカップを置いて溜息をついた。

「だが、自分が幸成を拾つた以上は最後まで育てるのは当然。そりや育ての親なら心配するだろ?」

三村は灰皿に煙草の灰を落とすと、優はチャーハンの器を片付け始めた。

「とにかく、大丈夫ですよ。イジメとかも対処出来そうですから」「いや、自分が心配しているのはそこじゃない……幸成に彼女が出来るかだ」

「そこですか!?いや、初日に出来たら凄いですけど……出来ないでほしい……」優は聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟くと、彩花は口に手を当て、声音に笑いを含んで優に呟いた。

「頑張つて下さいねえ!」

優は動きを止めると、顔を引き攣らせた。

優の呟きが聞こえなかつた三村はとつと理解出来ず、一人を交互に見遣る。

と、不意に三村は思い出したように口を開く。

「そういや、偵察衛星とパソコンとのリンクつてどうやるんだ?」

「やうこつのはロイ君の担当ですかりあ、ウチ達にはあ分かりませんよ～？」

「仕方ない。あいつらが帰つてくるまで自由時間だ。偵察衛星が使えなきや、ヘクセを探すにも探せないからな」

三村はやつらのと、灰皿に煙草を押し付けた……

一方、三村達が昼食を取つてていた頃、幸成とロイも昼休みとなつていた。

高校の休み時間は基本的に10分だが、昼休みだけは昼食を食べる時間も含めて30分の休みだ。

それぞれが思い思いの時間を過ごす昼休みは生徒達には憩いの時間に等しい。

その中で幸成とロイはそれぞれ購買で買った焼きそばパンとタマゴサラダのサンドイッチを手にしながら屋上に出た。

屋上は中央に数個ベンチがある簡素な所で落下防止用の金網が張つてある程度だ。

一人はベンチに座るとパンの袋を開ける。

食欲をそそる香りが一人の胃袋の虫を喰らせた。

「腹減つてたんだな」

幸成は小さく呟くと、焼きそばパンを咀嚼する。

「お前は良いよな、ホント」

「ロイ、どうした?」

「お前、女にチヤホヤされ過ぎだぜ?」

「そうなのか?」

幸成は素つ頓狂な声を漏らすと再び、パンを咀嚼した。

朴念仁、唐変木を体現する幸成はと言うと、女子に黄色い声をあげられ、女子が周りを取り囲み、昼食に誘われるという男子なら憧れるであろうハーレム状態となつていた。

そしてそれを全て蹴るという愚行を犯した幸成は今に至る。

ロイはとつて逆に女子からではなく男子に受けていた。
男子はお調子者や目立つ者を離し立てる傾向があるが、ロイはそれに当たる嵌まり、一躍男子の人気者となつたのだ。

最も彼にとつては不本意であり、幸成のような行為は恨み節の対象

になる。

「どうして幸成だけモテるんだ！？」

ロイの魂の叫びに幸成は冷静に突っ込んだ。

「その性分だろ？？」

「マジで返されると返答に困るんだが……」

「顔は良いのだから、考えられるのはそれだけだろ？からな

「つまり、黙つてればイケメンつて事か？」

「そういう事になるだろ？な」

幸成はそう答えると紙パックの小さな牛乳にストローを差した。

「モテてる奴に本気で返された時の破壊力半端ねえ！」

しかし、今日はよく喋る、と幸成は横で騒ぐロイを一瞥し、牛乳を吸う。

と、その時、屋上のドアが開き、見知った顔が現れた。

「あれ？先客がいた」

沙耶那は一人を見付けると微かに微笑む。

手には女の子らしい可愛い風呂敷に包まれた弁当箱がある。

そしてその沙耶那の後ろには別にもう一人、小柄な少女がいた。薄い茶髪に右側のサイドテール、前髪は自然な感じで童顔な少女は、外見だけでは高校生とは分からず、小学生に見紛う程に小柄だ。

「サヤ、この人達が転校生？」

「そうだよ、ナツ」

沙耶那是ナツと呼んだ少女を一瞥すると二人に紹介する。

「こちらは私の友達の藤富菜月ちゃん。△クラスだからあまり交流ないだろうけど、仲良くしてあげてね」

「サヤ、子供扱いしないでよ！取り敢えずよろしくね」

菜月が笑い、その口元から八重歯が零れた。

その八重歯が彼女の幼さを強調している。

流石にこの幼女と言える少女にロイは手を出さないだろ？と幸成はロイを一瞥した。

が、その考えは甘かつたと打ちのめされる。

「俺はロイ・カブラギ。可愛い女の子なら誰でもいい！ストライクゾーンしかない男だ！」

「……つまりは変態さんって事だよね？」

菜月の一言はロイの熱い魂を木つ端みじんに粉碎するには十分であった。

アイデンティティをクラッシュされたロイは呆然と、真っ白に燃え尽きる。

そう、真っ白に……

「いつもここで昼食を食べてるんですか？」

「うん。 そうだよ」

菜月は笑みを浮かべて頷くと向かいのベンチに腰を下ろした。ベンチにギリギリ足が届く程度の身長の菜月は足をパタパタと動かす様子はどう頑張っても子供にしか見えない。

「女子は皆騒いでたよ？ 王子様が現れたってさ」

菜月は風呂敷を開けて弁当箱の蓋を開ける。

「王子様って俺か？」

ロイの一言に菜月は笑みを搔き消し、不穏な笑みで切り返す。

「変態さんな訳無いじゃん、馬鹿なの？」

「この子、おつかねえ……」

幸成が苦笑いを浮かべると、沙耶那は弁当を口に運ぶ。菜月はと詰つと、幸成をまじまじと眺めている。

「カツコイイよねえ？えへっと……」

「直江幸成です」

「ユキ君だね？芸能事務所に所属してたりする？」

「いや……」

「勿体ないよ、絶対売れるだろ！」

「俺はそういうの興味ないから……」

「釣れないなあ」

菜月は頬を膨らませると水筒の蓋をコップの代わりに、少し濁った水のような液体を注ぎ、口に運ぶ。

スポーツドリンクのような液体を口に運んだ菜月は一息つく。

「またそれ飲んでるの？」

「美味しいよ？ サヤもどう？』

「私は遠慮するよ

「その飲み物は？」

幸成の問い掛けに菜月は飲むかと目で問い合わせるが、幸成は「いい」と答える。

「そう言えば、夜に外に出ちゃ 駄目だよ」

菜月は水筒に蓋を取り付けながら首傾げながら上田で幸成を見る。

「どういう事ですか？」

「最近、無差別殺人が起こってるんですよ」

「三神さん、無差別殺人とは一体？」

「沙耶那でいいですよ」

沙耶那は柔らかい笑みで答える。

幸成は咳ばらいをし、「分かりました、沙耶那さん」と訂正した。
「夜に歩いていた人が血を吸われるという事件です。現在、警察が
捜査していますが危険な為、市民には夜間の外出禁止令が出ていま
す」

成る程、政府の手回しが既に完了していったか……

「その犯人なんだけどね？ 運よく逃げ延びた人の話によると白い狐
の御面を付けた、刀を持った白い着物の人なんだって」

「白い狐？」

「この市の伝承に白狐の伝説があつて、鬼を退治して神様になつた
つて話だよ。でも、その狐とは違うね」

菜月は笑い声を漏らすと、沙耶那は真面目な顔で切り返す。

「しかし、生き残った人が錯乱して犯人を見間違えたかもしれない
ですよ？」

「可能性としては無くは無いが、そのような出で立ちをしているな
ら犯人と考えられなくはないですね」

幸成は牛乳パックを握り潰す。

白狐なんて今まで聞いた事がない。

刀を持つていてると言つていたが、ヘクセにも武器を持つていてる者はいるが、御面は見たことがない。

シユトレイゴイカバールの儀式か何かか？

幸成が思考を巡らせていてると同時にチャイムが鳴り響いた。

「……俺達はもう行くわ」

「分かりました」

「おい、行くぞ」

真っ白に燃え尽きたロイを無理矢理立たせると幸成は歩いて行く。アイデンティティを完全破壊されたロイは力無く幸成に引っ張られて行つた……

古い教会……

鋸びた十字架と寂れたステンドグラスとイコン|画。

そこには多数の老若男女が集まつていた。

中央の蠟燭が立てられた台座の前に立つのは若い男性だ。

男性は旗が括り付けられた槍を掲げている。

旗には紅い月をバックに髑髏じくろがあり、その髑髏に交差する鎌が描かれた悍ましい物だ。

「我々、シユトレイゴイカバールは計画の第一歩を歩き出す。今日が最初の一歩だ。この世の下等な人間は奴隸と食料に……そして我々、ヘクセが世界を築き上げる」

男の声に多くの者が歓喜の声をあげる。

「「下等な人間供に死を！！」」

彼らの輪唱が周囲を揺るがし、教会に騒ぐ。

「人間は我々を化け物として扱つたが、一度の大戦を引き起こした

人間は我々以上の化け物だ。このままでは人類が滅びる。我々が愚かな人間に代わり、世界を支配する」

輪唱が結託の声に変わる。

古いプロパガンダのような演説を終えた男は片手を高く振り上げた。

「さあ、ゲームの始まりだ！！」

設定（前書き）

1 - 4までの設定です

設定

H A W K

正式名 : H e x e A n n i h i l a t e W e a p o n s a n
d K i l l e r s

吸血鬼を殲滅する為に作られた特殊部隊。管轄は陸上自衛隊。少数精銳の為、隊員は5名。存在は民間には極秘とされている。資金の流れから足取りを掴ませない為に防衛費は少ししか貢えていない。

担当

・エージェント

現地に赴き、ヘクセの殲滅を担当する隊員。殲滅以外にも潜入調査やヘクセに捕まつた人間の救助等もある。

・オペレーター

エージェントに無線で指示を出す隊員。レーダーや偵察衛星を用いてエージェントに指示を出したり、潜入調査の補佐を行う。

・メディック

エージェントの治療を行う隊員。身体的治療から精神的治療等を行う。また、エージェントを安心させる為に隊員は女性が選ばれる。

・メカニック

エージェントの使う武器や道具を作る隊員。エージェントやオペレーター等の使う武器や機器を作る事が主な任務。

・トランスポーター

エージェントを現地まで輸送する隊員。車の他にヘリコプターを操縦し、現地に向かう為、エージェントの次に危険な担当と言える。

ヘクセ

人間と同じ姿だが、化け物じみた身体能力や特殊な能力を扱う事が出来る人間の総称。所謂「吸血鬼」で人を襲い、血を吸う。「朝に活動出来ない」や「ニンニクの匂いに弱い」、「十字架や銀の弾丸を受ければ体が消滅する」、「心臓に杭を刺せば死ぬ」という事は無く、弾丸等で倒せる。しかし、生命力は当然のように高く、頭を撃ち抜いたり、心臓を串刺した程度では死がない。前述の特殊能力からドイツ語で「魔女」という名前が与えられている。

神宮寺財閥

神宮寺龍一郎が率いる財閥。薬品・生物産業に秀でている。ヘクセと何らかの繋がりがあると思われているが具体的な証拠がなく、財閥という理由で警察も手出し出来ないのが現状。

シユトレイゴイカバール

ヘクセ史上主義の秘密結社。創設者はカズイクル・B・ツェペシュ。目的は不明。エンブレムは紅い月に髑髏、それに重なる交差した鎌が特徴。人間を夜な夜な拉致して血を吸うという悪業を行っている。人間は勿論、裏切り者のヘクセですら問答無用で殺害する。

華景市

某県にある市。市では行方不明事件（ヘクセに殺された）が多発している。人口約80000人、面積は430平方キロ。

華景高校

華景市にある最も大きい木造の高校。男女共学。学力は平均レベル。全校450人の学校。運営しているのは神宮寺財閥。

雲莊

HAWKメンバーが住んでいる木造のアパート。家主は直江三村という事になっている。部屋数は六つ。一部屋は空き部屋。

101号室

・直江三村宅

102号室

・比叡彩花宅

103号室

・会議室兼反省会会場

201号室

・直江幸成宅

202号室

・氷川優宅

血吸い人

帰宅を急ぐ少女が血吸い人に襲われて血を吸われたという都市伝説。

白狐

華景市に伝わる民間伝承。鬼を退治した白狐の話。白い狐の御面に白い着物の姿に刀を持つた出で立ち。血吸い人から逃げ延びた人物の証言から明らかになつた存在で不確定。また、ヘクセ、シユトレイゴイカバールとの関連性も不明。

ホームルームの終わりとともに高校の授業は終わった。

授業が終わり、帰れるという瞬間が高校生のみならず、全ての学生達には学校生活で最も幸せな瞬間ではないだろうか？

担任の話が終わり、挨拶を終えた幸成とロイはカバンを掴んだ。

言つてしまえば彼らにとつてここからが仕事であり、学校生活はターゲットである「神宮寺鳳寿」と接触しなければ意味が無い。

しかも学年が違うから会う確率は有つても、会話する確率は圧倒的に低い為、下手をすれば三年生に突入し、さらに下手をすれば卒業で、潜入の意味が無くなる。

なら、こちらから声を掛ければと思うかもしれないが、いきなり訳の分からぬ人物が声をかけたならそれこそ目立つ。

自然に、かつ確実に探しをかけるなら、最終的に効率がいいのは「何かきっかけを手に入れてから接触し、信頼を勝ち取る」という事になる。

つまり、運任せ……

エージェントが聞いて呆れるが、現状は仕方ない為、接触出来るまではヘクセを狩るしかない。

「さて、帰るか」

幸成はカバンを掴み、肩に担ぐとロイは「ああ」と答える。菜月の「変態さん」の一言が相当効いたらしく。

（そりや、あれだけストレートに言わなければ無理は無いな）

ロイには悪いが良い薬にはなつただろう。

「幸成君、ロイ君、一緒に帰りませんか？」

そう声をかけたのは沙耶那だ。

沙耶那は相変わらず優しげな笑みを湛えている。

どんな事をすれば怒りますか、と聞きたくなる程、笑顔が絶えない。

それに容姿も合はさつて、完璧な美少女だ。

そんな沙耶那の後ろにはロイの天敵に成り得る可能性を秘めた菜月が隠れていた。

まるで姉妹のような構図に思わず幸成も頬を緩ませる。

「幸成君達のお家って、確か雲莊ですよね？」

「ええ」

「私の住んでる神社は雲莊の近くですから一緒に帰りましょう?」

「それなら是非」

幸成は笑みを見せると、不意に女子の目線が冷たくなった。いつかの任務の時に、複数のヘクセに狙われた事があつたのだが、その時感じた殺気に似ている。

（二、ここは戦場か……？）

「行きましょうか？」

「そうですね」

幸成は居心地の悪い殺気に身震いをすると教室を出た……

イヤホンから洩れる音楽に合わせて鼻唄を唄つ優は弾薬を作つていた。

正確には改造していた。

机には拳銃弾が分解されている。

彼女のモットーは「古い技術を転用し、最新の物に」であり、今もそのモットーでHAWK専用弾薬を作つていた。

HAWK専用弾薬「9mmシャルデンブファーゼ音速弾」は通常の拳銃弾「9mmパラベラム弾」を改造した優特製の弾薬だ。HAWKは貪りの部隊。

その特性上、消耗品である「サプレッサー」は使えないのが現実。かと言って、隠密作戦を行う部隊が銃声を漏らす訳にもいなかい。

実際、銃声は「発射ガスの爆発音」だけではない。

自動拳銃を例に取ると、前述の爆発音に加えて、「スライドが動く機械音」と「発射された弾丸が音速に到達する時の衝撃音」がある。スライドの機械音を消すにはスライドを手動にしなければならない為、ヘクセ相手の火力不足は否めず、それは出来ない。

しかし、衝撃音と爆発音は消そうと思えば消せると優が豪語し、作つたのが「9mmシャルデンップファー 亜音速弾」だ。

一般的に爆発音を消すのはサプレッサー、衝撃音は火薬を減らした亜音速弾の役割だが、それを弾薬に搭載したのがこの弾薬である。そこで優が参考にしたのは旧ソ連が開発した消音弾薬「SP-4弾」だ。

この弾薬は弾丸の下にピストンが有り、そのピストンを無色火薬で撃ち出し、ピストンが弾丸を撃ち出す。

その時にピストンが薬莢に蓋をし、発射ガスを閉じ込めて音を消すという代物だ。

それを9mmパラベラム弾に仕込んだ物が9mmシャルデンップファー 亜音速弾である。

無論、射程は落ちるがヘクセとの交戦は室内の、それも広くない空間が多い為、十分に通用する。

「よし、出来た！」

優はイヤホンを外し、音楽プレイヤーの電源を切ると作った弾薬を予め並べていた弾薬の列に並べた。

彼女はこの弾薬の他にも、古くなつたコンピューターを再利用して様々な機器を作るといった事を成し得ている。

弾薬を一通り作り終えた優は背伸びをすると、弾薬を片付けながら時計を見た。

「もう4時過ぎたんだ。夕食を作らないと……」

夜間任務の為、夕食は早めに取り、胃を馴らすといつのがHAWKの慣例である。

優はゆっくりと立ち上ると自分の部屋から出て、一階の空き部屋

-----作戦室兼集会場に向かって階段を下りた。

と、道路に幸成とロイが歩いて来るのが見え、優が帰宅の挨拶をしようとして言葉を止める。

幸成とロイの後ろに女の子が一人。

それもどびつきりの美少女だ。

不意に三村の「彼女」という単語がリピートされた。

「優さん、ただいま」

幸成の声に優は棒読みで挨拶を返し、美少女を見る。

「この女の子達は？」

「初めてまして、三神沙耶那です。こちらは友達の藤富菜月ちゃんです」

「初めてまして」

沙耶那と菜月は優に一礼すると笑顔を見せた。

菜月は優をまじまじと見ると口を開く。

「ユキ君のお兄さん？」

「幸成の『お姉さん』の氷川優です」

優は引き攣つた笑みを見せると、「家の幸成とはどびついった関係で？」と繋げる。

（家のつて、いつからあんたの実姉になつた？）

幸成は苦笑いを浮かべると、沙耶那は動じず、笑顔で返した。

「私は幸成君のクラスの学級委員長で、一人がクラスに馴染めるよう協力してあげています」

「そんな感じ。沙耶那さん、菜月さん、今日はありがとうございました」

「」

幸成は一礼すると「どういたしまして」と返す。

これでは圧倒的に大人げないのが優で、大人の対応をしたのが沙耶那になつてしまつた。

「私達は今日はこれで失礼します」

沙耶那は一礼し、笑顔を見ると「また、明日」と付け足して歩いて行つた。

その背中を幸成とロイが見送ると幸成は優を見る。

「優さん、さつきのはいくら何でも大人げないから」

「何で？」

「全体的に……」

幸成は溜息を漏らすと髪を搔きあげた。

この人は何故か女性絡みになると妙に大人げなくなる。

向きになるというか、美少女なら険悪なムードに成り兼ねない。自分が女の子に見られないから気にしているのか、と幸成は聞いた事があるが、「歌劇団みたいでカツコイイじゃん」と返した為、それは違うという事が分かった。

しかし、その向きになる理由が分からぬ。

ロイや彩花、三村は知っているらしいが教えてくれないから尚更もどかしい。

幸成は深い嘆息を漏らす。

「優さん、夕食を作る為に下りてきたんじゃないですか？」

「そうだった」

優は思い出したよつに駆くと、空き部屋に駆け込む。

「本当に何だろ？」

「お前つて本当に鈍いな

「何？」

「何でもねえよ」

ロイは呆れたよつに言い、部屋に向かつて行く。

幸成は首を傾げると部屋に歩いて行つた……

時計の針が19時を指した頃、パソコンのキーボードを叩いていたロイが伸びをした。

パソコンの画面には「リンク完了」の文字が踊り、ロイは三村を呼ぶ。

「おっちゃん、衛星とのリンク終わったぜ」

「おう！」

三村は答えるとコーヒーを啜りながら、提供された偵察衛星「GAGA RUDA」のリンク画面を見る。

「今回、よく偵察衛星を米軍が貸してくれたものだ」

「それほど、米軍もシートレイゴイカバールを危険視しているのだろう。ルーマニアに潜伏していたカズイクルを捕らえようとアジトに踏み込んだタスクフォースが皆殺しにあつたからな。どの部隊でもシートレイゴイカバールを消してくれればいいんだろう？」

三村はコーヒーを一気に飲み干し、流し台で食器を洗っている優にマグカップを手渡した。

優はマグカップを洗いながら自慢げに口を開く。

「まあ、ボクのフェロモンを視覚化する装置を米軍に提供したからつて事もあるかもね」

その声に食後の紅茶を優雅に飲んでいた彩花が囁く。

「でもお、ヘクセがフェロモンを使って仲間を認識するというのを突き止めたのはあ、ウチなんですけどねえ」

まさにその通りであった。

比叡彩花はヘクセ研究においての第一人者であり、ヘクセがフェロモンを使い、仲間を見分けると突き止めたのは紛れも無い彼女の御蔭だ。

「とにかく、これで俺達はヘクセを楽に見付ける事が出来る。願つたり叶つたりじゃねえか？」

黒のカラーランタクトを外し、紅い瞳を見せる幸成がロイのパソコンを覗き込む。

この紅い左の瞳は不気味な光を放つ。

ロイはそんな幸成を一瞥すると、エンターキーを押して衛星の映像を映し出す。

華景市の上空を映し出すその映像は鮮明とは言い難いが地上の人間をハッキリと捉えている。

「お下がりつて言つても意外に使えるじゃないか」

幸成が感心すると、ロイは苦笑いを浮かべ、嘆息を漏らす。

「アメリカ軍の偵察衛星の解析力はこんなもんじゃねえぞ？地面に置いたタバコの銘柄をも読み取れるからな」

「……完全に旧式だな」

幸成は頭を搔きながら、深い溜息をつき、近くにあつた銀色のアタッシュケースを開けた。

アタッシュケースには四丁の拳銃とヘッズセット、刃渡り30cmのナイフが納められている。

それぞれの拳銃は二丁が銃口が一つ有るM92FS・エリートIA、もう一丁が銃口に銛のようなフックが取り付けられたM1911A1、もう一丁がグロック26だ。

それぞれが任務に必要不可欠な物であり、対ヘクセ用拳銃、フックショット、麻酔銃となつている。

「調整は終わっているよ

「相変わらず良い仕事してるよ」

幸成は手を手ぬぐいで拭いている優の肩をポンと叩く。

三村はその様子を見ると、声高に叫んだ。

「さて、搜索と参りますか。スカイアイ、フェロモン探索

スカイアイ（ロイ）は文字通り空からの目を用いる。

フェロモン探索とはヘクセの出すフェロモンを視覚化し、人間とヘクセを区別する映像だ。

熱探知「サーマルビジョン」にも似ているその青い画像は人間は才

レンジ色に表示されるが、ヘクセは緑色に表示される。

さらにヘクセの通った後に残留したフェロモンも探知する事が出来る為、ヘクセが通った跡が一目瞭然となるという訳だ。

このサーマルビジョンならぬ「Hexe Search Visual」、通称「HSV」はヘクセを探す部隊には必要不可欠なものである。

ロイは上空から映し出されるHSVを見ながら、驚嘆の声を漏らした。

「流石、夜間外出禁止令が出てるだけあるな。パトカーらしき車が沢山有る」

「ヘクセを狩るにもパトカーを避ける必要があるな……」

「そうですねえ。警察にもヘクセは極秘ですから、鉢合わせたら面倒ですものねえ」

彩花は人事のように咳きながら紅茶を啜り、それを飲み干す。

「しかし、奴らが動き出すとしたらあ、今日ですよ？」

「彩花さん、その根拠は？」

幸成は優雅に紅茶を嗜んでいる彩花に問い合わせる。

「敵はこちらの存在にまだ気付いていませんよねえ？」と、言うことはですよ？人間の能力を凌駕しているヘクセが大胆不適になるのは必然ですよねえ？」

「確かに噂に成る程だからそれは有りえる。だが、夜間外出禁止令が出てる以上、獲物は……」

三村が目を細めると、ロイが怒鳴った。

「ヘクセを確認！！警察官が襲われている！？」

彩花は新しい紅茶にミルクとガムシロップを入れると、軽く首を傾げ、笑みを湛えつつ紅茶を飲む。

「場所を指定しろ！！」

「ポイントA3エックスレイ、ここから約4キロの地点です！！」

ロイは華景市の地図と偵察衛星を照らし合わせながら怒鳴る。

「了解！！口メオ、準備だ。自分は先に車を準備する。急げ！」

「分かつた」

幸成の「コードネーム」であるロメオを口にした三村は部屋から飛び出し、幸成も黒い夜型迷彩を着込み、次々とホルスターを装着していく。

両腿のレッグホルスターに銃口が一つ着いたスライドがそれぞれ白と黒の拳銃、通称「スコトス&フォース」を仕舞い、ヒップホルスターにフックショット「ドルヒボーレン」、脇に仕舞うショルダー ホルスターには麻醉銃「ミューデトラウム」、腰にナイフを指し、最後にヘッドセットを右耳に取り付けた。

「さあ、ミッションスタートだ」

装備：HAWK（前書き）

HAWKの装備。

お粗末ながら使われた武器を解説。

クリス・スーパーV

反動を後ろではなく下に逃がす事で銃の跳ね上がりを軽くしたサブマシンガン。

M90 two

「ベレッタ M92 F S」の最新型。弾倉のバネをショート化する事により、装弾数を従来の15発から17発に増やした拳銃。

グロック 17

強化プラスチックを用いる事で軽量化に成功した、映画にも度々登

場する有名な拳銃。

装備：HAWK

HAWK-EYE

通称

「フューラー」

ヘッドセットに右目に掛かるヘッドアップディスプレイ（HUD）を装着した戦略情報機器。HUDには敵対者の情報を映し出す。また、微妙な筋肉の動きから次の行動を予測してそこから予想される動きも投影される。さらに、フェロモンの視覚化、暗視機能、望遠機能が搭載されている。意味はドイツ語で「探知器」

M92-HAWK DUAL

装弾数：18 + 2

使用弾：9mmシャルデンップファー 亜音速弾

愛称：スコトス&フォース

対ヘクセ用主力火器。外観は「M92FS-エリートIA」だが性能は上位互換とも言える銃。装弾数は弾倉のバネをショート化するという「M90tW」を参考にして、反動はサブマシンガン「クリス・スープァーV」と同様のスライダーで相殺する事で両手でも通常に扱えるように、さらに銃身長を伸ばし、競技用の拳銃並の高い命中率を誇る等の高性能を有している。また、グローブ17同様ボ

リマーで出来ている為、弾丸抜きで900㌘と軽い。銃口は上下一連装となり、射撃と同時に一発の弾丸を発射し、対象に対して致命的な「流体性力学的ショック」を引き起こしやすい。また、マウントレールも搭載され、HAWK-EYEに連動する特殊なレーザーサイトも搭載している。フルオート射撃も可能で前述の反動相殺機構に加え、発射間隔を抑えており、操作しやすくしている。右手に黒い拳銃「スコトス」、左手に白い拳銃「フォース」を使う。スコトス＆フォースはギリシャ語で「闇と光」を意味する。

HAWK-NAIL

刃渡り：35cm

通称

「メツサードルヒ」

HAWK正式採用のコンバットナイフ。長さから鎌や小太刀に近い。刺突や切り付けの両方に特化しており、刺突時には強力な電流を流す。ドイツ語で「短剣+ダガー」を意味する。

HAWK-BILL

ワイヤー：30m

限界重量：120kg

通称

「ドルビーボーーン」

小型のフックショット。先端が鋭利な鉗のよつになつておひ、紐は強靭で蜘蛛の糸を参考にし、少しの事では切れない。移動用や敵を引き寄せる等、用途は多様。ドイツ語で「貫通する」を意味する。

9mmシャルテンプファー 亜音速弾

9mmパラベラム弾自体にSPP-4弾のようなガス密閉構造を設け、火薬を減らして亜音速弾にした物。射程距離は多少落ちるもの、高い消音効果を發揮し、その音は45デシベル程度（電話機のベル）。サプレッサーが使えないHAWKで重宝されている。

GARUDA

読みは「ガルーダ」。HAWKが使用する軍事偵察衛星。アメリカ軍からのお下がりであり、旧式の物。カメラにはヘクセの発するフェロモンを視覚化する機能が搭載されている。

9mmパラライズ弾

世界初の対人麻酔弾。弾頭は蚊の針を参考にした小さい針でそこから成分がサクシニルコリンに似た薬品を注入する。また、通常の弾薬より少ない火薬が特徴。刺さった標的は筋弛緩を引き起こし、体を麻痺させる。対人麻酔は薬品の量で死に至る為に使われていなかつたが、致死量の直前になると成分が体内分解する薬品が使われている。

グロック26・HAWK

装弾数：10 + 1

使用弾：9mmパラライズ弾

愛称：ミューデトラウム

「グロック26」のHAWKモデル。外観はグロック26だが、使用弾薬は9mmパラライズ弾を使用し、民間人の排除やヘクセの捕獲・保護に用いられる。サプレッサーを取り付けられ、ヒップホールスターに仕舞われる。愛称の「ミューデトラウム」はドイツ語で「眠い夢」を意味する。

アルムブレスト

装弾数：1

ワイヤー：75m

限界重量：180kg

クロスボウ。矢にワイヤーが取り付けられている。理由としては貧乏部隊であり、矢を無駄にしない為という理由とヘクセの足を止めるという理由。6倍率スコープが取り付けられ、逃げるヘクセに対して用いられる。基本的に車に積まれている。意味はドイツ語で「石」

街灯のオレンジ色の光とパトカーの赤い光が周囲を照らす。まだ日が短いこの地域の夜は早い。

この時間には闇に包まる。

東京等とは違い、田舎であり、さらに夜間外出禁止令が出ている為、20時に成らずともスーパーは閉まり、24時間営業を売りにしているコンビニすらも閉まっていた。

市民は家の中に逃げ込み、本当の化け物……現に化け物ではあるのだが……に怯え、家の明かりは消えている。

まるで昭和の、第二次大戦中の空襲から避ける様子に似ていた。警官達はパトロールを行い、「血吸い人」を警戒しているのは1979年に流布した有名な都市伝説「口裂け女」以来だらう。

「しかし、何もありませんね、金田さん」

若い警官は金田と呼んだ中年の警官に呟くと、助手席で背もたれに寄り掛かっていた金田がハハッと笑った。

「つたく、警官をこんな事で使わないで欲しいな。お前もそう思つだろ、木村」

「そうですね」

パトカーを運転していた木村が車を商店街の方に向けると、背中を向けた黒いロープの男が目の前にいた。

それに気付いた木村は慌ててブレーキを踏み、車を急停止させる。金田は血相を変えて、助手席から飛び出し怒鳴つた。

「おい、君！？ 旅行者か！？ 今は夜間外出禁止令が出ている」

男はこちらを振り向かない。

ただ、背を向けて遠くを眺めている。

「聞いているのか、君！？」

金田が男の肩を掴むと、腹に……

金田の腹に鋭い激痛が走つた。

激痛というにはあまりにも複雑で、内臓を掻き乱されるといつにはあまりにも安直で……

「…………つあ…………っはかあ…………」

「痛い？痛いよね？内臓を刃物で掻き乱されて、骨を砕かれて……男は体を前屈みにして呻く金田の耳元に咳き、問い合わせると金田の腹から滝のように溢れてくる血を飲み込む。

「うわああああ！！」

木村は絶叫すると車をバックさせた。

彼の本能が逃げると叫ぶ。

その本能に素直に従つた木村はアクセルを踏み込み、商店街から遠ざかる。

あれが血吸い人？

だとしたら、自分も……

「死にたくない…………死にたくない、死にたくない！死にたくない！死ぬのは嫌だ！！」

木村は絶叫し、アクセルを踏みつづける。

スピードメーターは100キロをゆうに超えていた。

赤信号を無視してでも逃げなければならぬ。

…………しかし……

バックミラーには先程の男が映つていた。

100キロを越えるパトカーに人間が着いて来れるはずはない。

だが……

パトカーの上に何かが乗る音が響き渡り、バックミラーから男が消えた。

「嘘だろ！？おい、嘘だ…………」

屋根の上から刃が下り、木村の延髄から突き刺さったその刃が、木村の声を途中で途切れさせた。

100キロを越えたパトカーは凄まじい勢いでスリップし、パトカーはガードレールに衝突し、停止する……

路上を走る黒いワゴンの電気自動車。

無音のそれは闇に紛れて、街を走る。

黒いワゴン車の中の助手席に座っていた幸成のHAWK専用のヘッドセット「HAWK-EYE フューラー」からロイの声が聞こえてきた。

（こちらスカイアイ！新たに警官一人が殺害された。目標は近接戦に特化している模様、オーバー）

ヘクセの戦闘系統はそれぞれ三種類ある。

近距離特化型、遠距離戦特化型、特殊能力特化型の三種類だ。

ヘクセとは言つても武器を使う者もいる。

剣や槍、拳銃や突撃銃等を使うヘクセもいるのだ。
今回はロイの報告から近距離特化と言つてはいるが、実際、特殊能力特化型かもしれない。

と、言うのも特殊能力特化型は超自然的な能力、例えば雷等を操るが、常にそれらを操る訳ではなく、何かしら武器を交えた戦闘を開する。

つまり、警官を殺害する際に能力を使わなかつた可能性も考えられる。

「こちらロメオ、了解した。敵との距離を教えてくれ、オーバー」
（次の角を左に曲がればすぐ見えるはずだ、オーバー）
「了解。何か有り次第、隨時、敵の情報を入れてくれ、オーバー」
（分かった。スカイアイ、アウト）

ロイからの無線が切れると幸成は車の後部席に置いていたクロスボウを掴んだ。

クロスボウの矢にはワイヤーが括り付けられている。

どちらかと言えばクロスボウと言うには遠く、鯨の捕獲に使われる

ハープーンに近いそれはHAWK隊員からは「アルムブレスト」と呼ばれていた。

アルムブレストはワイヤーで敵の動きを止めるばかりか、銃痕が付けられない屋外の戦闘に用いられる。

アルムブレストに6倍率スコープを取り付けると、ワゴン車の天窓から身を乗り出した。

「One shot one kill」、一撃必殺を意味する狙撃手の金言は、クロスボウにも当て嵌まる。

実際、クロスボウは1970年代、銃が高性能の消音装置を得るまで特殊部隊で使われていた。

貧乏部隊には持つてこいの武器だ。

「It's show time!!」（ショーの時間だぜ）

幸成ほくそ笑むと右目に掛かるHUDを「Hexe Search Vision」、通称「HSV」に切り替え、赤眼を閉じ、右目に集中する。

サーマルビジョンに似た風景がHUDに映し出され、同時に車が角を曲がった。

パトカーの上に乗っている緑色に映し出される人間がHUDに捉えられ、幸成は赤眼を開ける。

普通の光景とサーマルビジョンが合わさり、奇妙な風景になつた。例えるなら、昔の青と赤のフィルムが取り付けられた3D眼鏡をかけているのに似ている混ざり方だ。

左目でアルムブレストのスコープを覗き込み、ヘクセと思われる男を中心捉える。

男の両手には、インドのマラータ族が使っていた、籠手の先から70cm程の剣が伸びた防具「パタ」が握られていた。

幸成はゆっくりと引き金を絞ると、男に向かって矢を放つ。

矢が真っ直ぐと男に向かい、ワイヤーが擦れる音が響き渡る。

唯一、消音性を欠く要素がこのワイヤーだ。

が、しかし、矢を現場に残す訳にいかず、ましてや撃つた矢を「丁

寧に回収していたらヘクセに逃げられるから仕方ない。

矢が男に当たる瞬間、男は矢に気付き、それを弾いた。

空中に弾かれた矢はワイヤーの限界の長さを越えてアルムブレストに巻き取られる。

男はこちらに睨むと、パトカーからパタを引き抜き、駆け出して行く。

幸成は巻き取られて戻ってきた矢を掴むと三村に叫ぶ。

「おっちゃん！！早くしろ！！」

「分かつてるよ！」

三村はアクセルを踏み込み、男の後ろを追跡する。

幸成はHUDを通常のモードである「Lock & Load」に切り替えた。

このモードは「敵を捉える（Lock）」と、敵の筋肉の微妙な動きから次の動きを導き出し、「HUDに映し出す（Load）」と、いうビジュンであり、通称「LAV」と呼ばれている。

風を切つて走る男をHUDに捉えた幸成は再びアルムブレストの弦を引っ張り、そこに矢を装填した。

「おっちゃん、奴の後ろに張り付いてくれ」

「分かつてる！」

三村が怒鳴るのを聞き、幸成はスコープを覗く。

手ブレと車の揺れ、さらに男の不規則かつ俊敏な動きはHUDに映し出される予想された動きと一緒にはあるのだが、矢が直撃するまでの時間を考えれば間に合わない。

スナイパーライフルでもあればまだマシだつたかもしれないと幸成は舌打ちをし、一射目で弾かれた事を憎む。

男が人間には有り得ない速度で街の角を曲がり、車もドリフトしながら曲がった。

タイヤから白煙が巻き上がる。

（こちらスカイアイ！ロメオ、聞こえるか？まずいぞ！…）

「どうした！？」

(次の角に警官がいる……何とかして止めろー。)

「簡単に言うな！」

(方向を変えるだけでいい！)

「……分かつた、やつてみる。ロメオ、アウト

幸成はアルムブレストからホルスターの拳銃型フックショット「HAWK-BILL」ドルビボーレンに持ち替える。

次の角まで約100m……

「おつちゃん、奴の10mまで近付いてくれ」

「分かつた！」

三村はアクセルを一気に踏み込むと、男の後ろの手前、15mまで近付いた。

もう少し……

残り5m……4……3……2……1……

幸成はフックショット「ドルビボーレン」を構えると、男の数メートル手前に撃ち込み、ワイヤーの巻き取りでそこに引っ張られる。移動用のフックショットであるドルビボーレンには自分を移動させる程の力をモーターに出させる「ハイパワー」と物を引き寄せる程度の力の「ノーマル」があり、この強靭で有名な蜘蛛の糸を参考に作られたワイヤーは幸成の体を支えるには充分だった。

刹那、空中を舞う幸成の目の端に何か白い物が映り、そちらの方を見た幸成は言葉を失う。

路地の建物と建物の隙間に、白い着物と太刀を持ち、白い狐の面を付けた人物が立っているのだ……

その一瞬の出来事がスローモーションのように思えた瞬間、幸成の時間が元に戻り、ワイヤーに引っ張られる。

幸成はすぐに集中すると、ワイヤーが巻き取りを終えて男のすぐ手前に幸成は立つ。

即座にナイフ「HAWK-NAIL」メッサー・ドルビを構えると、

男は大型のスーパーの方を向くとその屋上に跳んだ。

その高さは約25m、ドルビボーレンでギリギリ届く距離だ。

幸成はドルビーボーレンの銃口を屋上に向けると、ワイヤーを発射し、手摺りに巻き付け、ワイヤーに引っ張られる。

ワイヤーが巻き取られて、その長さが限界まで短くなるより早く幸成は手摺りを掴み、屋上に降り立つた……

対峙する二人。

まだ薄い月明かりで照らされる一人の姿は片方は人間に見えず、逆に片方は人間にしか見えない。

紅い瞳の少年と黒いローブの男はそれぞれの武器を手に持っていた。少年は上下二連装の二丁拳銃と男はパタを持つている。

一陣の風が吹き、男のローブが脱げた。

男は痩せ型で目が細く、髪は無い。

パタを下に下ろした男は口を開いた

「君の名前を聞かせてもらおうか？」

幸成は無表情になりながら小さく「ロメオ」とだけ答えた。

「コードネームか？まあ、いい。僕はティック・チャンバー。シュトレイゴイカバールのヘクセだ」

シュトレイゴイカバールのヘクセの文字を聞いた幸成は眉をピクリと動かす。

「今までぐれヘクセを狩つてきたが、シュトレイゴイカバールのヘクセと対峙するのは初めてだ」

「そうか……なら、これが最初で最後だつ！！」

チャンバーはパタを両手に凄まじい速度で幸成に駆ける。

風を切る音が響き渡り、幸成はチャンバーの頭を飛び越えてそれを避けた。

「凄い身体能力だ」

チャンバーが笑うと、幸成はスコトス＆フォースの引き金を引いた。放たれる9mmSD弾をチャンバーが、まるで漫画かアニメにあるような動きで弾丸を自分から逸らしていく。

「あまい！！」

チャンバーは怒鳴ると、パタを交差させながら幸成に向かっていき、振り下ろす。

同時に金属の澄んだ音が響き渡り、幸成はナイフ「メッサーードルヒ」でその一本を受け止めた。

飛び散る火花が一人の顔を照らす。

「一つの手を添えたナイフで受け止めたパタの重圧は凄まじい。

「これは刺さると痛いよ？」

チャンバーはニヤリと笑い、片方のパタでナイフを押さえながら、もう片方を後ろに引く。

この後、刺突が来ると分かつているがナイフに添えている手を離し、片方で拳銃を使うにしても、ヘクセの力を片手で支えられるとは思わない。

幸成は舌打ちをすると顔面に突き出された刃を顔を横にして避ける。鮮やかな血が幸成の頬とパタを濡らした。

幸成の血をパタから舐め取り、不気味な笑みを見せる。

今度は横に振りかぶり、パタが一閃された。

幸成はナイフから力を抜き、逆に押さえ付けられる事で横に一閃されたパタを避ける。

パタは幸成の髪の先を少し切り、それとは別に空を切った。

先程の押さえ付けられた反動を利用して、上手くかい潜つた幸成は再び拳銃を構える。

微かな銃声と同時に放たれる弾丸はまたしてもチャンバーのパタで弾く……

「無駄だよ？ 無駄、無駄！！」

チャンバーは怒鳴ると、冷静な幸成に問い合わせる。

「君は何でそんなに冷静なの？ 今から死ぬのが分かつているからかな？」

「逆だ」

幸成は鼻で笑うと、丁拳銃の弾倉を交換し、銃を交差させる。

「どうやつて？」

「お前は致命的な事に気付いていない」

「何が？」

チャンバーが問い合わせると幸成は弾丸を発射した。

三度、次々放たれる弾丸を弾いたチャンバーは腕に走る激痛に顔を歪める。

チャンバーの腕からは真紅の血液がパタの付け根から滴り落ちてきた。

「何だ!? 何なんだ、一体!?!」

「お前は馬鹿だな。その武器は戦場で落とす事は無いが、同時に離す事も出来ない。つまり、下手をすれば自分の腕を痛めるという事だ。そんな武器で弾丸を弾けば常識的にそうなるだろ? Reach ! ! !」

幸成は怒鳴ると、一丁拳銃を連射しながら距離を詰める。

チャンバーは無謀にも血の滴るパタで応戦するが、数発防ぎ切れず、体に弾丸が届く。

幸成が弾倉を交換すると同時にチャンバーはヤケクソに切り掛かるが、腕を痛め、速度が落ちたパタを避けるには容易で、ましてやHUDの予測された動きの通りのチャンバーは遊ばれている状況だった。

「この下等な人間が! ! !」

「下等な人間にやられてるお前は何だ?」

幸成はほくそ笑むと一丁拳銃をチャンバーの体に押し付けた。

「B i n g o ! ! !」

フルオートで吐き出された弾丸は一瞬でチャンバーの体を蜂の巣に変え、弾き飛ばされた。

弾かれたチャンバーに銃口を突き付ける幸成の姿は月光に照らされ、不気味な赤を醸し出している。

「化け物め……」

「吸血鬼に言われると心外だぜ」

幸成は右手で拳銃を構えながら、左手で先程、頬に付いた傷痕を擦る。

傷は既に塞がり、ただ、固まつていな血液が手を濡らしただけだ

つた。

「ああ、確かに俺は化け物かもしけねえな」

幸成は自嘲すると、幸成は「良いことを教えてやるよ」と呟く。

「古来、吸血鬼を滅ぼすには六つの方法がある」

「う言ひと、幸成は左手の指を広げていく。

「一つ、遺体を火葬する。二つ、水に沈める。三つ、心臓を取り出す。四つ、心臓に杭を打ち込む。五つ、首を切り落とす……」

そこまで言ひと、五つ目で開いた手を握つた。

「六つ目は狼に襲わせる。名前を知りたがっていたな？俺は赤眼の狼。貴様ら吸血鬼は俺が全員喰らつてやる……」

幸成はその冷たく、残酷な赤い瞳で男を見下ろすと、ゆっくりと引き金を数回引いた。

静かな弾丸は男の頭を粉々に粉碎し、周囲に赤黒いミンチを撒き散らす。

同時に男は衣服や武器を残し、その男がこの世にいた全てを消し去つた……

登場人物・華景高校（前書き）

登場人物・華景高校

登場人物・華景高校

三神 沙耶那 (17)

一人称「私」。華景高校一年生。容姿端麗、スポーツ万能、成績優秀の万能美少女。うなじが隠れる程のセミショートで、墨を流したような美しい黒髪、前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている。身長は162cm、一重瞼で目鼻が整い、唇もみずみずしい。Eカットとスタイルも良く完璧とも言える美少女。天然ボケだが、基本的に面倒見のいい女の子。三神神社に住んでいる。

藤宮 菜月 (17)

一人称「ナツ」。華景高校一年生。薄い茶髪に右側のサイドテールに、前髪は自然な感じ、童顔で149cmと背が低く、よく子供に間違われる。Bカット。笑うと口から八重歯が覗く。明るい性格で子供っぽい。ロイとの仲は最悪。沙耶那とは「サヤ」と「ナツ」と呼び合う仲。趣味は園芸で花を育てる事が好き。毎日スポーツドリンクを飲んでいる。

神宮寺 鳳寿 (16)

一人称「アタシ」。華景高校一年生。褐色のストレートヘアでセミロングのボブカットに右の前髪部分に髪留め、可愛い顔立ちで赤縁の眼鏡をかけている。Cカップ。身長は158cm。HAWKの監視対象者。

カーテンから零れ出る太陽の光が幸成の顔に触れる。その優しい光が幸成の顔を照らし、幸成はゆっくりと目を開けた。初めて実感出来る、生きているという実感。ヘクセという有り得ない存在と戦つてから朝を迎えると、いつもこの実感に苛まれる。

幸成は髪を搔き上げると布団から出て、洗面台に立つ。夜に付いた、あの傷は跡が残らずに消えていた。

掠つたとは言つても、一日で消えるような浅い物ではない。

化け物……

チャンバーの言葉が頭の中で響き渡り、幸成は舌打ちをした。皮肉にも化け物に言われるとはな……

自嘲した幸成は紅い瞳にコンタクトレンズを入れた。この瞳が無くなれば、俺は……

「起きてるか？」

朝から元気な口音の声が部屋に響き渡り、「ああ」と答えて顔を覗かせる。

「一日目だな……彼女出来るかな……」

「……諦めろ、お前には無理だ」

幸成がまさに諦めろといった風に肩を叩く。

「な、えつ！？何、その宣言！余命宣告？それとも死刑宣告なのか！？」

「冗談だよ、冗談」

幸成は呆然とする口音に笑いかけると、不意に昨日の夜のある出来事が甦つた。

フックショット「ドルビボーレン」のワイヤーで移動している時に

見た、沙耶那と菜月から語られた「白狐」。

白い着物に太刀、白狐の御面の人物。

あれは？

「ロイ……」

「どうした？」

「……昨日、俺とおっちゃんが追跡している時に他にヘクセがいなかつたか？」

「それは無い。あんな開けた所に別のヘクセがいたら、いくら素人でも気付くだろ？」

「いや、例えば路地裏とかは？」

「路地裏か……ただでさえ解析力が低いGARUDAなのにHSVじゃ、ますます探し難いよ」

ロイの言つ通りだつた。

サーマルビジョンに酷似した視界では路地裏等を探すには難しい。青く染まり、さらに路地裏は深い青に染まったその視界から探すのは不可能という物だ。

「何があつた、幸成？」

「信じねえかもしねないが……白狐を見た」

「白狐つて……冗談だろ？」

「俺だつて冗談だと思うから聞いてんだ。伝承の存在が見えたんだから……」

「一応、録画はしているから後で確認だ」

「悪いな」

幸成は感謝すると、下から彩花の気の抜けた声が聞こえ、朝食だと告げた……

食後は何故か紅茶と決められたHAWK隊員。
無論、決めたのは彩花だ。

実際、このメンバーで力関係図を構築した場合、彩花が頂点となる。HAWK隊員の見解は一定しており、「彩花を怒らせたら毒を盛られそう」や「恐竜の絶滅の原因は実はこの人を怒らせたから」、さらには「人類が全滅する可能性はこの人を怒らせない限り皆無」とまで言われている人物だ。

五人はそれぞれ思い思に紅茶を飲み、朝を満喫する。

「それにしてもお、いきなりシユトレイゴイカバール所属のヘクセを倒せるとは運が良かつたですねえ」

彩花は薄紅色の紅茶の香りを楽しみながら微笑む。

その様子はやはりお嬢様にしか見えない。

あのような事を言われているとは思えない優雅な様子は、ギャップが有りすぎてこちらが困る。

「だが、何か誘っている感じがしたな……あそこまで大胆にシユトレイゴイカバールが動くとは思えないしなあ」

三村はレモンティーを啜りながら呟くと、つぐづぐコーヒーが飲みたいと思う。

幸成もコーヒーに、ではなく先程の呟きに同意した。

「確かにそうだな。まだ、はぐれヘクセ供の方がしつかりと隠れていたからな」

「何らかの組織の意図を感じられるというか、そんな感じだよね？ボクは雑魚を囮にしてこちらの戦力を観察したつて感じたな」

戦力の観察？

「いう事は白狐はシユトレイゴイカバールのヘクセか？

幸成が白狐を頭の中で反芻させていたその時、扉をノックする音が聞こえ思考を止めた。

「はい、今出ます」

三村はレモンティーを一気に飲み干すと扉に向かって歩き、ドアノブを回した。

ドアの向こうに立っていたのはセーラー服に身を包んだ可憐な美少女と小柄で可愛らしい少女だ。

「あれ？ 可愛らしいお嬢さん方だ」

その覚えのある声を聞いて幸成は三村の隙間から顔を覗かせる。

やはり、とでも言つべきだらうか？

沙耶那と菜月がドアの前に立つていた。

向こうもこちらに気付き、軽く会釈する。

「初めてまして、三神沙耶那、こちらは友人の藤宮菜月です」

「こりゃまた、じー寧に……自分は幸成の保護者の直江三村。よろしく」

三村は頭に手を当てると頭を下げるが、ニヤニヤしながら幸成を一瞥する。

「何だ、幸成？ もう彼女が出来たのか？」

「違うよ」

幸成は即座に否定すると紅茶を飲み干し、立ち上がる。

「沙耶那さん、菜月さん。紅茶でも飲んでゆつくりしていって下さい。俺は今から歯を磨きますから」

「では、お言葉に甘えて休ませてもらいます」

「そうだね！ モーニングティーって言つの？ 憧れてたんだよね」

「どちらかと言えば、アフターティナーティーですねえ。アーリーモーニングティーは朝食前の寝覚めのお茶、そして本当のモーニングティーのイレブンシスはあ、その名の通り11時前の飲みます。初めまして、比叡彩花です。一人の姉とも思つてくださいねえ～」

彩花はマグカップに一人の飲む紅茶を入れながら間の抜けた声で笑う。

相変わらずというべきか、手際がいい。

「ゆっくりしていってくださいねえ～」

彩花はそう言つて一人にお茶を差し出した……

ブレザーに着替え終えた二人はそれぞれの部屋の鍵を閉めると雲莊の階段を下り、HAWK隊員の集会所として使われている「103号室」の扉を開けて挨拶をした。

「行ってくる」

幸成の声に三村は「行ってらっしゃい」と答えた。
傍目から見れば仲の良い住人達にしか見えない。

仕事仲間と伝えていたからそれも違和感無いだろう。

四人が学校へ歩いていると沙耶那が口を開いた。

沙耶那からほのかにアールグレイの独特の心地の良い香りが漂い、幸成は頬を緩ませる。

「最初、幸成君のお父さん見た時ビックリしましたよ。幸成君達の声が聞こえるからノックしたら凄く大きな人が出で来たんですから」「そうだね。でも、何か全然似てないね？幸成君ってお母さん似？」返答に困る質問だ、と幸成は苦笑いを浮かべてしまう。

HAWK隊員の素性はそれぞれが殆ど知らない。

軽口をたたき合つ一人でさえ、何故HAWKに入ったのか分からないのだ。

「……俺には母親と過ごした記憶が無いんだ」

元々捨て子で施設にいたとは言えなかつた幸成は自嘲しながら呟いた。

無論、二人は申し訳なさそうに表情を歪ませる。

それを見た幸成は「気になくていいから」と笑つて見せる。

二人は分かつたと笑みを見せるもやはり申し訳なさそうだという表情は変わらない。

「それよりさあ」と切り出したのはロイだ。

こういう時には非常に役に立つ……もっとも任務の時は今以上に役に立つのであるのだが……ロイは話の転換には最適な人物だ。

「 ここってどんな祭りがあるんだ？」

大方、飛び出すのは女の子の話かと思っていた幸成は、肩透かしとでも言つべきか、僅かに感心する。

「 華景市には二つの祭りが有ります。明日の二日間の連休にこの街で桜祭りという物が開かれます」

桜祭りと言つても、桜の木には芽しか生えていないが……幸成は季節外れだと思ったのが聞こえたのか分からなかつたが、沙耶那は笑みを浮かべながら続ける。

「 桜祭りと言つても花見のような物ではなく、桜の花が咲く事を願う為の祭りです。昔の風習と言いますか、儀式のような物ですね。勿論、一日田は私の神社で舞が披露され、二日田からは露店が並びます」

「 サヤの踊りって凄いんだよ？ 優雅って言つのかな？ 巫女装束着てさー時代劇のお姫様か巫女さんがやるような踊りをサヤがやるんだよ」

幸成は沙耶那に笑いかけると、沙耶那は恥ずかしそうに顔を赤くした。

その可愛らしい様子に幸成は思わずときめく。

（何か、可愛いな……）

沙耶那はスタイルもいいし、アイドルのようでも美少女とこうに相応しい。

そもそも、幸成は同年代の女性と触れ合つた事がなく、恋とこう経験をしたことが無い。

それもあり、初めての感情に幸成は戸惑つ。

「 それでもう一つのお祭りというのが夏祭りです。これは盆踊りが行われ、露店並びます。これは街全体が一丸となりますのでとにかく面白いお祭りですよ」

沙耶那は優しく微笑むと幸成は空を見上げだ。

この街はこんなに良い街なのに……

古い教会に集まつた6人の男女。

男女はそれぞれ机に向かい、話し合つていた。

会議の張り詰めた雰囲気や談笑といった空氣ではなく、緊迫した空氣だ。

「……やはり、ディック・チャンバーは死んだか」

「所詮、奴はこの程度だつたのよ」

「御蔭で敵の戦力を知る事が出来ました」

「へつ！たかがガキが一人だろ！？俺が片付けてやろうつか？」

「……焦る……駄目……」

「そうですわよ。私の放つた『虫』も動いてますわ

「チツ！」

男は舌打ちをし、机に足を乗せた。

「我々にはまだまだ時間がある。焦る事はないさ」

リーダー格の男は引き攣つた不気味な笑みを見せる。

「それぞれの力を私は信用している。勝利をこの手に！」

男は教会に響く大きな声で怒鳴ると、それぞれが立ち上がつた。

「全ては貴方の為に、ツェペシュ様！」

男女はリーダー格の男の名前を呼ぶと一礼したのだった……

学校に着いた幸成達は昇降口の下駄箱に向かった。

それぞれの下駄箱は三年間使う下駄箱であり、変わることはない。幸成とロイは上履きを履くと、靴を入れる為に下駄箱を開けた。

「じゃ、行こう!」

菜月が子供のように無邪気な笑みを見せると沙耶那も笑みで答える。靴を入れたロイが何故か固まっている幸成を見る。

「どうした、幸成?」

「……これなんだが……」

固まり、困惑する幸成は下駄箱から三枚の手紙を取り出し、ロイに見せた。

ハート形のシールで封をしているものやピンクの手紙、ルーズリー フを折り畳んでペンで装飾した手紙と様々だ。

「何だ……これは? 不幸の手紙か?」

「貴様! モテやがって!! 何なんだ! ?」

「知らねえよ!!」

騒いでいた幸成とロイに気付き、沙耶那と菜月が二人に駆け寄ってきた。

「どうしたの? ?」

「コイツ、いきなりラブレターもらひてやがる! 畜生!! 羨ましいぜ」

「変態さんには無縁だもんね~」

菜月は相変わらずのアイデンティティクラッシュ技術でロイを撃沈させる。

この子に一級アイデンティティ破壊師の称号を与えてあげたい。

幸成は苦笑いを浮かべると手つ取り早いルーズリーフを開き、読み上げた。

「いきなり手紙を書いて」めんなさい。私、直江先輩と手紙交換し

たいの…… 一年C組米山麗奈か…… 困るな、こいつの……

「……お前、露骨に酷いな」

「は？」

「普通、そういうのはこいつそり読む物だぞ？」

「そうなのか？それは可哀相な事をしたな……」

どちらかというと天然だが、犯した自分の非は認めるのが彼の良い所だ。

幸成はカバンにラブレターを仕舞うと深い溜息を漏らす。正直、馴れない物だと幸成は自嘲を浮かべる。

「幸成、その返事はどうするんだ？」

「そうだな……」

幸成が考えようとしたその時、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

「一先ず行きましょう？」

「そうですね」

沙耶那の声に幸成は答え、歩き出し、角を曲がったその時だった。

凄まじい勢いで弾かれ、幸成は地面に尻餅を着く。

いくら訓練をした彼でも咄嗟の衝撃に耐える術は無い。

幸成が顔を上げると倒れていた少女も顔を上げた。

ストレートヘアのセミロングの髪をボブカットにし、右の前髪の部分を髪留めで止めてこる。

また、少女の顔は愛らしく、赤縁の眼鏡がアクセントになり、非常に可愛い。

この子は……

「君は……」

「……」

少女は謝るでも無く、廊下を駆けて行つた。

と、少女が倒れていた場所には学生証が落ちている。

幸成は埃の付いたズボンを払うと学生証を拾い、開いた。

やはり、とでも言つべきだろうか。

一日にして早くも接触が出来たのは非常に運が良かつたとも言え

るだろう。

1年C組、じゅんシブン 神宮寺鳳寿じんぐうじ ほうじゅ。

HAWKの監視対象者である鳳寿と接触する機会が「えられた事は久しぶりに嬉しい事だとも言えた。

「危ないなあ！！廊下は走っちゃいけないのに！！」

菜月は子供のように怒る。

本当に子供らしいその様子は非常に心和み、とても高校生とは思えない。

「何か急いでいたのでしょうか？幸成君、大丈夫ですか？」

「はい。取り敢えず、一時限目が終わったら返しに行こうかと……」

「あれ？言いませんでしたか？今日は二年生全クラス合同で体力テストが行われるので昼休みまで暇は有りませんよ？」

言つてないですよ、沙耶那さん……

この人はしつかりしているようで、時折何処か抜けている。

そして、やはりタイミングが悪いのはお約束なのか？

タイミングが悪い以前に、お世辞にも運動神経があまり良くないロイはそれこそ死刑宣告を受けたようだった。

学生の方に経験が有る人がいるだろうが、シャトルランや反復横跳び等の体力を著しく使う競技は鬱うつだろう。

しかも新学期早々、ましてや午前中全てとなると、運動神経の悪いロイには絶望だ。

「腹痛くなってきた」

「急に何言つてんだ、ロイ？」

「授業が無いだけいいじゃないですか？」

沙耶那はのほほんと笑うと、ロイもいつも程ではないが嬉しそうな笑みを見せた。

「おい！お前達！もうすぐ本鈴が鳴るぞ！！教室に入れ」

職員室から歩いてきた職員が騒いでいた四人に注意をすると、本鈴が鳴り響く。

それを聞いた四人は慌てて教室に駆けて行つた……

2・4・体力テスト

時計の針が11時を周り、小腹を空かせ始める時間帯。

その時間帯は早弁をして空腹を満たす人が多いだろうが、今日の華景高校は違つた。

学生達が空腹さえも忘れる出来事が起きていたのだ。学生達は体育馆に集まり、一人の生徒に注目していた。

その一人の生徒は言うまでもない幸成だ。

幸成は華景高校で行われた体力テスト行つた全ての種目の記録を大幅に塗り替え、その様子を見ようと生徒達が集まっていた。

元々自衛隊の訓練で体を鍛え、体力徽章を有する幸成にとつて、この程度の事はハツキリ言つて造作もない。

そして今は20mシャトルランの最中だ。

20mシャトルランは、20mを特定の音楽が鳴り終わるまでにたどり着き、それを体力が続くまで繰り返す競技だ。

一回連続でミスをしたらその場で終了となり、さらに回数が増える事に音楽の速さが増す。

正直、体力の無い人物には厳しいであろう種目を幸成は涼しい顔で、180回近くまでやつていた。

そこまでいくと既にやつている人はいなく、体力自慢のバスケ部や野球部、陸上部らは幸成を何者だ、といった風に眺めながらも戦力に欲しいと思つている。

女子は容姿が完璧で他の男子がへたれ込む中、全く息を切らしていない幸成は注目の的だ。

100回付近で撃沈したロイは長々と続く、幸成のシャトルランを眺めていた。

不意にロイの後ろから沙耶那と菜月

「ユキ君って、何かスポーツでもやつてた?」

「いや、何も?」

スポーツじゃなく、自衛隊やつてます、彼。

「私も160回が限界なので尊敬します」

沙耶那は汗を拭きながら微笑む。

女子で、しかも160回つて十分凄いんだがと100回前後のロイは苦笑する。

ちなみに女子一位、総合一位の彼女も十分に化け物と言えた。

勿論、胸的な意味も含めてである。

彼女の大きな胸は体操服にはキツイ為、殊更胸を強調し、止めと言わんばかりに走る度に上下に揺れる胸の前に、男子はテント設営者と出血多量者多数という状況だった。

ちなみにロイは前者である……

ついでに言つと、大きなお友達は菜月のぶかぶかの体操服という緩口りな格好に全滅したのだつた……

200回を越えた辺りで先生は時間の尺という物で終わってしまった。

同時に体育館には幸成を讃える拍手が鳴り響く。

「まだ行けるんだがな」と小さく呟いた幸成は流れ出る汗を拭き取つた。

「余裕だな」

ロイは幸成にスポーツドリンクを投げて寄越し、幸成はそれを一気に飲み干す。

500mlのスポーツドリンクはあつという間に空のペットボトルに変わつた。

「沢山飲むんだね。足りなかつたら有るよ?」

菜月は水筒を差し出しが、幸成は首を振る。

他の大きなお友達は幸成に嫉妬の眼差しを見せ、他の女子も菜月が断られた事で各所でガツツポーズを見せた。

「幸成君は凄いです。まだ行けそうですね?」

「正直、まだ余裕です」

幸成は笑うと、最後の種目であるハンドボール投げが行われた……

「あ～、疲れたあ～！」

ロイは屋上で青空を見上げて叫び、サンドイッチを口に運ぶ。

「疲れるな、ロイ」

「お前は疲れなさ過ぎだ」

ロイは人差し指を幸成に突き付け、サンドイッチを食いつ。

「そう言えば、忘れていたな」

幸成は胸ポケットから鳳寿の学生証を取り出した。

「返して来る」

「そうですね。持ち主の方も困っているかもしだせんからね」

沙耶那は弁当箱の蓋を閉めると、手ぬぐいで口を拭く。

「悪い、ロイー。」ミミを捨ててくれ！」

幸成は結んだパンの袋をロイに投げて、階段を駆け降りて行つた。その背中を見送つた沙耶那と菜月は今までに見ない張り切りようで、目を白黒させる。

「何であんなに張り切つてるのでですか？」

「……さあね」

ロイはいかにも知らないといつ口調で一人に呟くと、幸成の駆けて行つた階段を一瞥した。

「幸成君は今朝の人気が好みという事ですか？」

「それは違うと思うぜ、沙耶那さん」

「確かに変態さんみたいに誰彼構わずつて、訳じやなさそつだからね」

「うつせえよーーー！」の小学生！」

「しょ……屈辱だーーー抗議を申し立てるつーーー」

腕をちぎれんばかりに振る菜月はまさに小学生だった……

屋上を下りてすぐ、教室棟の四階である一年生の教室だ。一年生は先程の幸成の体力テストの結果で持ち切りだつた。そこに幸成が来れば盛り上がりが最高潮に達するのは必然。C組に向かう幸成に気付いた女子は教室から顔を出して黄色い声を上げる。

無論、幸成は何を騒いでいるのか分かつていない。

幸成は髪を搔き上げるC組に入つた。

言つまでもなく、とんでもない歓声が上がり、幸成は困惑した表情になる。

「直江先輩、あんたに話があるんじゃない?」という声が聞こえてきた。

本人に自覚有りか?

幸成は話が早いと小声で呟くと「いじに……」と切り出した。

「はい!」

幸成が言つより早く手を上げたのは目的の人ではなく、今時のガヤルといった感じの女性だ。

幸成は困つたように苦笑いを浮かべると「いじに鳳寿つて人いるはずなんだが……」という声に周囲がざわつき、手を挙げた少女は笑みをゆっくりと消して手を下げていく。

「神宮寺ならそこに……」と人だかりを指差すと同時に人だかりが割れる。

その先にはこちらに見向きもせず、頬杖を付き、ただ外を眺めている鳳寿の姿があつた。

鳳寿は世の中を悲観するような、或いは何かを諦めたような目で外を眺めている。

暗い影を落としている鳳寿に幸成は歩み寄ると学生証を差し出す。

「朝にぶつかったよね? その時に落としたよ。学年を調べる為に中

を見させてもらいました」

「……」

鳳寿は幸成を見向きもせずに外を眺めている。

苦笑いを浮かべた幸成は困ったように後ろ髪を搔くと机の上に学生証を乗せた。

「ここに置くからね」

「……ん……」

鳳寿は短く答える。

暗い、暗過ぎる……

幸成は困ったように監視対象者である鳳寿を見る。

幸成にとつて監視対象者と親しくなる事が任務で有り、今回の接触はまたとない機会であった。

が、しかしこのような事態になるとは……

「じゃ、行くね」

接触失敗、と考えるに相応しい結果だろう。

が、不意に幸成はある事実を思い出した。

「そうそう。明日、祭りが開かれると聞いたんだけど、一緒に行かないかな?」

我ながら、口イみみたいに必死だ。

馴れない台詞を言つた事で全身が粟立ち、軽く身震いする。

あの馬鹿はこれ以上の事をよくもまあ、恥じらいも無く言えるものだと感心してしまう。

幸成が顔を引き攣らせていると窓を見ていた鳳寿がこちらを一瞥した。

すぐに窓に目を戻したが、小さな声で「……ん」とだけ答える。

「ありがとう」

祭りの存在を教えてくれた沙耶那への感謝の気持ちと今日の運の良さに感謝だ。

幸成は教室の出口に向かいながら、嬉しさを隠したその時、裾を掴まれ、幸成は歩みを止めた。

軽く一瞥すると、後ろには先程、手を挙げた少女がこちらを見上げている。

不安そうにこちらを見上げている少女は「手紙の返事は?」と聞いていた。

掛けた。

「手紙?」

そこまできて、初めて幸成は貰った手紙の一人が1年C組だったことを思い出す。

確か米山麗奈とか言つたか?

「悪いが付き合つつもりは無いんだ。ゴメン」

あつさりと一言で返した幸成は我ながら酷いなと内心呟く。しかし、少女の返答はある意味で幸成よりも残酷だった。

「は? 私よりもあのバスを選ぶ訳?」

その一言に幸成は眉を潜める。

何様だ、コイツ……

人をバス呼ばわりするこの少女は、女性絡みに疎い幸成の目から見てもそれなりに可愛い部類には入るだろう。

だが、白黒ハツキリ付けるなら彼女よりも鳳寿の方が可愛いと、幸成は思つた。

そもそも、本人を目の前にそういう心ない事を言つ時点で人として問題外である。

「最低だな……」

幸成は小さく呟くと、思わずヘクセに向ける時によつた冷酷な視線を向けた。

仮にコイツがヘクセだつたら、幸成は問答無用で撃ち殺していただろつ。

そこまでに、幸成はこの少女に殺意にも似た感情を抱いていた。幸成はすぐに前を向くと教室を出て行く。

早足で三人が待つ屋上に向かう幸成のその後ろではヒステリックに喚き散らす少女の声が響き渡り、その一言に幸成は歩みを止めた。ヒステリックだけだつたら別段相手にするつもりは無いが、混じつ

て聞こえた一言が問題だつたのだ。

「ブス！！放課後、いつもの場所に来いよ」

幸成は舌打ちしたその時、昼休み終了の予鈴が鳴り響いた。

確実にヤバイ……

しかも俺の一言のせい……

幸成は自分の任務を優先した軽率な行動を恨む。

拳を強く握り、引き返そうと後ろを振り返つたその時、ロイ達の姿が見えた。

「幸成、どうした？ もう昼休み終わるぞ？」

「……ああ」

幸成は拳を緩めると足早に三人に駆けて行く。

「どうしたの、ユキ君。顔が引き攣つてるけど？」

菜月は幸成の顔を覗き込むと、首を傾げる。

いつもだつたらこのような動作に頬を緩ませるが、今はそんな気になれない。

「幸成君、どうかしましたか？ 具合でも……」

「いや、大丈夫だよ。何とも無い」

幸成は笑みを作ると否定する。

責任は俺が取らなければならない。

幸成は緩めた拳をにぎりしめると自分の教室に歩いて行つた……

一日の日程が終わりホームルームが終わって、担任教師が出て行ったのを確認した米山麗奈は外を眺めている鳳寿に歩み寄った。
麗奈の目は冷たく鳳寿を見下ろし、顎でしゃくる。

鳳寿は無言で立ち上がると麗奈の後ろを歩いていった……

「幸成、帰るぞ」

ロイは幸成に笑いかける肩に腕を廻すが、幸成はその腕を払いながら立ち上がる。

「悪い、ちょっと忘れ物したから先に帰ってくれ」

幸成はそう言つと、カバンを片手に教室から飛び出して行った。

「ロイ君、幸成君はどうしましたか？」

「ああ？ 何か忘れ物したとかで……教科書とかは机の中だつてのに

……」

「どうしたんだじょうか？」

「そんな事より沙耶那さん！ 私と一緒に恋といつ忘れ物を探しに行きませんか？」

「え～っと……『めんなさいね

沙耶那に当たつて碎けたロイは呆然としていた。

「私は明日の祭りの事で校長先生にお話が、ナツも園芸部の仕事がありますから……それにしても幸成君はどうしたのでしょうか？」

沙耶那は小首を傾げた……

飛び交う罵声と体にかけられる水。

ただ、濡れてそれに耐えるだけ……

ただ、それに耐えていればいい……

奴らが気が済むまでただ耐えればいい……

鳳寿は手首を針金で縛られて、まるで捨てられた人形のように転がされていた。

麗奈とその他に髪を茶髪に染めた男やいかにも不良といった男達五人が蛇口に付けたホースで鳳寿に水をかける。

「美少女が可哀相じやん」

「美少女にこういう事するのって良いよなーそそられぬ」

「美少女、美少女つてブスじやん」

麗奈は煙草を口に運ぶと紫煙を吐き出す。

このような所を見られれば停学、悪くて退学だがここは人通りの無い学校の奥のトイレだ。

昔、ここで煙草を吸う生徒がいた為、人気の無いこのトイレは鍵が掛けられている。

しかし、針金でも簡単に開く鍵の為、このように使われていた。

鳳寿は濡れた顔を無表情に、横たわっている。

ただ何かに悲観したように……

「何だよ、その目は？ああん！？」

鳳寿の腹に蹴りが叩き込まれ、鈍痛に顔を歪める。

口が切れて、撒き散らされた水が染みる。

口から垂れてきた血が水に混じり、赤ではなく、茶色に変色した。

「おい。コイツ、ヤつちまわねえか？」

「いいねえ」

男達は下卑た笑みを見せるべルトに手を掛けた。

……アタシ、今から犯されるんだ……

ただその認識だけをした鳳寿はただ水浸しになつた床を見つめる。

たた耐えるたに

「そちら辺にしとけ

「アーティスティック」とは

五人の男と麗奈が振り返ると、そこにはカバンを肩に担ぎ、壁に寄り掛かっている幸成はネクタイを緩めながら片目を閉じて、 - - カラー・コンタクトで隠しているが - - で男を睨む。

— ああ？ お前、誰だよ？

せえと思つてゐるぜ？」「

幸成はカバンを放り投げると、ネクタイを解いた。

「ひざなんな、ガキが！！

男に怒鳴り、幸成に拳を振るひ、か幸成にそれを受け止め、思い切り握る。

「喧嘩つてのは相手を見極めてやるもんだぜ？」
男は怒鳴りの代わりに悲鳴を上げ、掴まれた指の骨が軋む。

幸成は耳元で囁くと悲鳴を上げる男の頬を裏拳で殴り、吹き飛ばす。悲鳴を上げる男を一瞥すると、口元を歪ませた。

次は誰だ?

「なめやがつて！」「

今度は一人が幸成に駆け寄つて來た。

幸成はリーチの長い足で、男の一人の顔面に回し蹴りを叩き込んだ。男は鼻血を噴き出すと濡れた地面に仆倒する。

続けてその反動を利用した右フックがもう一人を弾き飛ばす。

半目になると笑う。

「おいおい？ また立つてくるとかないのかよ？ 一人でこれじゃ、まだ泣きながら腕を振り回すガキの方が強いぞ？」

幸成が嘯いたその時、最初に倒した男が幸成を羽交い締めにする。この機を逃さんとばかりに駆け寄る男がギリギリまで迫った刹那、幸成は壁を蹴る要領で、迫った男の腹を蹴つて宙返りし、羽交い締めから逃れ、羽交い締めしていた男の後ろを取る。

男が慌てて振り返るが、それと同時に幸成のアップバー・カットが顎に決まり、吹き飛ばされた男はもう一人を巻き込みながら床に転がった。

「いい加減に気付けよ。お前達は俺には勝てない」

10歳の時に三村に拾われて、自衛隊の訓練受けて、今は吸血鬼を相手にしてんだ、年期が違うよ。

幸成は内心笑うと目配せをして行けと促す。

それと同時に無傷の男は気絶した男に肩を貸すと慌てて立ち去り、その後ろを残りの男達が着いて行く。

取り残された麗奈を見下ろした幸成は深い嘆息を漏らした。

「……このやり口からいつて常習犯なんだろう？ いい加減こんな馬鹿らしい事はやめておけ」

幸成が言い終わるより早く、麗奈は鍔を取り出し、刃を開きながら幸成に切り掛かる。

今の若い人はキレやすい等と聞いた事があるが、まさか刃物まで持ち出すとは想定外の事態だった。

しかも少女が……

幸成の脇腹に鋭い痛みが走るが、HAWKにおいては日常茶飯事。その馴れた痛みに顔を歪めると、ニッとした笑った。

「馬鹿な事をしてるな！」

幸成は怒鳴ると麗奈の手に手を掛けながら鍔を引き抜いた。

血濡れの鍔を片手に、無表情で駆けて行つた麗奈の背中を見送ると、

幸成は腹に手を当てる。

日常茶飯事とは言えども痛いものは痛い。

貴方も殺して私も死ぬ……

そんな事にならなければ良いがと幸成は溢れ出る血を右手で押さえると苦笑いを浮かべる。

（死のうとしても簡単には死ねないからなあ……）

それが彼の特異体質とでも言つべき事であり、この年齢で自衛隊の特殊訓練を受けてHAWKに抜擢された理由であるから、利点ではあるが、血生臭い事はここまで来て御免である。

幸成は腹から溢れる血を押さえながら床に倒れている鳳寿に歩み寄つた。

「……大丈夫か？」

「……ん……」

鳳寿の縛られた針金を解くと、手を差し出した。

「立てるか？」

「……ん……」

鳳寿は短く答えると、幸成の手を握り返した。

「……何故来た……？」

初めての鳳寿の問い掛けに幸成は驚いたように目を見開いた。

「ああ、祭りに誘つておきながら待ち合わせ場所とか伝えてなかつたから、伝えに来た……明日、9時に三神神社でいいよな？」

「……うん……」

鳳寿はそれを聞くと、無表情だがハツキリと答え、びしょ濡れのセーラー服のままトイレから出て行き、幸成は苦笑いを浮かべながらその背中を見送った……

夕日に向かって鳴く鳥。

これほど虚しい事は有るだらうか?

脇腹は傷が塞がつたが、まだ疼く。

流石に回復力は高くても痛覚という物は残つてゐる為、疼くといつ
訳だ。

「畜生……女の方が露骨にえげつないぜ」

幸成は血で濡れたブレザーとワイシャツ姿で歩いて行く。

人目に触れにくい学校の裏門から出た。

「あれ? ユキ君、どうしたの?」

その声に振り返った幸成の目に、八重歯を覗かせて笑つてゐる菜月
が映つた。

菜月の手にはジョウロがあり、近くには花壇がある。

「酷いね? どうしたの? ブレザーとかワイシャツが血で濡れたよう
になつてるよ?」

「あ~……」

久しぶりに返答に困る質問だ。

そう言えども、自動販売機にトマトジュースが売つていたよしな

「さつきトマトジュース飲んでたら噎せて、零してしまつて……」

「見掛けによらずユキ君はドジだね」

菜月は笑うと花を見て、水をかける。

花はまだ芽が出ていない。

「その花は?」

「アクリレギア・ブルガリス。キンポウゲ科オダマキ属の花

「詳しいね。花が好きなんだね」

「うん。花は……植物は嘘をつかないから

その一言に幸成は菜月を凝視する。

菜月は何処か淋しそうで、今の彼女は口吻に毒舌を吐く彼女とは違

う。

何時もなら小学生と見紛うが、今は小学生にも高校生にも見えない。哀愁の漂う女性の、独特の色香を醸し出していた。

「植物は注いだ愛情の分だけ答えてくれる。信用を裏切らない。私利私欲に走る人間とは違うね」

信用を勝ち取る為には平気で嘘をつくHージェントやスパイ。まるで自分の事を言われているようだった……

いや、見透かされていた？

「ところで明日のお祭り、待ち合わせますか？」

「あれ？ 何？ 誘つてる？」

「いや、別にそういう訳じや……」

「きや～！ 男は狼だ～！～！」

頬に手を当て、身をもじもじと動かす。

狼の単語に幸成は顔を引き攣らせた。

こつも連続で心臓に悪い単語を出されると幸成も気が気がではない。焦つてるの？ 可愛い……」

可愛いと、しかも小学生のような可愛い女の子に言われたのは初めてで、自嘲してしまつのは必至……

「そうか……」

「釣れないなあ～で、そつちの都合は？」

「こつちは鳳寿さんと9時に沙耶那さんの神社で待ち合わせます。そこに合流するという形に出来ませんか？」

「鳳寿さんって、神富寺家財閥のお嬢様の？」

「はい」

「もしかして玉の輿狙い？」

「違いますから。ぶつかつたから、そのお詫びに……」

「分かってるよ～やだなあ、本気にしちゃって」

菜月はのほほんと手を振り、花の葉を撫でながら優しく微笑んだ……

「ふざけやがつて！！」

男の怒鳴り声が響き渡り、鉄パイプの音が古い教会に轟く。今だに癒えぬ傷からは血が垂れてくる。

「直江とか言つたか？あの新参者！」

「麗奈、テメエが鳳寿に一泡吹かせたいつて言つたからだぞ」

「何よ！私が悪い訳！？」

「人刺して何言つてんだよ！」

男は煙草を吹かしている麗奈に怒鳴り、麗奈は気まずそうに目を逸らす。

その時……

「妾達のテリトリーで内輪揉めとはなんと低脳な」

その声に、幸成に叩きのめされた五人と麗奈は古いステンドグラスを見上げた。

六人の目に梁の上に座る金髪のロングヘアを靡かせた妖艶な女性が映る。

女性は赤いゴシックドレスに身を包み、手を口に当てて優雅な笑みを浮かべていた。

「誰だよ、おばさん！！」

その一言に女性は梁から降り、歪んだ笑みを見せた。

「シユトレイゴイカバールの痛苦のミラルダにおばさんとは失礼ね、下等生物が！！」

女性は穏やかではない叫び声をあげると、右手を掲げた。

同時に六人は悍ましい物を見て悲鳴をあげる。

誰もが嫌悪を示す「それ」は六人の体を一気に包み込み、確実に喰らっていく。

悲鳴と断末魔を、心地の良いクラシックかオーケストラのように聞く女性の目に映るは自分の僕達……

その光景は傷を負つた牛が血の匂いで凶暴化したピラニア・ナッティーに襲われる様子に似ていた。

瞬く間に皮膚を食い破り、内臓を食い破り、心臓を食いつぶす。

普通の人なら直視出来ない光景を眺め、興奮したように頬を朱に染

めるこの女性は明らかに異常であつた。

僅か30秒の時間でその場に残つたのは、先程まで生きていたとは思えない、深紅の血液に濡れた六つの人骨だけだ。

その光景を見た女性は教会に響き渡る狂笑を口から発したのだった

…

30分程菜月と世間話をし、20分の通学路を歩き、帰路に着く幸成。

幸成は夕と夜が混ざり合い、赤黒い色を映し出している空を見上げて溜息を付く。

もし、自分に普通に親がいたら、沙耶那や菜月、鳳寿のように - - 鳳寿は孤立しているが - - 普通に学校の生活を楽しめていたのだろうか？

10歳の時にヘクセと関わって三村に拾われてから人生が変わったのは分からぬし、関わってなかつたら逆に最悪の人生だったかもしれない。

その時には名前すら無かつたし、帰る家も無かつた。

喋る言葉も無かつたし、書く言葉も有りはしなかつた。

それを三村が拾ってくれて、今の自分が有る。

自衛隊の訓練は辛かつたし、勉強もやりたくはなかつたが居場所があると思えばこそ成し遂げられた。

16歳の時にHAWKに配属されてからは毎日ヘクセを狩つて……

もしかしたら、今回の事態は運が良かつたのかもしれない。

学校という場が与えられたのだから……

幸成が空から目線を外し、零荘を見た。

と、そこには黒塗りのバンがある。

見たことが無いその車から出て来たのは黒のスースにサングラスを付けた男だ。

手にはアタッシュケース。

仮にこの男がシートレイ、ゴイカバールの所属だとしたらアタッシュ

ケースには可能性としてMP-5Kが納められているだろう。

MP-5KのKは「^{クルツ}kurz」、ドイツ語で短いを意味し、「H&K社」を代表するサブマシンガン「MP-5」シリーズの

小型にした銃だ。

MP - 5Kは小型であり、専用のアタッシュケースに入れればそのまま運用する事も可能だ。

見知らぬ男がアタッシュケース、そしてショートレイゴイカバールの

ヘクセと交戦した時に見た白狐……

白狐がショートレイゴイカバールに仇成す者の監視をしていたヘクセだとしたら、つじつまが合ひ……

「直江幸成君だね？」

男は笑みを浮かべて歩み寄つてくる。

アタッシュケースに入れたMP - 5Kは狙い難い為、近距離で使うのが普通だ。

調度、このように近寄つて必中射程に入つたら持ち手に付いた引き金を引けば……

いくら幸成でも近距離で、多数の弾丸を撃ち込まれて生きていられる自信は無い。

幸成が唾を飲み下したその時、男がアタッシュケースを持ち上げて開いた。

そのアタッシュケースの中には札束が詰まつていて、

それも諭吉である。

ザツと100万以上あるだろ？。

取り越し苦労よりもこの諭吉の束に幸成は激しく狼狽する。

「なつ……はあ！？」

「龍一郎様の御命令です。鳳寿様を助けて頂いた御礼の500万円です。どうか、お受け取り下さい」

「いや……は？ええ！？」

龍一郎……

確か神宮寺財閥の当主の名前だ。

てか、御礼に500万円つてスケールでか過ぎだろ、神宮寺財閥……

「あの……流石にお受け取りは……」

「しかし、主は是非、鳳寿様に良くして下さった幸成様に受け取つ

て欲しいとおっしゃっています」

部隊の資金には調度良いというのが本音である。

（そもそもHAWKの予算の倍以上どころか、完全に凌駕してやがる……）

H&K社の狙撃銃「SLE-8」のサブレッサー標準装備モデルの「SLE-9SD」や同じく同社のサブマシンガン「MP-5SD6」を購入すれば武装が大幅アップとなる。

もつとも、対ヘクセ用拳銃「スコトス&フォース」も敵に対しても、流体性力学的ショック、簡単に言うと体内の神経を伝播し、対象に即死並の威力を与える攻撃力を持つているのだが、要はリスクの問題だ。

流石にガン＝カタ宜しく一丁拳銃を接射で叩き込むのはリスクが高い。

目の前の大金を前に幸成は心が揺らぎそうになるが幸成は首を振る。「流石に受け取れません。それに俺の一存で貰う訳にもいきません」「なら親御さんにお話をしましょ」

そう言つと、男は雲莊の一室に歩いていく。

（しかし、まずいな）

目立つなと言われて目立ちまくりだ。

オマケに監視対象者の方からまさかの資金提供。

失態か、幸運かは別にして色々まざい。

半ば諦めたように幸成は頭を搔くと、男はドアをノックし、数秒して三村が顔を出す。

ブレザーに血が付いた幸成とアタッショケースを持った男に、やはりと言つべきか、三村も同じ結論に達して身構えるが、男もそれより早く口を開く。

「神宮寺財閥の者です。幸成君の保護者様で間違い有りませんね？」

「え、ええ……」

三村は何をやらかした、と目で訴えている。

（そりや そうなるわな）

幸成は自嘲すると歩み寄る。

「お嬢様である鳳寿様を助けて頂いた御礼でござります」

その声と同時に開けられたアタッシュケースを見た三村は間抜けに口を開けて、何が何だか分からぬといつた風に500枚の諭吉と男を交互に見る。

「あの……はい！？」

誰だつて動搖する額だ。

想像してほしい。

女の子を助けて、満身創痍で帰つたら500万円が家にある。ハツキリ言って現実味が無さ過ぎて今の状況すら把握出来ないだろう。

正直、まだへクセの方が現実味がある。

「ほんの御礼です。どうぞ、お受け取り下さい」

「流石に無理です！！」

三村はアタッシュケースを突き返すと男は笑みを浮かべた。

「流石、鳳寿様を御救い下さつた方のお父様だ。ですが、せめて50万円だけでも受けとつて下さい」

諭吉が50枚でも相当だぞ、と突っ込みたい衝動を抑えていと三村は「50万なら」と受け取つた。

（可笑しいだろ！…）

幸成は驚くと男は「ありがとうございます。これで私もお叱りを受けずに済みます」と笑い、アタッシュケースを閉めた。

そして男は三村に一礼すると車に乗り込んだ。

黒塗りのバンを呆然と見送る幸成は車の影が小さくなつたのを確認して、三村を見た。

「おっちゃん！！可笑しいって！…」

「流石に受け取りたくなかったが、少しは受け取らないとお兄さんが氣の毒だろ？」「

一理あるが、少しが50万だと！？

幸成が内心叫んだその時、三村の太い腕が幸成の頭を驚撃みにした。

「それより、聞きたい事があるんだ。幸成君」
三村は笑顔で言うと凄まじい力で幸成の中に引きずり込んだのだった
……

中に引きずり込まれた幸成が三村に事情を話し終えると深い嘆息を漏らした。

事情が事情であつたし、むしろ信用を勝ち取れた可能性がある。が、しかし、殺傷沙汰……幸成はひんぴんしているが……であるのもまた事実。

停学は確実、退学の可能性も十分有り得る。

「最悪だ……」

三村は頭を抱えると頭を搔いた。

「過ぎた事をクヨクヨ言つても……」

「仕方ないが、転校一日でやらかしゃがつて……」

幸成の最後の一言を遮り、三村は再び深い嘆息を漏らした。

その時、ドアが開く音が響き渡り、「大丈夫じゃないですか？」と彩花が入つて来る。

「立ち聞きをせてもらいましたけど、その心配は無いと思いますよお」

彩花はそう言つと部屋に上がり込んだ。

「だつてえ、相手はリンチをしたうえに、犯そつとしたんですよ？それを考えたらあ、そいつらが密告する可能性は無いと言えます。それに幸成も刺されてますからあ、間違いなく非はあちらですよお？」

確かにその通りだったが、奴らが密告したとして、果たして本当の事を言つだらうか？

そもそもこちらも手を出している為、正当防衛が適用されるかさえ怪しい。

「まあ、その時にならなきや分からんだけ」

「そうですねえ。そういうば貰つた500万円は何処ですかあ？」

人100万円の山分けで調度良いですから……

やはりこの人は金が目当てだつたが……

「50万円しか貰つてないから……」

「丸が一つ少なくなつても十分ですよ？貰えるお金は貰いますう
いや、これは防衛省にしつかり報告して、今後どう扱うか検討す
る必要がある。下手をすりや賄賂に成り兼ねないからな」

「えええ！？別にあちらが気持ちと言つてているんだからいいじゃな
いですかあ！」

彩花はいかにも不満です、と主張しながら頬を膨らませる。

三村の対応は当然なのだから仕方ないが、またとない資金調達の機
会であり、逃すのは勿体ない。

上手く、優にやらせれば改造武器が新たに作られるのだから……

「勿体ないですよ？」

「とにかく、今は防衛省に掛け合つてみる。勿論、直に、だ。下手
をすりやエシユロンに探知されて、米軍がでしゃばつて来るかもし
れないからな」

エシユロンとは簡単に言えばアメリカのNSAが保有する、電話や
メール、インターネットを監視する大規模な盗聴器なるものだと思
つて欲しい。

日本には無いと言われているものの、どこまで信用出来るか疑われ
る。

今回の事で揚げ足を取られたらそれこそ面倒だ。

「という訳で、俺は今から防衛省に向かう。四人はしつかりとヘク
セの監視をするようだ！」

三村本人も、やはりこの50万円が欲しいらしい。

流石、貧乏部隊と幸成は笑つた……

長い石段に並ぶ桜並木。

まだ芽しか出でていないこの木も春が本番になつたら綺麗な花を咲かせ、薄い桃色の花びらを風に舞わせるだろう。

その石段には紅白の提灯が並び、明日にはお祭りが始まるのだと告げる。

沙耶那は最後の調整に見回りをしていた。

不備が有つたら申し訳が立たない上、楽しみにしている人達の期待を裏切る事になる。

その最後の見回りを行つてゐる沙耶那の姿は典型的な巫女服で、巫女さん属性を持つてゐる人は狂喜乱舞してしまつ程に映えた。

明日の舞の練習も終わり、これが終われば、今日は何も無い。

昨日の夜は家の仕事の為に外出禁止令を破つて外に出たが、今日はそれが無いのが嬉しい限りだ。

「明日が本番……凄く楽しみ」

沙耶那は微かに笑うと空を見上げた……

三村が防衛省に出向いてゐる間、幸成達、HAWK隊員にもう一つ事件が発生してゐた。

「「GARUDAが使えない」！？」

幸成と優は同時にロイに迫ると、ロイは「落ち着け」と弁明する。

「そもそも偵察衛星が同じ場所に留まると思つてゐるのか！？」

「違うんですかあ？」

彩花は食後の紅茶を啜ると片目を開けてロイを見る。

ロイはやれやれと金髪の髪を靡かせながら首を振つた。

「偵察衛星は低軌道を取つて、一日一回から数回、同じ時間に同じ場所に現れる。その時間に固定しないと使うタイミング逃す。使用

出来的る時間は19時から24時の間。つまり、まだ使えないんだよ

！」

ロイは時計を差す。

時計は18時を半分回った程度だ。

「しかも、華景市の上空にいない場合は米軍の管理下に置かれて使用出来ないと契約書に書かれていただろ？」

ロイの一言に三人は華景市に行く前に書かれた契約書の一文を思い出してそれぞれ納得する。

本当に特殊部隊の面子かと疑うが、改めて申し上げるが彼らは「その道」のHキスパートだ。

あくまで「その道」のあるが……

「という事は、その監視タイミングをシユトレイゴイカバールにバレたら悲惨じやないか」

優の一言にロイは「だから言いたくなかったんだ」と苛立ち混じりに呟く。

「考えて見ろ！仮にここに盗聴器が有つたらさつきの情報が筒抜けだ。ここに来て俺達しか出入りしてないから良い物を……」

確かにロイの言つ通りだ。

偵察衛星の監視時間は一定である為、その監視時間を避けて行動すれば空からの目をかい潜れる。

つまり、偵察衛星が形骸化しかねないという事だ。

「それで思い出したんだがロイ。昨日の衛星の写真を頼む」

「どうかしたの？」

「ロイツが都市伝説の白狐を見たんだと」

「白狐ですか？」

「ああ。ヘクセを追跡中に偶然確認した。路地裏だったから衛星で確認出来るかは分からぬけど……」

「それを今から確認すればいいだろ？」

ロイは嘯くとパソコンのキーボードを叩き、昨日の衛星の録画映像を出す。

録画映像は青で彩られ、幸成達は赤で、熱を発する移動物は白で映し出され、肝心のヘクセは緑で移される。

「何処で見たんだっけ？」

「ワイヤーでの移動中」

「ワイヤーでの移動中つと……これだ」

ロイは手早く映し出すが青く染められた路地裏には何も映つていない。

「何も映つてねえぞ？」

「確かに見たんだが……」

幸成は小首を傾げると何も映つていないHSVの映像を凝視した。

「まあ、そのうち分かるんじゃない？」

優は楽観的に笑うとテレビを付けた。

「おいおい、任務中にテレビを見るな……」

幸成が諫めたその時、テレビの向こう側で血相を変えた女性キヤスターがマイクに言葉を吹き込んでいた。

（先程、山林で見付かった六人の死体の身元が判明しました。死体は華景高校の生徒で米山麗奈さんと……）

「嘘だろ！？」

「どうかしましたかあ？」

「コイツらだよ！例の六人！」

幸成は映し出された六人の写真を見て怒鳴る。

その六人は間違いなく米山麗奈とあの男達五人組だ。

狐につままれたような顔の幸成は「何で……」と呟く。

仮にヘクセだとしたら複数か？

ヘクセは襲う相手の前提として、血を吸う相手が異性である場合が多い。

これは実際の吸血鬼伝承にも多く見られる事だ。

また、血を吸う事で、血を吸われた相手は性的快感を得る。

これも吸血鬼伝承に見られる事だ。

つまり、卑猥ではあるが結論から言うと吸血鬼の吸血というのは人

間で言つところの性交である。

ディック・チャンバーの時も、首に歯を突き立てて飲むのではなく、刃に付いた物を舐め取る程度であつたのは記憶に新しい。

男のヘクセは女性を、女のヘクセは男性を襲うのが普通なのだが……
「恐らく逆鱗に触れたんでしょうかねえ？可能性としてはヘクセが複数かあ、ブチ切れられたとしか考えられませんからねえ」

彩花は人事のように呟くと紅茶を啜る。

逆鱗に触れたとなれば、話は早い。

（たつた今情報が入りました！死体は白骨化していたと警察から発表がありました！）

血を吸われて縮んでも白骨化する事は有り得ない。

「やはりですか。言つてしまえば想定の範囲内ですねえ」

彩花はそう言つと、テレビのチャンネルをニュースからドキュメンタリーへと変えた……

3・1・祭り

春風が吹く華景市はいつも以上に賑わっていた。祭りというだけに多くの人達が華景市に訪れている。

「何を着ればいいかな……」

幸成は布団の上に並べられた私服の数は非常に少ない。（無難にワイシャツとズボンという出で立ちでいいかな？）

単にブレザーが無い学生服だと突っ込むのは無しだ。

幸成はワイシャツにネクタイを緩めに締める。

「まあ……大丈夫だろ」

幸成は笑うと財布と携帯電話をポケットに仕舞うとドアを開けた。目的は鳳寿の信用を勝ち取る事と沙耶那、菜月の素性を正確に洗う事だ。

鳳寿の信用を勝ち取り、神宮寺財閥の事を聞き出すのが目的だが、沙耶那と菜月の素性は知つておきたい。

沙耶那と菜月は親しいようで実際の所は何も分かっていないのだ。

沙耶那は三神神社の娘、菜月は華景高校の園芸部、知つているのはその程度であり、情報と言える情報ではない。

この機会に何らかの情報を掴み、何らかの形で使えるよう、要は協力出来るよう出来れば最高だ。

幸成はドアノブを掴むと大きく深呼吸をした。

「Take the field!!（出動だ）」

「お父様、舞踊の為の禊は終わりました」

白い小袖に緋袴の装束の沙耶那は笑顔で父親の三神翼に笑いかける。

みかみ つばさ

「あ～」

翼はやる気ない返事で答えた。

彼にとつて、寝ると食べると娘が唯一、やる気が出る話題だ。祭りの事は彼にはやる気が出ない話題の一つである。毎年、準備をして色々と大変であり、無氣力な彼には苦痛以外の何物でもない。

ただし、娘である沙耶那の舞踊は別である。

「あなた？ もつとやる気を出して上げて下さい」

「それなりに、な」

それを諫めたのは沙耶那の母親の三神望^{みかみ のぞみ}は腕を組み、子供のように頬を膨らませた。

父親の翼は切れ長の瞳に端正な顔立ち、母親は可愛い端麗な顔立ち、そんな美男美女のカップルから生まれたのが沙耶那のような女の子だというのが頷ける。

「お母様、今日は良い天気ですね。お祭りには良い日和でござります」

「そうですね。とつても良い日和ですね、沙耶那」

望は優しく微笑むと空を仰ぎ見た。

参拝客の姿はちらほら見え、祭りが始まると告げている。

「今日を楽しい日にしましょうね、沙耶那」

望は娘の沙耶那に優しく微笑み、沙耶那も微笑みを返した……

つづづく、自分はオシャレに向いていない、と苦笑する幸成は三神神社に歩いていた。

多くの参拝客しかり見物客で狭い道が人で埋め尽くされていた。
(予想以上に人が多いな)

三神神社から零荘までは地図から見る限り、徒歩で約10分程度の距離だがこの人混みでは少し掛かりそうだ。

「ユキくん！！」

幸成を呼ぶ、元気な呼び声に気付き、向こう側から駆けて来る菜月を見付けた。

菜月はオシャレなフリルの付いた白いワンピースを着ている。

「……可愛いな……」と言って、幸成はポーチだと思っていた紐を見て、水筒だと知り、吹き出した。

「小学生の遠足か！？」

「何か言った？」

菜月は上目で幸成を見上げる。

いたいけな様子の菜月の可愛い仕草に幸成は頬を緩ませた。

「わざわざ向かえに来てくれてありがとうございます」

幸成は菜月の頭を優しく撫でた。

故意というよりは無意識といった感じで、菜月が小学生のような風貌だったからという事もあつただろう。

頭を撫でられた菜月は狼狽しながらも、主人に甘える猫のように気持ち良さそうに甘える。

「菜月＝猫」の式が今、幸成の中で成り立つた。

「ほええ、ユキ君の撫で撫で、とっても気持ち良いよ」

うつとりと目を細める菜月は愛嬌のある声で幸成にじやれつく。

不意に冷静になつて気付くと周りの視線が突き刺さり、幸成は頭を撫でるのを止めた。

冷静に考えたら幸成が小学生にちよつかいをしているようにしか見えず、事情を知らない人が見たらロリコンやペドフェリアに成り兼ねない。

子供を恋愛対象に見たり、幼女で欲情したら犯罪者、現在の状況では言い逃れは出来ないだろう。

幸成は慌てて手を引つ込めると歩き出した。

「えつ？ ちょっとユキ君！ 何で止めちゃうの…？ ねえ」

菜月も幸成の背中を慌てて追い掛けた……

「チツ！幸成の野郎！二回爆発してHロゲの世界に転生すりやいいんだ！」

憎らしいと言わんばかりに爪を噛むロイは二回の自室から楽しげに歩く幸成と菜月を双眼鏡で見つめる。

横で見ていた優も小さく呟いた。

「何で小学生と付き合つてゐるの？横のロリ……M134で蜂の巣にしてやりたい……」

「なつ！？」

「M134 ミニガン」とは手取り早く言えばガトリングである。7.62×51mm NATO弾という高威力のライフル弾を使用するその重機関銃は毎分2000～4000発で弾丸を発射する為、ヘリ「プターはおろか人間なら木つ端みじんだ。

蜂の巣どころの話ではない。

「物騒な事を言つなよ、おつかねえ」

ロイは軽く震えながら恐怖しつつ、優を見る。

彼女ならやり兼ねないから恐ろしい。

「あらあらあ、嫉妬は恐いですねえ？お一人さんは少しばかり落ち着いて下さいねえ」

「彩花さん、こんなの見ても胸糞悪いだけですよ」

ロイは頭を搔きながら彩花に言つが、彩花は優雅に紅茶を飲む。

「それは貴方がお相手を見付けられなかつただけですよねえ？優の方も大好きで仕方ない幸成を誘えなかつたからですよねえ？」

「それを言われると言い返せない……」「

ロイと優は言い返せない歯痒さに溜息を漏らす。

元よりこの彩花という人物に勝とうという事が無謀である。

「さてさてえ？ 望遠レンズも取り付けてしつかり弱みを握りましょ
うねえ？」

魔王か、この人は……

二人は抗えない歯痒さと幸成の弱みを握れる絶好の機会を逃さん為
に望遠レンズを取り付ける。

ロイが望遠レンズを覗くと、意外にも一人はもう三神神社の石段の
手前まで来ていたのだつた……

人混みの中を歩き、三神神社にたどり着いた幸成と菜月の前に黒塗りのバンが止まっていた。

見覚えのあるナンバープレートの車に幸成は歩み寄ると後部座席から白いセーラー服姿の鳳寿が出て来る。

鳳寿は相変わらずの無表情で幸成と会流すると、菜月を一警した。

「待ちましたか？」

その問い掛けに鳳寿は首を振る。

正直、拍子抜けしたというのが感想であつた。

鳳寿は財閥のお嬢様なのだから何かオシャレな服を着てくると思つていたのだが……

「鳳寿さん。何で学生服？」

「……先輩も……」

「……ええ、そうだったな……」

（それにしたつて、貧乏人もとい貧乏部隊の俺はともかくお嬢様の鳳寿がセーラー服か……）

幸成は怪訝な表情で眉を潜めると「あれ？ 皆、お揃いでお出ですか？」と笑いながら沙耶那が石段を降りてくる。

沙耶那の大振りの胸のせいで神聖な巫女服が目やり場に困る服装に変わってしまう。

幸成は沙耶那の胸をチラと見ると申し訳なさそうに空を見上げた。しかし、再び見てしまうのは男の性だらう。

「もう少しで舞踊が始まります。上でゆっくりしていって下さい。上には少しですが露店が並んでいますよ」

「サヤ、わたあめ有つた？」

「ええ」

「やつた！ ちょっと買つてくるー。ユキ君、先に行つてるね」

「私も舞踊の準備がありますので先に行きますね」

「分かりました」

二人の背中を見送った幸成は鳳寿を一警する。

鳳寿は笑うという事もなく、ただ無表情に俯いていた。

何かふさぎ込んだような鳳寿を一警した幸成は笑いかける。

「え~っと、良い天気だね?」

「……ん……」

「傷、大丈夫?」

「……ん……」

「あ~……」

「……無理しなくていい……アタシに関わった人は皆死ぬから……」

鳳寿はそう言いつと駐車させていた黒塗りのバンに向かつて歩き出した。

それを幸成は腕を掴んで制止するが鳳寿は負けじと怒鳴る。

「何で皆がアタシを避けているか分かるか!?」

「……」

「アタシに関わった人が皆死んでるからだ!!アタシは運命に呪わ
れてるんだ!!」

「何を言つて……」

「昨日、アタシにちよつかいを出した奴が死んだし、先輩だつて刺
された!!アタシに関われば死ぬんだ!アタシは死神だから……」

「……お前、馬鹿じやねえの?」

幸成は面倒臭そうに髪を搔き上げる。

「この世に死神なんていねえよ」

吸血鬼はいるけど……

「あいつらは何かの事件に巻き込まれて死んだ。俺だつて昨日刺さ
れても、今日はぴんぴんしてる。お前が死神な訳あるかよ!!」

幸成は大声で怒鳴り返すと周りの参拝客が何事かと凝視した。

しかし、幸成はそれを無視して続ける。

「お前が何でそんなに暗いのかは知らない。だが、お前と関わって
も俺は死ない」

お前と関わっても俺は死なない……お前と関わっても自分は死はない……かつて三村に言われた言葉。

10歳の時に三村に会った時に言われた言葉だ……

鳳寿は昔の俺みたいに何かを背負つてる。

重い十字架のような何かを……

「一人で抱えるな。俺は死ない。約束するよ」

幸成は俯く鳳寿に優しく笑いかけるとその手を離した。

信用してくれるかは彼女次第だ。

今は任務の為ではない。

彼女の為だ。

彼女が一歩歩み出るか、今ままか、それは彼女次第であり、幸成もした選択肢であった。

どちらを選ぶかは彼女次第だが、前者は何が有るかは分からぬ、そして後者は安定しているが今ままだ。

俺は前者を選んだが、彼女は……

幸成は鳳寿を見つめると、鳳寿は車の中に入った。

無理強いではないのだから、彼女の選択にどういふ言ひつもりは無い。

ただ残念ではある……

幸成はゆっくりと目を閉じ、髪を搔き上げながら溜息を漏らしたその時だった。

「……先に返つて下れ……」帰りは徒歩で帰ります

「しかしつ……」

「……聞こえなかつた?」

鳳寿はそう言つと有無を言わさないといつた風に車の扉を閉め、車から出て來た。

拍子抜けし、口をあんぐり開けた幸成に初めて笑つて見せる。

「これから何処に行く?先輩?」

「あ……取り敢えず神社に行こい」

「……うん

笑えば可愛い、と幸成は鳳寿を見て思う。

二人は黒塗りのバンを見送ると石段を上つていった……

石段を上り終えた二人は改めて神社の人混みのなかに驚いた。

神社は石段を上った場所が広い空間となつており、そこに屋台や露店が並んでいる。

そして沙耶那の舞踊が行われる場所は広場の奥にある古い建造物だ。その建造物は一般的な劇場の舞台のような構成で、その隣に本殿となつていた。

その本殿の後ろが沙耶那自宅である。

「人、結構多いな」

「……うん」

こりや菜月を探すのも一苦労だな、と思つた矢先、幸成の名前を呼ぶ声が聞こえ、人混みを掻き分けてやつて来る菜月の姿が見えた。菜月の手には屋台の戦利品であろう、わたあめやリングゴアメ、ショイクが握られている。

それを抱える姿は殆ど元気な小学生だ。

菜月が合流すると幸成は笑いを堪えて言ひ。

「随分買つたな。お金、大丈夫か？」

「うん」

菜月は元気良く答えるとわたあめを口に運ぶ。わたあめを小さな口で精一杯頬張る姿は愛らしく、思わず笑いが零れる。

「そんなに慌てて食べなくてもいいだろー。」

それを聞いた菜月は上田で幸成を見ると、わたあめを食べながら口を開く。

「だつて美味しいんだもん！ ゴキ君も食べる？」

「いや、俺はいらない」

菜月はその答えを聞くと口を尖らせるが、すぐに鳳寿にリングゴアメを差し出した。

「はい。奢りだよ」

「……ありがと……」

鳳寿は躊躇いながらもリングコアメを受け取り、リングコアメを舌先で舐める。

同時に鳳寿は目を見開き、「美味しい」と呟く。

「ところで沙耶那さんの舞踊はいつ頃始まるんですか?」

「あと少しかな?」

菜月はわたあめを頬張り、飲み込むといつもの水筒から飲み物を出す。

相変わらず同じスポーツドリンクで幸成は苦笑する。

ましてや、シェイクを買っておきながらそれを飲むかというツッコミもしかり。

幸成達は舞踊が行われる場所まで行くと、間もなくして笛の音が響き渡った。

見物客は一斉に建物に近付き、舞台の上を注目する。そんな中、幸成は近くにあつたパンフレット置場からパンフレットを取り、それを開くとその舞踊の解説を見る。

この舞踊はかつて人々に暴力を振るつていた鬼を退治する白狐の伝説を元にした物だ。

人々に狼藉を働き、沙耶那の先祖の巫女をさらつた鬼は華景市の桜を咲かせないように呪いをかけた。

その鬼を退治する為に、華景市の守り神であつた白狐が立ち上がり、白狐は鬼と相打ちになりながらも鬼を退治し、巫女を助け出す。その白狐の死体を燃やした灰を巫女が撒くことで桜の花が咲き、白狐を神として崇め、巫女を「^み神子」として崇めた。

そして、毎年桜が咲くようにと祈願するようになったのがこの祭りである。

(まるで花咲か爺さんだな)

幸成はパンフレットを畳むと始まった舞踊を見た。

横笛の音色と和太鼓の音とともに般若の面を付けた男性が入場して

くる。

般若、つまり女の鬼が刀を振るい、舞を見せた。

激しいその舞は鬼の恐ろしさを醸し出し、刃が太陽に照らされて煌めぐ。

その様に泣く小さな子供を見ると、秋田のナマハゲがやつて来た時の子供の反応を思い出させる。

笛の音と和太鼓の音の調和が佳境に入つたその時、巫女役の沙耶那が綺麗な扇を持ち、舞を踊りながら舞台に入場した。

刀と扇が舞い、巫女が捕らえられる場面が行われる。

鬼は巫女の首に刀を突き付け、沙耶那の後ろに鬼が回り込み、刀を突き付けながら奥に消えていく。

それと同時に白狐の面を付けた女性が現れた。

女性は巫女が連れ去られた事を嘆くと同時に笛の音が響き渡る。

それはまるで狐の鳴き声であるかのように……

狐の鳴き声が響き渡ると般若と沙耶那が現れ、和太鼓の音が響き渡り、テンポが激しくなる。

白狐と般若が刀で舞いながら交差し、演舞が数分行われた。

そして、和太鼓と笛の音色が落ち着くと、般若と白狐が退場し、残された沙耶那が自分を助けてくれた白狐の為に舞を踊る。

舞いはどこか儂げだが、優雅で……

菜月が語った通り、綺麗で美しいその舞いは見物客や参拝客の目を引き、幸成さえも見取れてしまう。

舞が激しさを増したと同時に桃色の紙吹雪が舞い上がり、一斉に拍手が鳴り響いた。

舞い散る紙吹雪の中で踊る沙耶那は非常に美しくて、まるで本当に桜の中で踊っているようだ。

拍手が鳴り響く中、沙耶那は優雅な舞いを踊り続けたのだった……

靴がコンクリートを叩く音が一つ。

片方はスポーツシューズともう片方がハイヒールだ。

「助けてくれ！…誰か！…」

男は大声で叫びを求めるが、今日は祭りの日で路地裏の人通りは無い。

転びそうになりながら逃げる男は深淵の中に向かって逃げているようだ。

その後ろを追い掛けるハイヒールの女性はトンプソンM1928サブマシンガンの銃口を上に向けながら速足で追い掛ける。

M1928はギヤング映画に必ずと言つていい程出てくるサブマシンガンで、シカゴマフィアに好んで使われ、独特の発射音から「シカゴタイプライター」や「シカゴピアノ」とも呼ばれていた銃だ。

「どこに逃げるのかしら？」

女は円形の50発入りドラムマガジンを取り付けたシカゴタイプライターを構えると引き金を引いた。

その名の通り、タイプライターを叩いた時のような銃声と同時に逃げていた男は地面に倒れる。

シカゴタイプライターが使用する .45ACP弾は拳銃弾としては強力な部類に入り、それで足を撃たれれば転倒は必至。

男は転倒しながらも両手を交互に出して這うが、女の速さよりも遅く、逃げるのは不可能だ。

「誰か……」

血を右足の太股から滴らせ、力無く助けを求める男の足に、女はハイヒールを上げ、男の傷口に思い切り下ろした。

「ギャアアアアアアアアアアア！」

男の絶叫が轟くと、ハイヒールが傷に食い込み、男の悲鳴がさらに凄みを増す。

「すぐに気持ち良くなるわよ？激痛の後の快楽程、良いものは無いわ」

そう言つと、女は失禁した男の髪を掴み、持ち上げると首に噛み付いた。

飛び散る鮮血が路地裏と女の服を濡らし、男の目は白目を向く。涎れをだらし無く口から垂らす男は小刻みに痙攣させると、その男は意識を霧散させていった……

舞いが終わり、三人は沙耶那の家に向かつた。

昨日のうちに菜月が沙耶那と連絡を取り、舞踊が終わつたら合流する手筈を整えてくれたのだ。

本殿の裏手の一階建ての家に挨拶をして入つた三人を迎えたのは白狐役をしていた沙耶那の母、望だつた。

長い黒髪を後ろで束ねた美しい女性だ。

望は三人を見ると頬を緩ませる。

「菜月ちゃん、いらっしゃい。それと、失礼ながらこちらの方達は？」

「転校生の直江幸成君と神宮寺鳳寿さん」

「初めてまして、沙耶那の母の望です。娘がお世話になつてます」「望は深々と一礼し、幸成も慌てて一礼する。

「いえいえ！！自分が沙耶那さんにはお世話になつてます」

幸成は頭を上げ、何気なく前を見るとむつちりとした一つの丘があつた。

ゆつたりとした着物が沙耶那に負けない大きな胸で窮屈となり、幸成は天井を見上げ、その場しのぎでごまかす。

その時、奥の方から沙耶那の声が聞こえ、沙耶那は顔を覗かせる。

「すいません。待ちましたか？」

「ううん。待つてないよ」

菜月は笑顔を見せるが、明るい赤の着物を着た沙耶那が出てくる。大和撫子を体言するような彼女は男性なら思わず溜息を漏らすような美しさがあり、可憐だ。

「ところで沙耶那？」

「どうしたの、お母様？」

「誰が幸成君と付き合つてゐるの？」

その問い合わせに幸成と沙耶那が顔を紅潮させて口を開ける。

「お母様！！」

「あれ？ もしかして誰も付き合つてないの？ 幸成君はイケメンだから皆狙つてるでしょ？」

「……別に

「ナツも恋愛対象としてはみてないな～」

（露骨に傷付くな、その発言……まあ、そりやそうか）

幸成はばつが悪そうに頭を搔くと奥から男性が飛び出してくる。

「沙耶那が付き合つてるとー！」

セミシヨートに白い着物を着た男性は日本刀を引き抜くと沙耶那と望の間に割つて入り、幸成に刀を振り下ろした。

どうやら鬼の役をやつた人物のようだ。

男性は左足を前にし、上段に構えた刀を斜めにした構え「左上段」で幸成まで、駆け寄る。

左上段で構えられた刀が振り下ろされ、空を斬る音が響き、刃が閃く。

慌てた幸成はその刃を眼前で受け止めるが、男性は幸成を斬るべく切つ先近くの峰を押さえながら怒鳴る。

「娘を誑かしやがつて！！」

「何の事だよ！？」

幸成は歯を食いしばり、その力に対抗する。

人生で初めて白刃取りを成功させたはいいが、後にも前にも引けない

いからにはどうしようもない。

驚いた菜月と鳳寿は玄関の壁に取り付き、助けは望めない。

「あなた！！！真剣で切り掛かるのは止めて下さい……」

「真剣つて普通に危ねえじゃねえか！？」

望の声を聞き、条件反射で受け止めて良かつたとつづく思つ。

刹那、男性は望に頭を叩かれて刀の柄から手を離して頭を押さえる。

「つづく！！何をする、望！！天誅の邪魔をするな……」

「あなたを天誅してやるわよ！」

望は腕を捲り、男らしく怒鳴ると、幸成を見て再び深々と頭を下げる。

「家の主人がご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

幸成は真剣を地面に置くと深く嘆息を漏らし、白い刀身を一瞥する。いくら回復力が高くても刀で頭をかち割られれば死んでいただろう。流石に知り合いの家で、その父親に斬り捨てられるのは御免だ……

「こちらが夫の翼です。見ての通り親バカです……」

「ごめんなさい。怪我は無いですか？」

「あ、ああ……奇跡的に大丈夫……」

本当に奇跡的に……

「お父様も謝つて下さい」

「笑えねえ……娘に纏わり付く虫を払うのは父親の役割だろ？」

「謝りなさい……」

沙耶那と望はまるで母親か姉のような口調で翼に怒鳴り、翼は面白くなさそうに口を尖らせる。

「……申し訳ありませんでした……一つ言つておく……沙耶那を泣かしたり、付き合つようなら斬つて捨てる……」

胸を張つて堂々と宣言する翼は再度頭を叩かれ、よろめく。

下手をすればヘクセよりもこの人に、勘違いで殺されかねないと幸成は苦笑する。

「では、行つてきます」

沙耶那が言つと両親はゆっくり頷き、手を振つた。

その見送りを背に沙耶那の家を出た四人は広場の屋台に向かつた。

美少女三人と一緒にいる幸成に刺さる視線が痛い、痛すぎる。
(殺意すら感じるぞ、おい……)

幸成は紺色の髪を搔き上げると深い嘆息を漏らした。

「どうしたのですか?」

「いや、敵は一つだけじゃないって思つてさあ」

沙耶那の問い掛けに幸成は苦笑いを浮かべ、三人は首を傾げる。

「そこのモテモテの兄ちゃん!!」

不意に肩を叩かれた幸成は条件反射で身構えるがそこには中年の男性が立っていた。

男性は煙草を口にくわえ、満面の笑みで近くの屋台を指差す。

「彼女達のプレゼントに射的でぬいぐるみを取らないかい、兄ちゃん?」

男性は射的の屋台の人らしい。

見ると可愛らしいぬいぐるみが並べられている。

「うわあ!! 可愛い!!」

「幸成君、お願ひ出来ますか?」

「はい。一回何円ですか?」

幸成は財布を開きながら男性に問い合わせる。

「弾が3発で300円! 6発で500円だ」

「じゃあ、3発分で」

幸成は100円玉を3枚取り出し、男性に手渡した。

「3発では取れないと思うよ、兄ちゃん?」

「やらないきや分かりませんよ」

幸成は笑つて見せると射的台に立ち、射的用のおもちゃのライフルを掴む。

ボルトアクションを模したライフルのバネを後退させて、プラスチックの皿に乗せられたコンクをライフルの先端に詰める。

「それぞれ何のぬいぐるみがほしい？」

「ウサギのぬいぐるみをお願いします」と沙耶那。

「猫さん！」と菜月。

「……熊」と鳳寿。

ある意味それぞれ動物に例えたらそうなりそうだ。

「了解」

幸成はリアサイトの間にフロントサイトが見え、目標に銃口が重なるようにライフルを構える。

そして、ゆっくりと力まずに引き金を引くと、レバーが前身してコルクが発射された。

コルクはウサギの額に当たり、台から落とす。

シガレットやラムネ等は簡単だが、ぬいぐるみとなると倒すのは難しい。

幸成はそれをたった一発でやつてのけたのだ。

男性もまさか一発で倒すとは思つていなかつたらしく、啞然とし、口にくわえていた煙草を取り落とす。

「まずは一個目な？」

幸成はレバーを引きながらニシと笑い、コルクを詰める。

「次！」

狙撃の要領と同じだ。

目標のバランスが悪い場所にコルクをピンポイントで叩き込んで倒す。

ましてやヘクセのような速く動く相手に拳銃を使うのと違い、全く動かないぬいぐるみを照準の固定がし易いライフルで狙うのは非常に簡単だ。

しかも幸成は射撃能力が高い自衛官に贈られる射撃徽章を持つている為、一メートルの距離の射的は造作も無い。

二つ目の猫も易々と倒した幸成は最後の熊のぬいぐるみに銃口を向ける。

そして案の定、簡単に熊のぬいぐるみを撃ち倒した幸成は悔しがる

男性からぬいぐるみを受け取り、三人に配る。

「ユキ君凄い！射的のプロ？」

「一応、初めてやつた」

幸成は頭に手を当てて笑う。

「……ありがとう」

鳳寿は熊のぬいぐるみを満足げに見ながら呟く。

「幸成君は何をやらせても得意そうですね？何か苦手な物とかありますか？」

「苦手な物か……」

ロイの女癖の悪さとヘクセ、と答えられる訳もなく幸成は考え込む。冷静に考えたら苦手な物はあまり無いかも知れない。基本的に自衛隊の訓練は何とかなったし、炊事や洗濯等の家事も人並みに出来る。

「正直、思い当たらない……」

幸成は難しい顔で唸りながら答えると、沙耶那は「それは凄いですね」と笑いかけた。

と、同時に菜月は近くにあつた金魚掬いに駆け寄る。

「皆で金魚掬いやろー」こいつなつたらユキ君の苦手分野を洗いざらい見つけ出してやる

菜月は無邪気に笑うと、三人は金魚掬いの屋台に歩み寄つた……

3・5・謎掛け

デジタル時計が17時のアラームを鳴らした。

任務の都合上、この時刻には切り上げなければならない。

腹が減つては戦は出来ぬとはよく言った物だ。

実際の所、任務の一時間前に夕食を食べ、尚且つ腹ごなしをしないと力を発揮出来ない。

つまり、偵察衛星が固定される19時の一時間前には帰る必要があるのだ……

「俺、そろそろ帰ります。血吸い人が恐いですし」

幸成は冗談混じりに笑うと鳳寿も「……アタシも」と呟く。

「じゃあ、今日はお開きにしましょうか」

沙耶那は優しく微笑むと、全員から貰つた金魚を見ながら大きな声で言う。

「じゃあ、明日も皆で遊ぼう? せつかくの三連休なんだしね!-!」

菜月はそう言うと、携帯電話を取り出した。

「連絡を取りやすいように皆の連絡先を交換しようよ」

正直、あまり連絡先を教えたくはないが、これを断る道理も無い。皆がそれぞれ携帯電話を取り出し、幸成も折り畳み式の深い青色の携帯電話を取り出す。

一人ずつ赤外線でアドレスを交換していくた……

望遠鏡の隣に散乱した潰れた多くのアルミ缶。

ロイは半ばふて腐れながらシガレットを口にくわえていた。

遠くから見れば髪を金髪に染めた不良少年が煙草を吸つているよう

にしか見えない。

「あ～、畜生……何で幸成だけなんだろう？」

「少なくとも顔はいいよね？『顔』は……」

優はオレンジジュースを煽りながらつまらなそうにロイにハツ当たりをする。

その様子を面白そうに見ていた彩花は口を開く。

「今回は自業自得ですよねえ？まあ、仕方ありませんねえ。だって彼は任務優先だから、優の相手はしないと思いますしね、ロイももつと誠実にならないと彼女は無理ですよねえ？」

「本当の事を言われると辛い……」

優は体育座りで隅に座るといじける。

子供かと突っ込みたいロイを見て、彩花は目を細めて問い掛けた。

「貴方は堪えてないんですねえ？もしかしたらですけど、実は女たらしさは狂言でえ、彼女なんて要らないとか思つていいんじゃないですかあ？」

彩花の一言にロイは目線を落とし、深い溜息をついて肩を竦めた。

「さあて、どうかな？」

ロイは何でもないようく笑うと近くにあつた飲みかけの炭酸飲料を一気に飲み干し、缶を潰す。

「誰だつて嘘を言つ。だが、それが事実かどうかは本人にしか分からぬ。彩花さんの予想は正解でもあり、誤答でもある。これはいかに？」

ロイは謎掛けのような口調で答えると、彩花は「成る程、良く分かりました」と呟く。

「どういう事？ボクにはさっぱり分からんんだけど……」

「彼はしつかりヒントを言つてますよお？そして答えもでますから、ゆつくりと考えてみて下さいねえ？」

彩花は首を傾げながら優に笑うとティーポットから紅茶を注ぐ。

紅茶はティーカップの半分程でティーポットから出るのを止めた。

「あらあらあ？お茶が無くなってしまったねえ？そろそろ切り

上げましょつかねえ。時間も時間ですから、幸成も帰つて来ますからねえ?」「

「ヤバイ!! 夕食の支度してないよお……」

優は頬に手を当てながらムンクの叫ぶ宣しく、絶望的に洟つた声で咳く。

「幸成関連になると周りが見えなくなるな」

ロイは指を差しながらクツクツと笑いを堪えながら言つ。

優は憎らしげにロイを見ると立ち上がり、ロイを見下ろしながら口を開く。

「ロイには夕食を作つてやらなーいからーー!」

「ちよつ!! それは無い!!」

ロイは部屋を退出する優にすがり、彩花だけが夕日が注す部屋に残された。

冷めきつた紅茶の匂いを堪能しながら彩花は小さく咳く。

「謎掛けの答えはあ……誰だつて嘘をつき、事実かどうかは本人にしか分からないんですよね? つまり、自分でも分からぬといふ事でえ、正誤は無いといふ事ですよねえ、ロイ?」

彩花はそう言うと紅茶を飲み干した。

（何が在つたんでしょうかねえ、彼は……）

彩花は外を眺めながらティーカップを机に置き、声に出して笑つた

……

幸成が帰宅してから約四時間経った。

青いHSVの映像を眺めていたロイは不意に声を荒げた。

「ポイントC9ジユリエットへクセを確認！！」

その声に三人は画面を凝視した。

上空からの目が緑色に映し出すヘクセを捉え、その動きを監視する。敵は広い路地裏を歩き回り、獲物を探しているようだ。

狭い路地裏だったから白狐を確認出来なかつたが、今回は広い路地裏だつたのがこのヘクセの運の呪い。

「現地への移動手段はどうする？」

「指示は任せた」

「しかし、おっちゃんには連絡しなくていいのか？」

「臨機応変が常の部隊だ。仕方ないだろ？」

幸成は黒の戦闘服に着替えながら答えるとホールスターに二丁拳銃を入れる。

「分かった」

「彩花さんはいざといつ時の医薬品の準備を、優さんは弾薬の補充の準備を頼む」

二人はゆっくりと頷くとすぐに準備に取り掛かった。

HAWKにおいて作戦の指揮は階級ではなくエージェントの判断となる。

エージェントは作戦において現地に赴く為、彼の判断で各自の隊員に指示が下されるのだ。

「さてと、敵はシユトレイゴイカバールか、はたまたはぐれヘクセか……」

装備を整えた幸成はフックショット「HAWK・BIL」ドルビボーレン「を構え、外に飛び出すと50m先の建物に放ち、移動を開

始した……

闇夜の中を駆けて行く白い影。

闇を切り裂くその影は長い髪に白狐の面を付け、左手には刀。

白狐は真っ直ぐ目標に向かつて行つた……

建物の屋上に降り立つてはドルビーボーレンで別の建物に飛びを繰り返して目的地に向かつていた。

不意にヘッドセット「HAWK-EYE フューラー」からロイの声が聞こえてくる。

（こちらスカイアイ。敵はポイント09インディオにある廃工場に移動した、オーバー）

「ロメオ、了解。オーバー」

幸成は指定されたポイントの近くにあるビルに立つとフューラーをナイトビジョンに切り替える。

（敵は銃のような物を持っている。気をつけろ。スカイアイ、アウ（ト））

ロイの無線が終わると同時に廃工場の窓にシカゴタイプライターを持った女性の後ろ姿が見えた。

女性は赤いハイヒールに赤いドレス、茶色のセミシートの出で立ちだ。

幸成はHUDのナイトビジョンをHSVに切り替える。

女性の色は緑、間違いない。

「こちらロメオ。何度も済まない。敵を確認した。武器はドラムガジンのシカゴタイプライターだ、オーバー」
(M1928かあ……歎獲したいな)

優の声に幸成は「貧乏部隊には要らないだろ」と突つ込む。シカゴタイプライターの使用する弾薬は.45ACP弾で、HAWKの使用する装備は9mmパラベラム弾を改造した9mmシャルデンプファーア音速弾を使用する。

.45をセンチ換算に直すと約1.14cm。つまり、9mmSD弾とは別に.45ACP弾を必要とし、貧乏まつしぐらという事だ。

「これより交戦する。シカゴタイプライターは取れるようなら取る。だが、期待はするなよ?ロメオ、アウト」

幸成はそう言いつと、HUDを再びナイトビジョンに切り替え、左手にドルビボーレン、右手にナイフ「HAWK-NAIL」メッサードルビ」を構え、窓の上にドルビボーレンを撃ち込んだ。

体が一気に引っ張られ、凄まじい速度で窓に向かって行く。窓にぶつかる直前でドルビボーレンの先端を壁から引き抜き、足から突入するように態勢を整える。

凄まじい速度を窓を割る事で抑えた幸成はシカゴタイプライターを持ったヘクセの首元にナイフを突き立てるが、一瞬速く幸成に気付いた女ヘクセは横に移動してナイフを躱す。

勢いで地面に落ちた幸成は転がりながらも受け身を取りつつドルビボーレンとメッサードルビを仕舞い、スコトス&フォースを中腰の姿勢で構える。

「あらあら、闇討ちですか?匹夫がやる所業ですね」
女はシカゴタイプライターを構えると幸成に不敵な笑みを見せる。

「紅い瞳にその異形の二丁拳銃……報告通り。私はミリア・サディール。貴方が追っているシユトレイゴイカバールのヘクセですよ」
俺達の存在がバレている!?

幸成は眉を潜めると白狐を思い出す。

やはりアレはシートレイゴイカバールのヘクセか？

「ディックを殺して舞い上がっていたら貴方は死にます」

「何故だ？」

「あいつは単なる敵対者をおびき出す捨て駒にしか過ぎないのだから。尤も、貴方をおびき出す為ではなかつたんだけど……姿を晒したのはこつちだつたつて訳だ……」

抜かつた！！

幸成は歯をギリと鳴らすと、左手の銃を構えながらHICOでミリニアを捕捉する。

「それにしても、私は貴方を殺す為に差し向けられたのですけど……貴方は美しい顔立ちをしているわ。きっと血も美味なんでしょうね」

ミリアがうつとりとした口調で呴くのを聞き、幸成は鼻で笑つた。

「少なくとも飲めないと思つぜ？」

「何故？」

「俺がお前の頭を破壊してお前は口無しになるからな……come and get me（捕まえてみやがれ）……」

幸成は怒鳴ると二人は同時に引き金を引いた。

窓からは蛾が中に入り、その窓からシカゴタイプライターの銃声が小さく漏れるのだった……

響き渡つた銃声。

響き渡ると言つても微かで殆ど聞こえなかつた。
しかし、白狐は歩みを止めると周囲を見渡す。
そしてすぐに銃声のした方向に駆けて行つた……

最初の射撃は共に足元の地面に直撃し、弾痕を残す。

幸成は壊れた機械に、ミリアは柱の後ろに隠れる。

（遠距離特化か……どう仕留める？）

幸成はスコトス＆フォースを構えながら舌打ちをする。

実際の所、拳銃ハンドガンと短機関銃サブマシンガンでは分が悪い。

スコトス＆フォースをフルオートが使えるが、下手に乱射すれば弾の無駄になる。

「どうしたの？かくれんぼのつもり？」

ミリアの声とハイヒールが地面を叩く音が響き渡る。

柱から出たのが運の尽き、と言いたいが下手に場所を露見させる訳にもいかない。

幸成はスコトスのマウントレールにHUDに連動する小型のカメラを取り付けた。

カメラはHUDに隨時映像を送り、壁越しからの射撃を助ける物だ。生憎、一つしかないのが痛い。

幸成は機械から腕だけを出して拳銃を水平にゆっくりと動かす。

しかし、ミリアらしき影は確認出来ない。

幸成が眉を潜めたその時、スコトスから送られてくる映像が途絶え、

凄まじい衝撃が掌に伝わる。

拳銃は弾け飛び、幸成の足元に転がった。

「見つけたあ」

上から聞こえてきた声にハツとした幸成は梁を見上げる。そこにはシカゴタイプライターの銃口を向けてほくそ笑むミリアの姿があった。

幸成はスコトスを蹴り上げながら柱の影に走るとシカゴタイプライターから.45ACP弾が吐き出され、地面を剗る。間一髪、柱の後ろに駆け込んだ幸成は舌打ちをした。

梁の上は柱以外の遮蔽物である機械を全てマーク出来る。同時にこちらが何処に隠れているかさえ分かつてしまう。武器はおろか、地の利も奴にある。

「いつまで隠れてるつもり？」

ミリアは幸成の近くにあつた機械に向かつて一射した。

刹那、.45ACP弾は機械の曲がった部分を利用して弾道を変え、幸成の正面の壁に反射、幸成の頬に傷を作る。

「跳弾か！」

通常、室内戦においてライフルではなくサブマシンガンやハンドガンを使うのは跳弾を避けるためだ。

室内で使われる弾丸はライフリングの影響で貫通しなかつた場合は殆ど跳弾になる。

その為、跳弾防止に射程が短く、威力の低い拳銃弾を使用したサブマシンガンが使われるのが主流だ。

しかし、サブマシンガンでも跳弾が起きるのもまた事実。

跳弾で変形した弾丸は形が異質に変形する為、腕でも致命傷に成り兼ねない。

ほんの数ミリの差で致命傷を免れたが、敵は狙つて跳弾を撃つてきた。

と、言つことは遮蔽物は意味など無い。

幸成は思い切つて飛び出すと二丁拳銃をフルオートで撃ち込む。

ミリアは梁から飛び降りながらシカゴタイプライターを乱射し、幸成は走る事で弾丸を避ける。

サブマシンガンに地の利で勝つ方法はただ一つだ。

幸成は機械の後ろに飛び込み、弾倉を交換した直後無数の跳弾が幸成を襲う。

腕や足を掠める弾丸に舌打ちをすると、幸成は二丁拳銃の薬室に弾丸を送る。

チャンスは一瞬。

奴が弾倉を交換する瞬間だ。

シカゴタイプライターのドラムマガジンは大量に弾丸が装填されているが故の欠点もある。

跳弾が止み、頬から血が滴り落ちてきたと同時に幸成は一気にミリアに駆け出した。

案の定、ミリアはドラムマガジンを交換している。

地の利を得るチャンス、それは接近戦だ。

ハンドガンは弾倉を差し込んだらスライド・ストップを押し下げて装填すればいいが、サブマシンガンはそうはいけない。

弾倉を交換し、初弾を装填するにはコッキングレバーを引かなければ成らず必然的に装填に時間がかかる。

しかも旧式のサブマシンガンであるシカゴタイプライターは約5.2kgと重く、近距離戦では取り回しが難しい。

さらにドラムマガジンに加え、50発の.45ACP弾により580gも重くなっている。

装填の隙に接近して、弾丸によつて重くなつた取り回しの悪いシカゴタイプライターの苦手な接近戦に持ち込み、接戦で片付けるのが幸成の狙いだ。

幸成はフォースで牽制しながら接近し、ミリアの周りに近付く。

ミリアは慌てて幸成に銃口を向けるが、幸成はミリアの死角に回り込む。

虚しくシカゴタイプライターの銃声とマズルフラッシュを閃かせた

ミリアの背後に回り込んだ幸成はフォースの残つた弾丸とスコトスの弾丸を有りつたけミリアに叩き込んだ。

多数の弾丸がミリアの体を撃ち貫き、ミリアを弾くが、倒すまでには至らなかつた。

「クソ！ やり損ねた！！」

幸成は距離を離されたミリアを見て舌打ちをした。

ミリアも体に開けられた傷から血を流し、憤怒の表情で幸成を睨む。

「計画変更よ！！殺してあげる」

ミリアは口から出る血を舐め取るとシカゴタイプライターの銃口を向ける。

その時だつた。

幸成が突入した窓から白い影が飛び込んだ。

緋色があせたような色である緋褪色の刀が月光で反射する。

ミリアは反射的にその影を向くと白い影はシカゴタイプライターの銃身を真つ二つにした。

「鉄をも切り裂く」とは良く言つが、実際にそれを見せられると思わず恐怖する。

白狐は続けてミリアの体を斜めに斬つた。

臓物をばらまき、死に絶えるミリア。

ヘクセが死ぬ時に起こる細胞自殺によつてミリアが溶ける。

刹那、白狐は幸成にも緋褪色の刀の切つ先を向けたのだつた……

（「ひからロメオ。スカイアイ、聞こえるか？オーバー）

幸成の声にロイはヘッドセットに耳を当てながら「聞こえる、オーバー」と答える。

（ヘクセと交戦中に白狐が出現した。オーバー）

「何だと！？ 映像を送れ！」

数秒して幸成のHUDからパソコンに送られてきたのは、ナイトビジョンで捉えられた緋褪色の刀身の刀を突き付ける白狐の姿だった。白狐は白い着物にその名の通り白い狐の面を付けた髪の長い人物だ。

「これか？ お前が見たのは？」

（間違いない。コイツだ）

「間違いない。コイツだ」

幸成はヘッドセットを押さえながら、白狐に聞こえないように小声で吹き込む。

ヘクセか、コイツ？

幸成はHSVを起動させると言葉を失った。

反応はオレンジ、つまり人間。

シユトレイゴイカバールのヘクセを殺し、こちらに敵意を向けている白狐が人間となれば、先程ミリアが述べた「敵対者」なのだろう。しかし、シユトレイゴイカバールが囮を使ってまで敵対者である白狐をおびき出すという事は相当の手練れだ。

しかも人間となれば幸成と同じ存在か？

幸成が思考を巡らせていると白狐が刀を右脇に取り、切つ先を下に

構える「脇構え」で対峙する。

人間と分かつた以上、実弾で相手にする訳にはいかず、麻酔銃「ロック26 - HAWK ミューデトラウム」を右手に構えた。ドイツ語で「眠い夢」を意味するミューデトラウムは世界初の対人麻酔銃だ。

あらゆるメディアで対人麻酔銃なる物が存在するが、現実にそんな物は存在しない。

麻酔は分量を間違えたら死に至る。

さらに薬品の方が弾薬よりも高額になり、実用的ではないからだ。しかし、このミューデトラウムは優と彩花の二人の天才によつて実用化に成功した。

弾薬は9mmパラベラム弾を改造したものが、弾頭部が蚊の針のようになつていて、弾丸が貫通しないように火薬も少なめに調整されている。

特筆すべきは使用されている薬品だ。

筋弛緩剤の「サクシニルコリン」の成分に似た新型麻酔薬を採用し、致死量に至る直前に致死量分の薬が麻酔と反応した血液に分解されるようになつていて、

さらに開発者が彩花の為、資金等は安い。

欠点は火薬が少ないので、シャルテンプファー仕様にすると弾頭が発射されない事で、銃本体にサプレッサーが使われる事だ。

幸成は左手でドルビボーレンを逆手に持つと白狐をHUNDに捉えた。刹那、白狐が駆け寄つてくる。

幸成はミコーデトラウムを構えて引き金を引くが、白狐は機械を蹴つて飛び上がる事で麻酔弾を避け、そのまま幸成に刀を振り下ろす。彼が即座に離れた瞬間、幸成が隠れていた機械が真つ二つに切れた。その鮮やかな様子ではメッサーダルヒで受けるのは無謀らしい。

幸成は舌打ちをするとメッサーダルヒを鞘に仕舞い、ミコーデトラウムだけを構える。

しかし、白狐は幸成に反撃の隙を与えないとばかりに激しい攻撃で

幸成を壁に追い詰めた。

が、幸成も壁を蹴つて白狐の後ろに回り込むと「コードトライアウムの引き金を引く。

同時に白狐は振り返りながら刀の鎬でそれを弾いた。弾丸が刀に当たつて火花を散らし、ナイトビジョンが無ければ何も見えない闇を一瞬だけ照らす。

恐らく敵はこちらのHUDの光で攻撃を仕掛けている。

かと言つてHUDを切つてしまつとただでさえ速い斬撃を暗闇の中、手探りで避けるしかなくなつてしまつ。

成る程、シートレイゴイカバールがわざわざ倒す為の手回しをする訳だ。

幸成が思考を巡らせていると刀が斜めに振り下ろされ、幸成の左手の静脈を切り裂く。

左手からはどす黒い血が流れた。

鋭い痛みと静脈を切られた事で左手が使い物に成らなず、回復力が高いと言つても深い傷ならすぐには治らない。

幸成は右手だけでミューテトラウムを構える。

（畜生！！へクセ並だぞ、コイツ……）

スコトス＆フォースなら同時二連射による計四発の弾丸で弾幕を張れる。

ましてや、フルオートならその軽機関銃並の弾幕により瞬殺が出来るのだが……

相手が人間となれば非正規部隊と言えども対へクセの部隊である為、たとえ敵対している一般人であつても傷付ければ処分される。

片手両足を縛つた戦いとはベトナム戦争期の米軍人の言葉であるが、今がまさにその状態だ。

白狐はバッティングフォームに似た構えである八双の構えをしながら距離を詰める。

幸成が一步退いたその時、白狐が切り掛かってきた。

八双の構えから剣道の技で言う右の脇腹に胴を叩き込む「逆胴」へ

の移行速度は速い。

幸成はH.U.DのL.A.Vの機能ですら捉えられなかつた逆胴でボディアーマーごと腹部に切り傷を負わされる。

多少距離が離れていたから良かつたものの、まともに当たれば上半身と下半身が離れて妖怪「テケテケ」状態だった。

（冗談抜きで笑えねえ……）

幸成は苦笑いを浮かべたその時、逆胴の反動を利用しながら一回転をし、幸成の頭に刀を振り下ろす。

横に回避した幸成の立つていた地面が剝れ、コンクリートが空中に舞い上がる。

幸成の額に弾け飛んだコンクリート片が当たり、傷を付けた。

防戦一方の状態となるが、幸成は負けじとミューーデトラウムの引き金を引く。

が、やはり刀で容易に防がれる。

もはや、人間かすら怪しい拳動だ。

幸成が震える左手でミューーデトラウムの弾倉を交換する。

刹那、白狐は刀を幸成の頭上に振り上げた。

幸成は反射的にミューーデトラウムを投げ捨てるが白狐の振るつた緋褪色の刀の刃を両手で受け止める。

白刃取り……

まさか一日で一回もやるとほど幸成は自嘲するが笑つていられる状態ではない。

斬られた部分からは血が滴り、跳弾と刀で付いた傷が疼く。

刃を押さえている左手からは血が垂れ、地面を濡らした。

白狐は刀の鞘を押さえ、幸成を切り裂こうとする。

掌が刀で少しづつだが削られ、緋褪色の刃を血が伝う。

窓から零れ出る月明かりが一人を照らし、幸成の顔と白狐の面を照らした。

その時、白狐は力を緩めると幸成から離れる。

まるで何かに驚いたように……

幸成は怪訝な表情で白狐を見ると、白狐は慌てて入つて来た窓から飛び出して行く。

「何なんだ……畜生……」

幸成は小声で呟くと多量の出血で出来た水溜まりに倒れ、気を失つた……

柔らかいベッド。

いつもの煎餅布団とは違う柔らかなベッドだが馴れ親しんだ匂いとは違う、消毒液と漂白剤の混ざった匂いだ。

喉が渴いた……

乾き過ぎて不快だ……

幸成は体を起こそうとしたその時、体中の激痛に呻き声を上げた。

「……つてえ……」

「よお、起きたか」

激痛に呻いた幸成の横で聞こえてきたロイが笑みを見せた。

「ここは？」

「病院だ。ひでえ様だな？」「ここまでやられたのは初めてだな

「悪い……」

疼く傷に耐えながら幸成は謝った。

良く見れば体にはソルタT3号、またはリングル液3号と呼ばれる輸液の袋が点滴の針で繋がっている。

「お前がやられるつて、白狐はどんだけ強いへクセだつたんだ？」

「へクセじやない……人間だ」

「人間ねえ……人間！？」

「へクセみたいに速くて強い……ハツキリ言つて麻酔銃じや無力化出来なかつた……」

幸成は天井を見上げながら小さく呟く。

へクセという存在に苦戦しても人間にここまでやられたのは初めてだ。

悔しさよりも驚きの方が大きく、幸成は疼く両掌を握る。

あの身体能力は人間に有り得るのか？

「はいはい？ 目覚めましたねえ？ 幸成の戦闘を解析してえ、一つの

仮説にたどり着いたのでえ、報告に来ましたよお？」

不意に入つて来た彩花の声に幸成とロイが注目する。

「仮説ですか？」

「白狐は、潜在能力を自由に外せる人間と考えられます」

「潜在能力？」

「潜在能力とは、一般的に火事場の馬鹿力と呼ばれています」
「こうも一般的な名前で言わると呆気に取られて、言葉も出ない。
しかし、言つても聞いたのはこちらなのだが……」

その様子を察した彩花は口を尖らせ、つまらなそうに咳く。

「火事場の馬鹿力を嘗めてるんじゃないですか？火事場の馬鹿力
は人間の可能性を高める最高の研究材料ですよ？」

その一言に幸成は「聞きますか」と咳き、疼く体に鞭打つて体を起
こす。

「そもそも人間の体は、過剰な筋出力を出した場合に自壊してしまいます。その為、平時は脳が自壊を起さないようにリミッタ
ーをかけていますねえ？」

「ねえ？って言われても知らねえよ」

幸成とロイは苦笑いを浮かべて顔を見合させる。

その様子を見ていた彩花は深い溜息を漏らし、椅子に座つて足を組
む。

色っぽい大人の色香にロイならず幸成も心の臓が高鳴つてしまつ。
その様子を見て頬を緩ませた彩花は続ける。

「恐らく白狐はそのリミッターを外す訓練か何かを受けて任意で身
体能力を向上させる事が出来るのでしょうか？」

「そんな事が有り得るのかよ？」

「とにかく現状ではその説が一番可能性があります。しかし、白
狐の正体が分かりませんねえ」

それに一人も同調する。

白狐の正体が分からぬのが異常だ。
肩まで掛かる髪の長さから男性とは考えにくい。

だが、胸が普通の女性よりも無い為、女性の可能性も低い。

幸成は顎に手を当てて考えているとメールの着信音が病室に鳴り響いた。

「あらあらあ？ 彼女さん達ですかあ？」

「彼女じゅねえよ」

幸成は目を細めて口を尖らせると指だけで携帯電話を支えて、開いた。

着信には沙耶那の名前が踊っている。

幸成は暗証番号を入力してメールを開くと可愛い絵文字がふんだんに使われた、幸成を心配する内容のメールであった。

簡単に説明すると幸成が階段から落ちた事を心配する内容だ。

「……俺、階段から落ちたのかよ？」

幸成は苦笑いを浮かべ、携帯電話から田線を外すと彩花が満面の笑みで微笑んだ。

「何があ、幸成はドジキャラで定着させたかったんですよ。ウチ

のこだわりって奴ですねえ？」

何だ、このよく分からぬこだわりは？

不意に新たな着信音が鳴り響いた。

今度は菜月だ。

菜月は今から沙耶那とお見舞いに行つてもいいかとのメールだった。

「この色男が！－畜生、出血多量で爆発しやがれ！－」

「何の話だよ？」

幸成は溜息を漏らすとロイと彩花が椅子から立ち上がった。

「お邪魔しちゃいけないので、ウチ達はおじましますねえ」

「そういう訳だ。明日には退院出来るだろうからその時に来るわ

ロイはそう言うと手荷物を纏めだす。

二人の口調から沙耶那と菜月を呼べと言わんばかりの口調だ。

二人が退出したのを見送った幸成は疼く手で携帯電話に返信を打ち込むのだった……

傷もおおよそ塞がり、痛みも引いてきたがしばらく跡は残るだろ？
今回の白狐襲来には煮え湯を飲まされたが、次は何とか沈める必要
がある。

今後の任務も奴に邪魔されるとなれば、最悪、実弾で沈める可能性
も出て来るからだ。

人に対へクセ用武器を向けたくないというのが幸成の本音だつたが、
甘えた事を言つてられない。

幸成が嘆息を付いたその時、病室の扉が開き、元気な声が聞こえて
きた。

「ユキ君、來たよ～」

「大丈夫ですか？」

元気な菜月と心配する沙耶那が病室に入り、頭に包帯を巻いた幸成
が微笑みで答える。

沙耶那は額に包帯を巻き、両腕にも包帯が巻かれている幸成を見て、
言葉を失つた。

「階段から落ちて……このように……なつたのですか？」

「ええ、まあ……」

幸成が頭を搔くと沙耶那は顔を青ざめながら問い合わせる。

「何処を傷付けたのですか？」

「両掌と左腕、左脇腹が酷かつたかな？」

その声を聞いた沙耶那はさらに顔を青ざめさせていく。

まるで化け物と出会つた人のように恐怖で顔を歪めさせる。

「どうしたんですか？」

幸成が問い合わせると沙耶那は一步後退り、ゆっくりと首を振つた。

「何でもないです……私、急用を思い出しました」

「えつー？ サヤ、何も無いって言つてなかつた？」

「その…………」めんなさい……！」

沙耶那はそう言つと、幸成の病室から飛び出していった。

何かに脅えるようなその表情に一人は首を傾げる。

「コキ君、何かやつたの？ 例えばセクハラとか？」

「ロイじゅあるまいし……」

「そうだよね、コキ君は変態さんじゅなくデジさんだよね」

……デジキャラに定着してたよ、彩花さん……

幸成はげんなりとしていると窓の外に目をやる。

俺の仮説が正しければ、白狐への勝機が見えた！

幸成は拳をきつく握りしめると包帯を解き、菜月に笑いかけた……

その頃の雲莊は三村の帰宅で賑わっていた。

要約すると上は今回の事態は感知しないが、もし必要ならば手を回すという事だ。

つまり、50万円の範囲で好きな装備を整えろといつ通達だった。

「やりいーーー！」

優は飛び上がりながらガツツポーズをすると、彩花も嬉しそうな表情で紅茶を啜る。

「どう分配するんですかあ？」

「優には30万と彩花には20万でいいだろうな」

「あつ……俺と幸成が忘れられてる……」

胡座で座りながら壁に寄り掛かっていたロイが小さく呟くが三村は

「お前にはもうおもちゃが有るだろ？」と笑う。

「じゃあ、おっちゃん！ キャリ「ミミ900が一丁とくつ「プロパーのラジコンを二つ頼む！」

優は父親に服や靴をねだる娘のよつて自動小銃（短機関銃？）とくつ「プロパーのラジコンをねだる。

年頃の女の子らしからぬ頼み事に三村は頭を搔きながら苦笑いを浮かべた。

しかし、ラジコンは何に使うんだ？

「私はあ、オオスズメバチを大量にお願いしますねえ」

「……それこそ何に使うんだ……？」

気に入らない相手の部屋にスズメバチでも仕込んで完全犯罪でも謀つているのか、と三村は訝しげに彩花を見るが下手に突つ込むと自分がその対象に成り兼ねない為黙つていた。

「これで戦力の増強は問題無いな……ラジコンとスズメバチとは別として……」

「何か言いましたあ？」

「いや、何も言つてない」

三村は否定すると時計を見ながら口を開く。

「幸成の所に行つてくるかな。任務の事はメールじゃ駄目だからな

「今は止めた方がいいぜ、おつちやん」

「どうした、ロイ？」

「幸成の所にこの前来たあの女の子達が、ね？」

「ほほう？幸成にモテ期到来か？結構結構！」

三村は大きな声で笑うと何気なく外を眺めた。

その時、道路を慌てて駆けて行く沙耶那の姿を見付けて眉を潜める。ロイがさつき幸成の所に沙耶那と菜月が行つたと言つたばかりだが

三村は窓を開けるとそこから顔を出した。

「沙耶那さん、だつたよね？どうしたの、そんなに慌てて……」

三村の声に気付いた沙耶那は体をビクリと動かし、窓に手をやつた。

「三村……さん？」

沙耶那は顔を青ざめさせながら、涙を溢れさせていた。

目は真っ赤に腫れて痛々しい。

「どうした？幸成に酷い事言われたか？あの野郎……こんな可愛い女の子を泣かせるたあ、いい度胸だ！！」

「違つ……違つんです！」

沙耶那は顔を手で覆い、泣き崩れた。

掌から溢れ出た涙がアスファルトを濡らし、沙耶那は嗚咽を漏らす。何が何だか分からぬその状況に三村は頭を搔くと明後日の方向を見る。

「すいません……今日は……」

沙耶那はそう言うと神社の方角に駆けて行く。もはや、訳が分からぬ通り越して拍子抜けした三村は空を仰ぎ見て深い嘆息を漏らした……

4・3・悪夢

暗い路地裏……

周りの壁も足元の地面も赤、紅、朱……
空が紫紺色に染まり、何も照らさない……

足元に転がる肉片はつい数分までは動いていた人間と呼ばれる肉の塊……

動いていても動いていなくとも肉は肉……
それ以上でもそれ以下でもない……

死ねばそれまでだ……

肉に成る下がる……

血に濡れた体は鉄臭く……

目の前が深紅に染まり……

止まらない……

理性が止まれと叫んでも体が言つことを聞かない……

銀髪の髪が深紅の視界で揺れる……

駄目だ……

止まれ……

止まつてくれ……

「…………はあ…………はあ…………はあ…………」

幸成は白い病室のベッドから起き上ると紺色の髪を搔き上げる。
毎回、痛手を負った時に見る悪夢に幸成は舌打ちした。
悪夢というよりは過去と言つた方がいいだろ？。

忘れない過去……

二度と思い出したくない過去だ。

これが俺の罪なのか……

幸成は嘆息を漏らすと枕の上に頭を落とした……

私は、罪を犯した……

友人を殺しかけた……

でも、何故あの場に幸成君が？
まさか幸成君が血吸い人なの？

GARUDAが上空に固定されてから三時間経った頃、監視していたロイが声をあげた。

「ヘクセ確認！」

ロイの怒鳴り声に「一ヒーを飲んでいた三村が笑う。

「ここはヘクセの宝庫だな。はぐれヘクセの時の搜索とは大違いだ」「コイツ、どうします？幸成がいないからスルーしますか？」

「今から彩花と優を連れて幸成を連行する」

「連行つて……まあ、そこはどうでもいいとして、白狐はどうする？下手をすりや奴も現れるだろう？」

その声に沈黙が流れれる。

が、三村は鼻で笑うと立ち上がった。

「幸成なら何とかやるさ。ところで優、お前に預けていたアレは調

整終わつてゐるか？」

三村の問い合わせに優は頷き、部屋の隅に置いていた大きめのアタッショケースを持つてきた。

黒塗りのアタッショケースを机の上に置くと鍵を開ける。そのアタッショケースにはカービングライフルとして最も有名とも言える「M4A1」とその他アクセサリーが入れられていた。

「何で貧乏部隊がそんなもん持つてんだ？」

ロイの問い合わせに三村はニッと笑う。

「特戦時代からの相棒だ」

三村はそう言うと、M4A1のグリップを握り、銃床を肩に付ける。特戦・・・特殊作戦群は陸上自衛隊に所属している陸自初の、公式の唯一の特殊部隊だ。

対テロ及び対ゲリラ作戦が主な任務であり、非公式ながらHAWKが創設されるまでヘクセと戦つていたが、ある人物との接触と同時に特殊作戦群が壊滅した。

現在は再編成をしている最中だ。

また、特殊作戦群が使用する武器は陸自正式採用銃の「89式小銃」の他にこの米軍でも使われている「M4A1」も使用されている。そのM4A1を構えると三村は安全装置を外し、弾丸が入つていな銃の引き金を引く。

「最初からそれを使えよ。何でわざわざ拳銃だよ」

「馬鹿野郎、ヘクセ相手に5.56mm弾で勝てると本気で思つてるのか？」

「ん？違つのか？拳銃弾でも倒せてるんだし……」

「馬鹿だなあ。今まであの銃の特性があるからこそ勝ててたんだぞ？」

「無い胸を張るな！」

ロイが優に毒づくと優は「煩い、煩い！」と喚き散らす。

そんな優の額に三村は「コピンを喰らわせると「お前が煩い」と諫める。

「と、とにかく、!! 簡単に説明すると初弾が体に突入し、次弾が速度を落とした初弾に当たつた衝撃で神経にダメージを与える。さらに次弾が初弾にぶつかつた事で跳弾となり、体の中で暴れる。普通の人間だつたら即死だからヘクセにもダメージを与えるんだ。分かる?」

何と無く

「言つちまえは、ライフルで倒したければ頭をフルオートで吹つ飛ばすしかねえつてこつた」

三村はそう言いながら北大西洋条約機構（NATO）標準規格の弾丸「5・56×45NATO弾」を弾倉に挿入していく。

「それはあくまで支給されるのは9mmノーベルム弾 5.56mm弾なんて支給されねえから、自腹で取り寄せなきやならんからな。コイツもこの90発の弾丸と2発のグレネードと15発のショットシェルが無くなつたら鉄の棒だからな」

三村はM4A1のアクセサリー「ウエポンのグレネードランチャード」、コルトM203」とショットガン「XM26」を一覧する。

様々なアクセサリーの中からフォアグリップとACOGスコープ、ナイトビジョンのみに見えるレーザーサイト、そしてサプレッサーを装着した三村は暗視装置「JGVS-V8」を掲んだ。

「あくまで自分は三つ巴の乱戦になつた時だけに出る。弾を無駄遣いしたくないからな」

「白状ですねえ」

「当然だ。自分は奴を信用しているからな。さ、出掛けだ」

三村はベルトに一本の弾倉を捩込むと、もう一本を銃に装填する。そして肩にM4A1を肩に担ぎ、JGV-S-V8を握るとドアを開けるのだった……

あの悪夢から眠れずかれこれ一時間が経つた。

幸成は痛みの無くなつた傷に巻いていた包帯を取る。

白みを帯びた肌に付いた傷が非常に痛々しい。

「階段から落ちたにしては痛々しいだろ、コレ……」

幸成は嘆息を漏らし、両手で髪を搔き上げる。

その時、病室の向こう側の廊下から足音が聞こえてきた。

ハイヒールの踵が床を叩く音だ。

この時間は消灯时刻である為、面会は無い。

患者もナースもハイヒールを履かないから違つ。

病院での最悪の解答が思い付き、幸成はみるみる顔を青ざめさせる。

「おいおい、待て待て！！俺はお経なんて知らないし、十字架とか聖水を持つていない！やべえ……」

ヘクセ相手には冷徹に振る舞う幸成だが実態が無く、正体が分からぬ相手は恐ろしい。

幸成は慌てふためいていると、案の定ハイヒールが幸成の病室の手前で止まつた。

（マジかよ……）

ハイヒールときたら女だろうが、女の幽霊程恐ろしい物はない。赤いハイヒールに赤いドレス、顔が隠れる程の長い髪の女を想像してしまつた幸成は身震いした。

江戸時代には女性の嫉妬や恨みを描いた怪談が多く誕生し、「四大女幽霊」と言われる有名な怪談群が誕生するまでに至り、今も様々なメディアで女性の幽霊が登場している。

言つてしまえば男の幽霊は様にならないのだ。

ドアノブがゆっくりと回る音が聞こえ、幸成は息を飲む。

廊下の僅かな蛍光灯の明かりが暗い病室の中に入り込み、僅かに病

室を明るく照らす。

幸成は慌ててベッドから飛び出ると拳を身構える。

ゆつくりとハイヒールの音が近付き、幸成が拳を構えて飛び出すと、そこには拍子抜けしたよつにキヨトンとしている彩花が立っていた。「どうしたんですか？まるで幽霊でも見たような顔をしちやつてえ」

幽霊よりも恐い物を見たような気がするんだが……

「貴女こせどうしたんですか？」

「任務ですよ？」

「またか……こいつも連続して起きちゃ、いつちの身がもたねえよ
「むしろこいつ有るべきですよ？わあ、いきましうかあ？
「ちょっと待つてください！退院は明日じや……」
「既に話は付けていますから」「安心下さいねえ？」

どうやつたら夜中に退院出来る話が出来るんだとツッコミたかったが幸成はゆつくりと頷く。

「優が戦闘服を準備して待つてます。さあ、行きましょうねえ」

彩花は微笑むと幸成の手を掴み病室から飛び出して行つた……

血吸い人を狩る……

それが私の使命……

私の運命……

それが友達でも恋人でも親でも血吸い人は狩る……

それが私の使命……

少女は白狐の面を付けると駆け出して行く

奴らの血の匂いを辿り、闇の中へ……

目的地に向かう車の助手席に乗る幸成はスコトスとフォースに弾丸を装填する。

フューラーを耳に装着し起動すると同時に三村が思い出したような口調で問い合わせた。

「お前、今日沙耶那さんと何があった？」

「何だよ、急に……何もねえよ」

「嘘付け！－沙耶那さんは泣いていたぞ！－？」

「つて、言われても急に泣き出したからな……」

幸成は左手で顔の左半分を覆う。

身に覚えの無い罪とはこのような事を言うのだ。ついでに確認が持てない事は言えない……

「」の話しさは後で家族会議だ

そんな重大な問題なんですね？

（まあ、女の子はどんな形であれ泣かしちゃ駄目だからな）

幸成は左手で髪を搔き上げる。

困る度についてしまつその癖に苦笑した幸成はフューラーに手を当て、吹き込んだ。

「」から口メオ。スカイアイ、感度良好か？オーバー

（）からスカイアイ、良好。オーバー）

「空からの目で敵の指示を頼む。オーバー」

（敵は現在C9インディオにいる。前回の廃工場だ）

「……了解した。口メオ、アウト」

幸成は無線を切ると眉を潜めた。

敵はこちらを誘い込む意図である事は間違いないが、何故前回の場所なんだ？

敵は何を企んでいるんだ？

恐らく罠である事は間違いないがそこに飛び込まなければ何も出来ない。

「虎穴に入らずんば虎児を得ず、か……」

幸成は小さく呟くと背もたれに寄り掛かり、闇の中に田を見遣つた。その時、不意に三村が口を開く。

「言い忘れたが、今回はバックアップに武器を持ってきた。援護を要請すれば攻撃を行つ」

「分かった」

幸成は短く答えると一丁拳銃に初弾を装填して弾倉を引き抜くと、それぞれの弾倉の隙間に9mmシャルデンブファーゼ音速弾を挿入したのだった……

約15分後、廃工場に到着した黒塗りのバンが止まって、車から幸成が降りる。

廃工場の錆びて重い扉を右手で開けつつ、左手の拳銃を構えながら慎重に入り、やはり慎重に扉を閉めた。

ナイトビジョンの緑色の世界と肉眼の暗闇の世界が混ざり合つ。その世界は普通の視界であるはずなのに、まるで違う世界であるかのような異質さを醸し出す。

目標は確認出来ない……

幸成はナイトビジョンをHSVに切り替える。
緑色の人間は見当たらない。

本当にいるのか？

幸成が周囲を見渡したその時だった……

幸成が中に入った直後、三村は後部座席の優に口を開く。
「優、M4A1を取ってくれ。それとアルムブレスト」「
「アイアイサー、大将！」
優は軽く敬礼をするとM4A1の入ったアタッシュケースとクロスボウ「アルムブレスト」を投げて寄越す。
予め準備をしていたM4A1に弾倉を込めるとチャージング・ハンドルを引き、それを離して初弾を装填する。
そしてセレクターをSEMI（単射）に切り替え、ACOGスコープを覗き込む。

赤い光で作られた十字の照準が暗闇を照らした。

本来、5.56mmNATO弾を使う銃は狙撃には向かない。

中・近距離戦を意識したこの弾薬は200mになると殺傷能力が低下する。

一般的な狙撃銃に使われるのは7.62mm×51NATO弾や対物ライフル「バレット M82」が使用する.58BMG弾等だ。某漫画の主人公はM16を狙撃に使っているが利に適っていない為、ファンの間でも議論されていると聞く。

しかし、今回はあくまで狙撃ではなく援護。

幸成の後方支援が目的であり、当てる必要性は無い。

三村は再びSAFE（安全）に切り替えると助手席に置いた。

その時、車の屋根の上からトンという音が聞こえてくる。

刹那、助手席に銃を置いた三村の視界に、廃工場の窓から中に飛び込む白い影が映った……

幸成が周囲に目を配つていると、後ろに気配を感じて二丁拳銃の銃口を向ける。

そこに立つていたのはヘクセではなく刀を持つた白狐であった。月明かりに影を浮かび上がる白狐は微動だにしない。

幸成はスコトスとフォースをホールスターに仕舞い、フューラーを外すと深く息を吸い口を開いた。

「答え合わせといこうじやないか、白狐……いや、こう呼んだ方がいいか？」

幸成は白狐を真っ直ぐ見ると、一度目を閉じる。

そしてゆっくりと開けると月が雲に隠れ、白狐の姿を隠した。

白狐は白い面を外したようだが顔は暗がりで判別出来ない。幸成は半ば怒鳴るような大声でその名を呼んだ。

「三神沙耶那！」

幸成が怒鳴ると同時に雲が晴れて白狐……沙耶那を照らした。

「やはり、幸成君だったのですね？」

「今から問答だ、沙耶那さん。まずはこちらから質問する。あんたは何者だ？」

「私は三神神社の神子。この街の魔を払う存在です」

「現実は小説よりも奇なりってか……」

幸成が髪を搔き上げると深い溜息を漏らす。

が、その間を与えないかのように毅然とした態度と口調で沙耶那が口を開く。

「私からの質問です。幸成君は何者ですか？」

「……」

HAWKの規定において、秘密保持を最優先としているが唯一特例として語れる場合がある。

それは相手がヘクセと継続的に戦っている人物である場合だ。

たいていが軍人であり、民間人に使う機会は無いと揶揄されていたが、使われた事が無い物が皮肉にも民間人に最初に使うとは……

「俺は陸上自衛隊管轄、対吸血鬼殲滅火器殺害部隊、通称『HAWK』所属、直江幸成陸士長だ」

「自衛隊……？ そんな歳で自衛隊に入れる訳が……」

「ちょっとと訳ありでね」

幸成は沙耶那の言葉を遮ると真顔になる。

「二つ目だ。その身体能力の高さは？」

「私は幼い時から高い力を発揮する訓練を受けていました。これは一子相伝だから一般には知られて無いけど……脳科学では潜在能力と言われているらしいです。夜限定に任意で発動する能力で、血吸い人を探す時も匂いを辿り、探しっています」

成る程、彩花さんの当たりだ……

匂いというのも、恐らくヘクセが発するフェロモンの事だろう。

「問います。何故、傷がもう癒えているのですか？ その目は？」

匂いというのも、恐らくヘクセが発するフェロモンの事だろう。

「問います。何故、傷がもう癒えているのですか？ その目は？」

「これは俺も知らない。目も生れつきだ。脛はカラーコンタクトで隠している。問うが、どうして俺を攻撃した？」

「國」が血吸虫病についたからです。しかし今

匂いが血臭い人たてだからです。しかし今は何も……」

多分近距離で奴らの血を浴ひたがった。

もう少し、勝負を仕掛けるのが遅かつたらと自分を恨む。

「これが私からの最後の問い合わせです。何故、私に銃を向けた

「林中流で眠うたぬ鳥ぞ。人間を擧つ駒木は庵」は黒一

幸成がそう言つとしばしの間、沈黙が流れた。

三成がそれを語ると少しはしの間 池黒が池林が
又ソノレソノレソノレと次々と出で、声を出ソテテハ

数秒して沙耶那は吹き出し、声を出して笑い出す。

幸成は驚いたように目を見開くと沙耶那が笑いを堪えながら口を開

١٥١

「あんなセー！」
幸成君、何か印象と違つて

そこまで言った瞬間、沙耶那は笑みを消していく。

それこそ、何か恐ろしい物を見ているかのように……

その様子に気付いた幸成が振り返つたそこには20m

な蛇がいた。
アガリシタ

巨大な蛇は創作だけと思われがちだが、ブラジルのブタナン大学には10m強に成長した標本が保存され、さらには黄金郷エル・ドラドを求めてアマゾンに入り行方不明になつた著名な冒険家「パーシー・フォーセット」の記述には体調18mのアナコンダを射殺したという記述がある。

そんな馬鹿など笑う人がいるだろうが、水の中で暮らす生物は重量の影響を陸程受けない為、クジラを筆頭に大きくなる傾向にあるのだ。

だ。

その馬鹿デカイ蛇が目の前で鎌首をもたげて いる。

近くの天井には穴の開いた太めのパイプがあり、そこから出たのだと物語っていた。

アナコンダは幸成の目を真っ直ぐ見る。

蛇に睨まれたら動けないというが、20cm近くになるとまるで体が石になつたように固くなつてしまひ。

その時、アナコンダが首を後ろに引く。

「幸成君！！」

沙耶那の声が響くと同時に、幸成の体が戻る。

刹那、蛇は頭を投石器のように勢いを付けて幸成に飛び掛かった。

幸成は素早く避ける。

そこで幸成はある事に気付いた。

蛇は俺を狙ってるんじゃない……

幸成が叫ぶより早く蛇の丸太のように太い胴が幸成を弾く。

「キヤアアアツ！！」

その瞬間、沙耶那の悲鳴が響き、アナコンダは沙耶那を足から飲み込む。

「んつ！んんんー！！」

沙耶那のぐぐもつた悲鳴が大蛇の中に消える。

沙耶那の体は一瞬にして大蛇に飲み込まれ、蛇の体の中に納まってしまったのだった……

体が肉壁に沈んでいく。

「ゅつくりと、ゅつくりと中に沈んでいく……」

「いやつ……出して……」

沙耶那は粘液質の不快な音を発する肉壁の中で叫ぶが声はその厚い肉壁に遮られる。

不快な音と吐き気を催す程の匂いが沙耶那を深淵へと引きずり込んでいく。

布団を何枚も重ねたように柔らかい肉壁は沙耶那の体を包み、ゅっくりと奥へと誘う。

動きが止まつたかと思つと肉壁から匂いの元と思われる液体が滲み出て沙耶那の体を濡らしていく。

これは胃液？

だとしたら私はこのまま蛇の肉に……

「そんなのつて……」

沙耶那の体を包んでいる暗い肉壁の中で涙を滲ませた。

これは神子として人を傷付けた罰？

このまま蛇の血肉になつていいくのが私の報い？

そんなの嫌！！

沙耶那は精一杯体を動かして抵抗するが肉壁は沙耶那の抵抗を嘲笑うかのように激しく動き、沙耶那の体力を削つていく。衣服が少しずつ溶けていくのが分かる。

このままでは……

「幸成君……助けて……死にたくない……幸成……君……」

沙耶那は蛇の腹の中で助けを求めたが、それが外に聞こえる事は無かつた。

「んつ……く……やあつ……苦しい……幸成……く……」

沙耶那は肉壁の圧迫による息苦しさに耐え切れず、意識を霧散させ

ていつた……

沙耶那を飲み込んだ蛇は細く長い舌を出すと幸成を黄色い目で見つめる。

フューラーを装着した幸成は二丁拳銃を構えて対峙した。

沙耶那がいるであろう部位が大きく膨らんだ場所が時折痙攣している。

恐らく沙耶那が中で抵抗しているのだろう。

（クソッタレ！）

幸成は舌打ちをすると二丁拳銃を睨む。

この銃の特性である次弾が体の中で暴れる事が蛇への攻撃を難しくしていた。

下手に次弾が暴れたら中に捕われている沙耶那に対して跳弾によって変形した弾丸で致命傷を与えかねないからだ。

しかも、麻酔銃「ミューデトラウム」でこの20㌢の化け物を眠らせるには弾薬が足りな過ぎる。

その時、足元に弾丸が当たり、幸成は思わず周囲を見渡す。

「ひつちだよ～」

無邪気な子供のような声のする見上げなければ視界には入らないその高さに目線を持っていくと天井の上のパイプに座った女性がいた。幸成は即座にHSVに切り替えると色は緑。

ヘクセだ。

この蛇から考えると特殊能力に特化しているヘクセで蛇を操っているのはコイツだろう。

幸成は女性に二丁拳銃の銃口を向けるとフルオートで、弾が尽きるまで連射した。

40発にも及ぶ多数の弾丸は軽機関銃よりも瞬間的に濃い弾幕を張る。

が、しかし、女性はパイプを蹴つて空中に逃げ、そのまま地面に降り立つ。

多数の弾丸は先程女性がいたパイプを一瞬にして蜂の巣に変え、それが落下する。

幸成は一步前に出ながら弾倉を交換すると、数秒して落下したパイプが地面に突き刺さり、工場内に轟音を響かせた。

「うわ！凄い火力だ！！」

「何なら頭もこのパイプみたいにしてやるうか？」

幸成はドスの利いた声で女性を睨むとフフと笑い、リボルバーを取り出した。

リボルバーは迷彩柄に倍率スコープが取り付けられた「コルト・アナコンダ」だ。

・44マグナム弾を使用し、命中率が高い事でも知られるこのアナコンダはリボルバーと言つても悔れない。

女性はアナコンダを満足そうに眺めると微笑む。

「この銃の弾丸にはマムシの出血毒が塗られてるんだ。マムシの毒って実はハブより危険なんだよ？」

出血毒は酵素の作用によつてフィブリンと呼ばれる血液凝固に関するタンパク質を分解する事で血液の凝固を阻害し、血管系の細胞を破壊する事で出血を起こせる毒だ。

それは非常に危険な毒であるといつのはマムシの被害を考えてもらえば分かるだろう。

「掠つたらアウトか……」

幸成は蛇と女性にそれぞれ拳銃を向けながら小さく呟いた。

「ああ、女の子が心配だよね？大丈夫。私が君の血を吸うまではこの蛇も女の子を消化しないよ？そう躊躇てるからね」

女性は短い茶髪の髪を自ら撫で、ラフなジーパンの腰に巻いていたポケットから・44マグナム弾を取り出し、シリンドラーから先程

使った薬莢を抜いて一発を挿入する。

「しかし、可愛い女の子じゃなきゃ、『』イイツも食べてくれないんだ。飼い主に似たんだよね。私も良い男じゃなきゃ食べられないからね」女性はそう言つと舌で口の周りを舐める。

「シユトレイゴイカバールはそんな変態しかいねえのかよ！？」

「高尚な嗜好と言つて欲しいね。私はサー・シャ・サクレイン。シユトレイゴイカバールではズメヤー・サー・シャと呼ばれているわ。一

対」、貴方には勝ち目は無いわよ」

「ズメヤー……蛇のサー・シャか」

蛇を使役し、蛇の毒を使い、蛇の名前の拳銃を使つ。

悪趣味な女め……

蛇とサー・シャを睨み、幸成はスコトスとフォースを構えるのだった

……

工場から何かが落ちる音が轟いた。

「何事だ！？」

三村は眉を潜めながら口を開く。

先程の悲鳴と言い、何かが工場内で起きている。

「ちょっと行つてくる」

「分かりましたあ」

「気をつけて」

彩花と優が笑いかけると三村は頷いてM4A1とアルムブレストを掴み、車から飛び出す。

そして近くの10m程の建物の屋上にアルムブレストの矢を放ち、屋上の手摺りに引っ掛けたのを確認する。

「これを見るのかよ……」

アルムブレストのワイヤーの限界重量は180kgだが、ワイヤーの巻き取りはドルビーボーレンに劣る。

これをラペリングで登るのか……

いや、やらないといけないんだ……

三村は頬を叩くとアルムブレストを地面に置き、壁を垂直に登つて行つた……

下手に動けないというのが本音だ。

幸成はサーシャと蛇を交互に見遣る。

フューラーの敵を捕捉する機能「LAV」は一人しか捉えられない。

「蛇に巻き付かれたら逃げられないよ」

サー・シャは銃口を向けて、引き金を引く。

重い銃声と毒が塗られた弾丸が吐き出された。

銃口に反応して何とか先回りをして避けていた幸成の顔のすぐ横で初速約410kmに達する・44マグナム弾が通過していく。

同時に幸成は二丁拳銃をサー・シャに向けるが、蛇がサー・シャの前に飛び出して引き金が引けない。

蛇の大きく膨らんだ胴体には沙耶那が捕らえられている。

歯ぎしりをし、幸成は柱の影に隠れると二丁拳銃を仕舞い、ナイフ「メツサードルヒ」を取り出す。

逆手に持ったナイフを構えると、蛇に向かつて駆け出して行く。

コイツなら確実に標的を仕留められる。

問題は蛇を操るヘクセを殺した事による蛇の暴走だ。

蛇の力は非常に強く、アナコンダに巻き付かれれば骨が粉碎する。しかも抑制していた主がいなくなつた事で沙耶那を消化してしまうかもしれない。

先に何らかの形で蛇を仕留める。

「無謀にも程があるよ」

サー・シャは蛇の後ろから飛び出すと幸成の間合いに迫る。

意表を突かれたその時にはサー・シャの牙が幸成の首筋に突き刺さつていた。

痛みよりも快楽が体を貫き、幸成の思考が遮断されていく。

しかし、条件反射で突き出されたメツサードルヒがサー・シャの体を引きはがし、幸成はサー・シャに電流を流す。

メツサードルヒから流される電圧はスタンガンの100万ボルトと同じだが、電流は100アンペアと感電死を引き起こせる程高い。が、ヘクセを殺すには些か頼りない威力だ。

案の定、サー・シャはナイフから逃れるとコルト・アナコンダを乱射し、幸成を威嚇する。

幸成も伏せて弾丸を避け、やり過ごしたと思ったその時、アナコンダが長い尾を振つて幸成を吹き飛ばす。

その強い尾の一撃は幸成を吹き飛ばすには十分な威力で、幸成は壁に叩き付けられて血反吐を地面に吐き出した。

「だらし無いな。でも、美味しいね、君の血。病み付きになりそう」
サー・シャは赤く染まる歯を見せながら微笑む。
これがシコトレイゴイカバールのヘクセか……
はぐれヘクセや囮とは比に成らない強さだ。
しかもあちらには人質がいる。

不利な要素しかない。

幸成は口から垂れてくる血を手の甲で拭き取ると再びメッサードルヒを構える。

その時、ナイトビジョンにしていたフューラーに線が映つた。
これは……レーザー？

三村はM4A1のフォアグリップを握り、ACOGスコープにサー・シャを捉える。

ACOGのサイトの他にレーザーもサー・シャを捉えている為、外すこととはへまをしない限り無い。

暗視装置「JGVS-V8」の他に装着したヘッドセットに三村は吹き込む。

「こちからフリューゲル。ロメオ、聞こえるか？オーバー」

（……ロメオ、聞こえている。オーバー）

「援護要請が無かつたが忘れていたか？オーバー」

（沙耶那さんが大蛇に丸呑みにされて、救出の方法を考えていてそれどころではなかつた。オーバー）

「沙耶那？どういう事だ？」

（白狐の正体は彼女だ。大蛇に飲み込まれて今は手が出せない。何

とかしてほしい。オーバー）

「……了解した。援護する。フリューゲル、アウト」

三村は無線を切るとサー・シャの頭部に向かつてセミオートで数回引き金を引く。

亜音速弾ではない為、衝撃音が周囲に微妙に響いた。

そして放たれた弾丸はサー・シャの頭に直撃とまではいかなかつたがダメージを与える。

サー・シャは額に付いた傷を触ると、三村を見て口元を歪ませた。

「仲間がいたんだ」

サー・シャはそう呟くとスコープを覗き込み、三村に向かつてリボルバーを連射する。

しかし、精度が良いと言つても拳銃は狙撃用の武器ではない。

弾丸は三村に当たらず、手摺りや壁に直撃する。

弾を撃ち切つたサー・シャは舌打ちをするとコルト・アナコンダに弾丸を装填していく。

そのリボルバーの時間の掛かる装填のタイミングを見計らつて、幸成はフォースだけを構える。

蛇がサー・シャの前に出ようとすると、蛇の左目を三村のライフルから放たれた5.56mmNATO弾が射抜く。

凄まじい鮮血に大蛇は悲鳴をあげると、幸成は大蛇に向かつてメッサードルヒを投げ付けた。

投げナイフは実際には刃を掴んで投げる物で、投擲後に回転しながら対象に突き刺さる。

幸成の訓練された手のスナップで回転が付けられたメッサードルヒが大蛇の頭に突き刺さり、大蛇が昏倒した。

その隙を付いて幸成はドルヒボーレンも取り出しサー・シャに接近する。

装填を終えたサー・シャはコルト・アナコンダを構えるがそれより速く幸成の放つた9mmシャルテン・ツーファー・亞音速弾がコルト・アナコンダを手から弾く。

舌打ちをしたサー・シャは先程と同じように突進し、幸成の首元に噛み付こうとする。

しかし、それを見越していた幸成は全身を捻ると片足で跳び上がり、空中で別の片方の足で蹴りを決める中国武術の技「旋風脚」をサー・シャの顔面に叩き込んだ。

自分が突っ込んで來ていた事の勢いと蹴りの勢いの相乗効果により、サー・シャは凄まじい速さで壁に叩き付けられる。

幸成はそれに追い撃ちを掛けるようにドルヒボーレンの銛のよじこ尖った先端を撃ち込んだ。

心臓付近に刺さった瞬間、ワイヤーが巻き取られて一瞬で距離が詰められる。

「Jack pot」

幸成はサー・シャの耳元で囁くとフォースを頭に突き付け、フルオートで連射した。

次々放たれる弾丸はサー・シャの頭を柘榴のように粉碎し、辺りに血をばらまく。

「終わつたか……」

幸成が呟いたその時、蛇の凄まじい体当たりが幸成を弾く。頭にナイフが刺さりながらも向かってくる生命力の高さだからこそここまで成長出来たのだろう。

が、しかし、主を失った蛇はただの猛獸でしかない。

幸成は冷静に二丁拳銃を構えると照準の少し下に蛇の頭を捉え、連射した。

蛇の頭上を初弾だけが貫通し、上部に付けられた銃口から放たれた弾丸は蛇の頭上を通過していく。

大蛇と言え生き物、流体力学的ショックを起こせば即死だ。

案の定、大蛇は弾倉が空になる頃には昏倒し、死に絶えた。

幸成は一丁拳銃を仕舞うと蛇からナイフを引き抜く。

そして蛇の胴体を引き裂き、中から生臭い匂いが漂う液体が溢れだし、その液体に濡れた沙耶那の腕が見えた。

幸成は滑らないようハンドルで沙耶那の腕を拭き、引つ張り出すと幸成は狼狽する。

俯せだつたから良かつたものの、沙耶那の着ていた着物は溶けて完全に無くなり胸に巻いていた溶けかかったさらしと白い下着だけだつた。

「ちょっ！…誰か来てくれ…！」

幸成は大声で叫ぶと取り敢えず半裸の沙耶那を中から引つ張り出す。その姿を直視する事が出来ない幸成は顔を真っ赤にしつつ、目線を逸らす。

苛々と足を踏み鳴らすが誰も来ない。

フューラーに手を当てた幸成はその苛立ちを隠さない口調で無線に怒鳴つた。

「状況が終了したんだ！目の前に女の子の半裸が横たわっちゃほつとけねえから誰か来てくれよ！」

（自分は無理だ。降りなければならん）

（ふ…んだ！自分で何とかしろ…）

（学校で王子様呼ばわりならあ、最後までお姫様を守らなきゃいけませんよねえ？）

（お前、女の子の半裸見てんのかよ…フューラーから画像を…三村以外問題外だ…）

幸成は深い溜息を漏らすと沙耶那の脈を測り、生存している事を確認する。

問題はこの状況だ。

抱えれば流石に問題だらうし、背負うしか…

幸成は目を閉じながら沙耶那を仰向けにして背中に背負う。

「ひい！」

沙耶那のさらしを巻いていてもボリュームのある胸が幸成の背中に

当たり、幸成は軽く悲鳴をあげる。

初めて感じる女性の胸の柔らかさに幸成はうろたえた。

降
る。

「落ち着け……俺」

幸成は小さく咳くと廃工場の扉を開けて黒塗りのバンに向かつて行つた……

古い教会の中に集まつた人々。

その中にいた一人の少女が歩み出ると口を開いた。

「ズメヤー・サーシャは死亡。狼と狐を殺し合わせる作戦は失敗しました。ミラルダ様……」

「それはどうでもいい、ルーナ・ヴェルドウーラ。貴女は引き続き監視をしなさい」

「仰せのままに」

「分かつていてると思うけど……もし、監視の途中で奴らに気付かれたら……」

痛苦のミラルダが指を鳴らすと同時に教会のありとあらゆる隙間から成人男性の親指程もある幼虫が湧きだしていく。

幼虫は赤黒く、小さな牙のある顔を少女に向けて奇声をあげた。その悍ましい外見に少女は恐怖する。

「貴女はこの子達の餌になるから」

「分かつております」

少女はそう言うと立ち上がり、ステンドグラスから漏れた月に照らされた……

三神神社に車を走らせていた幸成は痛い視線に耐える為、外を眺めていた。

ふと幸成は外から目線を外し、後部座席に寝かされた沙耶那と彼女の血圧を計る彩花を一瞥する。

それにしても彩花の先程の発言は……

（どうから王子様とか言われてると聞いたんだ、彩花さんは……）

「幸成！…変な事をしてないだろうね…」

優は幸成の座つている座席に腕を回しながら怒鳴る。

「やつてないよ…やる訳が無い」

万に一つ変な事をしないにしても、仮にしたならば例の親父さんに
ずたずたに切り裂かれそうだ。

この姿で送り届ける事すら鬱だ……

幸成は髪を搔き上げると田線を落とす。

同時に車は三神神社の前に止まり、三村は幸成の頭をぐしゃぐしゃ
に搔き乱す。

「行つてこい。HAWKの事は規則に基づいて言つても構わん」

それは彼女が協力者に成り得るだろうという事に基づいての事だろ
うが、これじゃ協力は無理だろう。

てか、殺される……

それを汲み取つた三村は笑つてみせた。

「安心しろ。お前はそう簡単に死なないだろ

「死ぬ死なないの問題じゃねえだろ！」

幸成は怒鳴ると同時に笑顔の三村は幸成の眉間にカービンライフル
の銃口を突き付ける。

「行くよね？」

安全装置を外し、満面の笑みで笑いかける。

「い、行きます……」

「ゆつくりしてこい」

「…………はい…………」

幸成は顔を引き攣らせながら答えると助手席を降り、後部ドアに手
を掛け沙耶那を背負つた。

無心のまま背中に当たる魔性の存在に耐えつつ、幸成は石段を登つ
て行く。

まるで拘首台に登る死刑囚の気分だ。

もつとも首を括られるのではなく、首を斬られるのだからギロチン台になるのか？

いずれにせよ、ジョークにすらならない。

石段の登りきつた幸成は苦笑すると広場の隣にある沙耶那の家に向かつた。

「おつかねえ……」

幸成は小さく咳くと玄関の扉を一回叩く。

ガラスが揺れる音が響き、「はーい」という穏やかな声が聞こえてくる。

数秒して玄関が開くと望が「お帰りなさい」と笑いかけたが、幸成の姿を見て目をしばたかせた。

「幸成君……だつたわよね……どういう事なの？」

「自分は陸上自衛隊の特殊部隊で、貴女達が血吸い人と呼ぶ存在を狩る任務を帶びています。血吸い人の操る蛇に飲み込まれたのを助けました」

「そう……中に入つて」

「お邪魔します」

沙耶那を降ろして幸成はゆつくりと一礼する。

「沙耶那、帰つたか？」

居間の扉を開けて陽気な声で問う翼が幸成とその傍らにいる気絶した娘を見た瞬間、表情を見る見る内に強張らせる。

「貴様あ！！沙耶那に何をしたあ！！」

翼が怒鳴ると同時に望は翼を諫める。

「彼は沙耶那を助けたのですよ！恩人に無礼はやめて下さい！！」

「……」

翼は目線を落とすと「入れ」と咳き、沙耶那を抱き抱える。

「望、沙耶那を風呂場に運んだら身体を洗つてあげてくれ

「分かりました。幸成君はこちらにどうぞ」

幸成は靴を脱ぎ揃えると望の後ろに続き、客間に通される。

八畳程の畳の部屋に漆塗りの大きめの机が置かれ、窓際にはガラス

ケースに入った日本人形が置かれた和室だ。

幸成は望が置いた座布団に正座すると翼が早足でやつて来て望の肩を叩く。

望はゆっくりと頷き、退出すると翼は右足は胡座に、左足は立て、そして左手を左足の膝に乗せると翼は幸成を睨んだ。

「お前、何者だ？」

「陸上自衛隊所属の隊員です。自分は血吸い人を狩る任務を帶びています」

幸成はそう言うと身分証明書を取り出し、机の上に置いた。

翼はそれを一瞥すると、煙草を掴んだ。

「お前の見舞いに行つてから沙耶那の元気が無かつたんだが何があったんだ？」

翼は煙草のフィルターをくわえてマッチで火を点けると、マッチの火を消しながら幸成を睨む。

「俺が入院する前日、俺を血吸い人と勘違いした白狐、いや沙耶那さんと交戦しました。沙耶那さんはきっと俺に怪我をさせた事を気に病んだんでしょう」

「そうか」

翼は紫煙を吐き出すと短く呟く。

彼は親バカとでも言つべき程、沙耶那を愛している。

無論、娘が危険な目にあつて怒りを感じない親はいないだろうが、その感情は些か矛盾しているとも言えた。

そこまで愛していて何故彼は沙耶那を白狐として送り出すのか……

その意を感じたのか、翼は口を開いた。

「三神神社の伝説は貴様も知っているな？」

「ああ」

「あの白狐というのは、神子の伴侶となるべき存在だ」

幸成は眉を潜めた。

「どういう事です？」

「連れ去られた巫女を助ける為に力を尽くしたのは巫女の許婚だつ

たという訳だ。それが伝説の真相だ。三神の家系は沙耶那も俺もその白狐の避けられない使命を帯びていると思つてくれ。それとヨイツには一つジンクスがある

「ジンクス？」

「この伝説に近い事をした場合、その男女は結ばれる。俺もそれで望と結ばれているし、俺の母親も親父と結ばれている」

伝説に近い形？

確かに伝説は鬼に捕われた巫女が白狐に助けられて……

「あつ……」

謀らずもその形になつていて

蛇……地方によつては鬼と同一視する例がある……に捕らえられた沙耶那を助けて……

「言つておくが娘はやらんぞ、小僧！」

「いやいや……もうう氣は……」

「娘がいらんだと！？沙耶那は器量も性格もいいのにか！？」

どっちなんだよ、コイツは……

馬鹿なのか、阿呆なのか、天然なのか？

恐らく、沙耶那の天然成分はこの人から受け継いだのだろう……

「あなた！？落ち着いて下さい！？」

流石しつかり者の沙耶那母、と幸成が頬を緩ませるととんでもない発言をする。

「沙耶那は寝かせて来ました。それよりあなた！？来年でなければ結婚は出来ませんよ！？」

結婚させる気満々ですか、お母さん……

「いや、その……取り敢えず今日は帰ります。あと、俺が自衛官といつのは内密にお願いします。それと場合によつては協力を申し出るかもしれませんのでそのつもりでお願いします」

「大丈夫です。私達も同じ立場ですし、何より沙耶那のお嬢さんになる人の頼み事は断れませんから、任務の時は必ずお供させます」

望は笑顔を見せ、もはや幸成が養子に入る事が確定の勢いだ。

前言撤回、この家の人は全員が天然……

胃が痛くなってきた……

「とにかく、沙耶那さんにはよろしく言つておいて下さい……婿養

子の事じゃ無いですよ？」

幸成は釘を刺すが聞いてなさそだ。

しかもフューラーの向こう側からHAWK隊員の笑い声が微かに聞こえてくる。

（良かつたな、許婚が出来てなあ。これで結婚相手には困らないな）
三村の笑いを含んだ口調からどんな顔をしているか目に浮かぶ。
いくら美少女でも、流石にこれは勘弁してくれと思う幸成であつた

……

障子の向こう側で賑やかな客間の様子を聞いていた少女は頬を緩めながら囁いた。

「……ありがとう……幸成君」

少女はそう言つと、自分を助けてくれた少年の名前に心の高鳴りを覚え、頬を赤らめるのだった……

桜の薄桃色の花が舞い散り、春の終わりを告げながらも花に代わって夏への新緑の薔薇が枝に現れる。

澄み渡る青空を見上げていた幸成は大きな欠伸をし、目を閉じた。サーシャを最後にシユトレイゴイカバールのヘクセは途絶え、一切の手掛かりが無くなり、監視対象者の鳳寿とも学年の違いから接触する機会も無くなってしまった。

メールも特に無く、こちらからも話題が無い為、完全に手詰まりだ。「びっくりする程、対処の仕様が無いな……これからどうしようか……」

幸成が小さく呟くと「ここにいたんですか？」と沙耶那の声が聞こえ、屋上のベンチに座っていた幸成は顔を沙耶那に向ける。

「あ～」

幸成は力無く答えると、再び空を見上げた。

「八方塞がりつてこいつ事を言うのかな？」

「血吸い人……ヘクセの情報が入つて来ませんから、進展無しですね」

沙耶那は幸成の隣に座ると神妙な面持ちで呟く。

進展があつたと言えば沙耶那がHAWKに所属したという事くらいか？

三神一家の希望で是非HAWKに参加したいと願い出てくれたのだ。三村も正規の手続きを踏み、参加通達を上に取り付けて、上からも許可が下りた。

そして沙耶那は幸成の補佐としてHAWKに新たに設けられた「アシスタンス（補佐）」のポジションに配置され、「コードネーム」「フォックスロット」が与えられた。

「フォックスロット」は国際的な頭文字の規則の通称である「NATO」の「F」に当たる。

勿論、「F」「E」は白狐の「FOX」から来ているのは言つまでもない。ちなみに幸成の「ロメオ」も「R」を意味するNATOフォネティックコードであり、「赤眼の狼」が由来である。

なお、沙耶那が「コードネーム「フォックスロット」になる際、「単純にフォックスでいいんじゃ……」という意見があつたが「カツ」イイからいいだろ」という事で「フォックスロット」に安定した。

幸成は空から目線を外すと沙耶那を見ながら微笑む。

「沙耶那もよくもまあ、こんな貧乏部隊に入ろうと思つたよなあ」二つ目の進展は沙耶那を呼び捨てに出来るよつになつた事だ。

任務にはさつぱり関係無いのだが……

「それは……その……」

沙耶那はもじもじと体を動かすと頬を真っ赤に染めている。いつもは堂々としている沙耶那が口ごもつているのを見て幸成は小首を傾げた。

「どうした? どこか悪いのか?」

「だ、大丈夫れふ」

噛み噛みで呂律が回つていない沙耶那は恥ずかしさのあまり遂にはベンチから立ち上がり、深く深呼吸した。

（幸成君と一緒にいたいからなんて言えないですよ！…）敵の体内に捕らえられ、それを助けて結ばれるとかはよくある「それ、何てエロゲ」だが、沙耶那にしてみれば両家公認…無線越しで隊員達が爆笑を公認というかは別にして…とも言える関係だ。

つまり、言つてしまえば幸成は沙耶那の伴侶になる存在である。それが嬉しくもあり恥ずかしい。

そもそも今まで異性に告白された事はあつても異性を好きになつた事は初めてでその感情への戸惑いもあつた。

当の幸成は許婚の話は完全にネタか冗談だと思つているのだろうが

「ええっと……「ホン」

……

沙耶那が一回咳ばらいをして意を決したその時、屋上の扉が開き、菜月とロイが顔を覗かせた。

「こんな所にいたか、幸成」

「サヤもユキ君も一人で何やつてたの？もしかして乳縹合い？キヤヽ！」

頬に手を当て一人で舞い上がる菜月に一人は苦笑いを浮かべる。

「違いますよ！」

幸成は大声で怒鳴ると菜月は悪戯な笑みを浮かべ、幸成の隣に座り、幸成は両手に花という状態だ。

「二人で何の話しをしてたの？それとも噂は本当だつたり？」

「噂？」

菜月の問いに一人は素つ頓狂な声をあげる。

「一人が最近一緒に行動しているから付き合つてるって、学校中凄い噂だよ？」

「別に付き合つては無いから」

「そうですよ！私と幸成君はいい……」

そこまで言いかけた沙耶那の口を幸成は押さえて作り笑いを見せる。許婚なんて言つたらそれこそ学校中の噂になつちまう。

事情を知つているロイは笑いを噛み殺し、ニヤニヤ笑つていて。後で見ているよ、と幸成はロイを睨む。

ロイにとつては今回の事態は憎たらしく羨ましいだろうが、幸成の弱みを握られたのだからプラマイゼロだ。

「三人ともナツに隠し事？」

「違う違う。沙耶那の口に埃が入りそうだつたから防いだんですよ」

「几帳面だなあ。もしかしてA型？」

「A型でもないし、血液型と性格の因果関係は無いんだよ？」

幸成が諫めるように言うと菜月は「夢が無いなあ」と笑う。四人の間を風が通り抜け、桜が周囲に舞い散る。

談笑をする四人はチャイムが鳴るその時まで他愛の無い話で盛り上がるのだった……

夜桜が月夜に映える春の終わり。

白い乗用車が古い洋館の前に停車した。

二組の男女が乗用車から出でくると長髪の男が懐中電灯を取り出す。

「ここかあ、心靈スポットは？」

「春なのに心靈スポットとか無いってえ～」

ボニー・テールの女性が笑いながら長髪の男の肩を叩く。

「昔は鉱山の事務所だったんでしょ？観光名所にすれば良かつたんじゃない？」

「こんな山の中に誰も来ないって！！」

もう一人の眼鏡をかけた女性は陽気に笑うとルネサンス様式の外觀を残す建物を見て笑う。

この建物は華景市で鉱山業をしていた時代に、労働者が暮らしていた場所だ。

不釣り合いなルネサンス様式の洋館はかつては美しかつただろうが、現在は寂れてしまいその面影は一切無い。

「さて、幽靈さんの自宅に突撃と行きますか」

もう一人の男性が懐中電灯を取り出し、それぞれが女性と手を繋いで洋館に歩いていく。

人々は心靈スポットに惹かれるのかと問えば、度胸試しと答えるだろう。

しかし、実は心靈スポットは日常と非日常の境だからとこういう事を心の奥底で感じているのだ。

何故なら現実にはホラー映画のような恐怖は有り得ないし、ファンタジーのような奇想天外な冒險活劇は方に一つ有り得ない。

その唯一の可能性を作ってくれるのが心靈スポットなる境目であり、若者にとつては度胸試しの場だが同時に日常から逸脱させてくれる場所なのだ。

四人は木製の扉を開けると暗闇の中に進み、懐中電灯のオレンジ色の光で洋館の広間を照らす。

深紅のカーペットと両脇の階段、目の前の木製の扉、そして多数の真新しい蝋燭が立てられた燭台。

その燭台の蝋燭はまるでさつき取り替えたかのように真新しい。

「誰かいりますか～！」

長髪の男が叫んだその時、手を繋いでいたポーテールの女性が「やめてえ～」と男性を小突く。

その時、入つて来た扉に鉄格子が下りて来て入口を塞いだ。

四人は体を硬直させると表情を強張らせ、鉄格子を掴む。

「ちょっと何よ、これ～！」

「ふざけんなよ～！」

四人が口々に怒鳴ったその時、燭台の蝋燭に火がつき、洋館を淡く照らした。

淡い光に照らされて、十字に伸びる蝋燭が地面に伸びる。

その時、階段の踊り場から影が伸び、笑い声が響き渡つた。

「よつこそ、私の居城へ」

黒のモーニングスーツに痩せ形の美形の男が声高に言うとワイングラスに入った液体を傾ける。

ワインよりも濃い赤色の、粘り気のある液体は……

「実に美味しいよ。君達よりも先に来た先客の物でね？」

その瞬間、眼鏡をかけた女性の頬に生暖かい液体が落ちてきた。

女性は震える手でそれに触れて、恐る恐るみると手が真っ赤に染まつている。

四人は同じ考えにたどり着き、ゆっくりと見上げると絶叫した。

そこについたのは体中に傷を付けられ、そこから滴り落ちてくる血で赤く濡れた男女の死体だ。

絞められた二ワトリのように両足を縛られた死体からは傷からだけでなく、逆さにされた事で重力に引かれた血液が口や目という穴から滴つていた。

その数は六体もあり、滴り落ちた血が固まって深紅のカーペットを作っていたのだ。

絶叫に合わせて中央の扉が開き、15世紀から17世紀頃に使われていた大剣「クレイモア」を肩に担いだ屈強な顔立ちで筋肉質の男が現れる。

さらにその後ろには銃が戦場の主力になるまでヨーロッパ全土で主力武器として使われていた槍と斧を合わせたような外見の「ハルベルト」を持った銀色の甲冑達が重々しい音を響かせて男に続いてきた。

「男は殺せ、女は私の部屋に連れて來い」

「分かつてますぜ、旦那」

屈強な男がそういうと大剣を四人に突き付けた。

男は不敵な笑みを見せると体に見合はぬ凄まじい速度で四人に突っ込んだ。

それと同時に洋館の中から絶叫が轟き、窓の外に漏れていた蠟燭の火が消える。

そして彼らは日常から吸血鬼という非日常の力を借りて、この何もない世界から逸脱する事に成功したのだった……

5・3・賭け事

時計の長針が一回転し、短針が22時を指し示す。

零荘の103号室でロイを除く全員がトランプでババ抜きに興じていた。

あまりにもヘクセの姿が確認出来ず、情報も入らない事で暇を持て余すHAWK隊員と沙耶那は三村が提案した「トランプでビリだつた人がGARUDAを監視」というゲーム（？）により、正々堂々の戦いが行われたのだ。

果たして偶然か必然か、言い出しつペの三村と本来の監視役のロイが交互に監視という状況がかれこれ20回近く。

現在、三村と幸成の一騎打ちの途中だ。

三村がハートの10を、幸成がスペードの10を先に取つたら勝ちで幸成がババを持っている状況となつていて。

三村は幸成が右親指と人差し指で挟んだ一枚のトランプの一枚、三村から見て上手のトランプを叩いた。

「ババ、ババ、ババ」

三村はトランプを叩きながら幸成の反応を見る。

幸成は「ババ」の声に頷きながら笑う。

つまり、下手の方がハートの10だ。

三村の人差し指がゆっくりと下手の一枚に向かつた瞬間、三村は声高に「と、見せ掛けてしまふ」とノリノリで先程ババ宣言をしたトランプを抜き取る。

その絵柄はハートではなく黒い道化師のカード、つまりはババだった。

「俺、頷いてたじやん」

幸成は含み笑いを浮かべながら三村に指を差す。

三村も豆鉄砲を喰らつた鳩のように目を数回しばたかせる。

その場にいた女性陣も三村の滑稽な様子に爆笑していた。

「アハハハ！－おっちゃん馬鹿だ～」

優は腹を抱えながら、堪えられんとばかりに床を叩く。

「お気の毒です、三村さん」

慰める沙耶那も笑いを堪えられず、声のトーンが少し高い。
「というかあ、交互に20回近くも五人のババ抜きでビリになるなんてえ、口トや宝くじの一等を取るよりも難しいんじゃないですか？」

彩花は紅茶を飲みながら、ティーカップを持つていなにもう片方の手で人差し指を立てる。

「ロイとおっちゃんが今宝くじを貰えれば貰えと部隊から脱却出来そうだな」

幸成はシャツフルしている三村に「うわせべ」と口を尖らせる。

シャツフルして出されたカードを迷う事なく抜いた幸成はほくそ笑む。

「B-E-N-E-F-I-C-I-O-N！」

幸成はトランプの束に一枚のトランプを放ると三村の肩を叩く。

「頼むな、おっちゃん！」

「……はー」

三村は何故こんな事を提案したんだと左手で顔を覆いながら思つ。

「そろそろ飽きたし、やめないか？」

ロイはまさに企んでいましたと言わんばかりのタイミングで提案する。

「ロイー！」

「まあ、そうだね」

幸成の声に彩花と優は顎き、三村はいい年して半ベソになつていた。それ程までに、ヘクセが映らない映像は詰まらないのだ。

「じゃあ、今日はあと一時間はおっちゃん担当な～」

「ロイー！そもそもお前がやるべき仕事だろーー！」

「だつて提案したのはおっちゃんだし……」「

幸成とロイ、優が声を揃えて咳くと、彩花が懐からオオスズメバチが入ったビンを取り出す。

「部屋に放つてみましょかあ？」

「分かつた、分かりました！」

直江三村、34歳。

この歳でトランプに負けて青年達にこき使われる。

「まあ、夜食でも作るからへソ曲げないでよ」

優は立ち上がりながら台所に向かうと、沙耶那は着物の裾を正しながら「私も手伝います」と笑ってみせたが優は仏頂面で首を振った。しかし、HAWKに沙耶那が入つてから優の態度がおかしい。

やたらと沙耶那に突つ掛かり、沙耶那の申し出を断るのだ。
三村とロイ、彩花は事情を知っているらしいが幸成にそれは教えてくれない。

ロイ曰「胸に手を当てて考えた後爆発しろ」との事だった。
優に断られた沙耶那は座布団に座ると同時に思い出したように口を開く。

「ところで幸成君とロイ君は中間テストの勉強をやっていますか？」

「そういや、あつたな……5月の17日だっけか？」

「何それ……聞いてないぜ、そんなもん」

唖然とするロイは顔面を青くさせていく。

そもそものはず、今日は5月14日の金曜日。

既にテストまで三日前となり、しかも教科数が9教科と多い。

「だいぶ前から担任は言つてたが、お前は近くの男子と喋つていたからな」

「やべえじゃねえか！！でも、幸成も勉強してなかつたしな」

「……俺は大学の過程が終わつているんだが……」

「そつだつた……」

ロイは膝と手をついて撃沈していると沙耶那が笑つた。

「明日から私のお父様とお母様が共通の御友人の結婚式で家を空けるので私の家で勉強会を行いませんか？」

「流石、沙耶那様！！仏様、いや女神様だ！！ああ、沙耶那様が輝いて見える！！」

ロイは両手を合わせて沙耶那を挾むと幸成は髪を搔きながら問い合わせる。

「沙耶那はいいとしても、親父さんが許さないんじゃないか？どこの馬の骨か知らない奴らが一人も泊まるんだぜ？」

「お父様には許可を貰っています。特に幸成君は是非、とおっしゃつていました」

あくまで許婚という訳か……

幸成は髪を搔き上げると深い嘆息を漏らし、沙耶那から目を逸らす。

「鳳寿さんも呼んでみませんか？彼女は監視対象者なんですから良い機会じゃありませんか？」

確かにその通りだが、問題は彼女が来てくれるかだ。

彼女は何か闇を背負っている。

その闇を取り扱わない限りは何ともならない。

「三村さんは許可を下さいますか？」

沙耶那が問い合わせると優は「駄目に決まってるじゃん」と怒鳴り、沙耶那を睨む。

「優！」

三村は目を細めて優を諫めると沙耶那に微笑んだ。

「鳳寿が確保出来たら許可を出そう」

「分かりました。少しあ待ち下さい」

沙耶那はニッコリと微笑み、目にも留まらぬ速さで携帯電話のボタンを押していき、指が止まつたかと思うと「送信しました」と笑う。所用時間は30秒、女の子のメールを打つのは早いがここまで早いとはと幸成は感心する。

その僅か10秒の間に落ち着いた和やかな着信音が鳴り響き、沙耶那は優しく微笑んだ。

「『分かった』だそうですよ」

「よし！今から準備をしろ、馬鹿一人」

「「今から！？」」

幸成とロイが三村に問い合わせると一人に同時にデコピンを叩き込む。「沙耶那さんがもぎ取った千載一遇のチャンスなんだぞ！…貴様等デクの棒とは大違いだ！…命令だ、とつとと行け！…」

「「了解！」」

三等陸佐、つまりは少佐の階級に位置する三村は実際、兵長の階級とも言える陸士長とは、士、曹、尉、佐と、とんでもない差がある。「命令」と言われて条件反射的に動くのは性とも言えた。

二人は慌てて103号室から飛び出すと、その背中を見送った三村は頬を緩ませながら沙耶那を見た。

「沙耶那さん、幸成に近距離戦を仕込んでやつてくれないか？あの馬鹿、格闘徽章を持つていいんだが、ヘクセ戦では殆ど拳銃の接射で対処している。バランスを取るにはナイフをもつと上達させにやならんからね」

「私が役に立てますか？それに接射とは？」

「銃口からの距離が零の距離で射撃するのが接射です」

「それって零距離射撃って言うんじや……」

三村は指を振ると「零距離射撃とは……」と口を開いた。

「大砲の仰角が零度で射撃をする事を言つんだ。決して零の距離からの射撃ではない。最近はロボットアーマやらで零距離ビーム何かやらがあるが、しつかり調べてから使いなさいと言いたいね。ああ、ここテストに出るから」

三村はそう言つと白い歯を見せて笑つた……

暗い夜道を歩く三人。

時計は既に1時を差し、街灯の少ない華景市の路地は暗い。しかし、その少ない街灯によつて星が非常に良く見えた。

青黒い夜空に瞬く青白い星は非常に美しい。

その下を歩く三人の内一人は大きめのバックに洗顔や入浴用の道具、他にも着替え等も揃い、まるで夜逃げのようであった。

「いやあ、こういうのを満天の星空とか言うんだろうな。河川敷で野原に寝そべりながら彼女と一緒に……」

「口イ、さつきから煩い」

バックを肩に担いだ幸成は片目を閉じながら口イを諫める。

「お前は浪漫が無いなあ。いいか?こんなに綺麗に星が見れる街なんて滅多に無いぞ!!」

「星か。確かに綺麗だからな」

「この街は見る場所は少ないですが、星は本当に綺麗ですからね」沙耶那は優しく微笑むと右手に持つていた刀を左手に持ち替えた。

「沙耶那。その刀、重いなら俺が持つか?」

「大丈夫です。それにこの神緋褪夜宵^{かみひさめ やよい}は代々神子が持つもののですで……」

「何か、刀つて感じの名前だな」

「口イ、それは刀だから当たり前だ」

幸成は突つ込むと沙耶那は右手を口に当てながら鈴のように澄んだ笑い声をあげた。

「面白いですね、二人とも」

「名前には何か由来があるのか?」

「初代当主であり、神子の夜宵様が作った緋褪色の刀という意味です。古来、赤には厄除けの力があると言っていたので緋褪色にしたと言われていますが、どのように色を付けたかは分かっていません

ん

「何か国宝に成り得そうな刀だな」

「大袈裟ですよ」

鞘と刃が擦れ、月光に緋褪色の刀が照らされる。

かつて対峙した時にはこの刀の切れ味と沙耶那の身体能力に苦戦させられた。

沙耶那は刀を鞘にゆっくつと納めると、思い出したように優しく微笑んだ。

「そういうえば、三村さんから幸成君に稽古を付けるように仰せ付けられました。明日の朝から行いますので覚悟してくださいね」

「……分かりました」

幸成は蚊の鳴くような声で答えた。

幸成にとつて敵対したくないという意味で沙耶那が最も恐ろしい。彼自身、自分はナイフによる白兵戦ではなく二丁拳銃を使用した近距離から至近距離の高速戦に特化していると自覚していた。無論、それが自分の弱点であることも……

拳銃は距離が近くなる程回避は難しく、威力も上がる。

そもそも拳銃で30m先の目標に弾丸を当てる事が出来れば名手と言つても過言ではない。

何故ならライフルによる射撃は銃床等の三ヶ所で支えられるが、拳銃は二力所でしか支えられないのだ。

そのうえ、手首で反動を逃がさなければならぬ為、跳ね上がりによつて弾が逸れる可能性がある。

その為、拳銃での撃ち合いは10mから7mが最も多いとされており、間合いとしては近距離からの射撃は「理論としては」間違つていい。

しかし、対ヘクセとなれば話は別である。

対ヘクセでも拳銃での撃ち合いは間違つてはいけないが、そこで問題になるのはヘクセの強靭な力と人間離れした体力だ。

そして倒しきれなかつたら、銃の弱点「弾切れ」が引き起こされる。対ミリア戦でも接射で倒しきれず、白狐 - - - 沙耶那 - - - の乱入により難は逃れた。

あの時、沙耶那が乱入しなければメツサードルヒで交戦しなければならなかつただろう。

だが、近くなれば近くなる程ヘクセにより吸血される可能性が高くなる。

それを防ぐだけの実力が無い事を対サー・シャ戦で思い知らされた。

「俺は剣道は知らないぞ？」

「いえ、私は刀を模した木刀を使います、幸成君は脇差程度の大きさの木刀を使ってください。勿論、本気のやり合いで」

「……本気でやるんですか？」

「はい。ハツキリ言いますと、幸成君の白兵戦の実力は私よりも劣っています。本気でやらないと殺してしまつので、眞面目にやりましょうね？」

その声に幸成は深い嘆息を漏らすと髪を搔き上げる。

良い機会ではあるが死んだら笑えない。

勘弁して下さいと言えず、幸成は星空を見上げたのだった……

深夜に入る風呂は格別に気持ちが良い。

檜木の浴槽と木の桶が心地の良い香りが入浴剤の匂いが混ざり合い、幸成は鼻でその香りを吸い込む。

「気持ち良いなあ」

幸成は広い浴槽に足を伸ばしながら呟く。

沙耶那の家は平家とは言つてもかなり広い。

木造の平家と聞けば質素なイメージをする人が多いだろうが、沙耶那の家は真新しい綺麗な家だ。

切つたばかりの木の薄茶色の家は華景高校と同様に温かみがある。「幽霊屋敷とは大違ひだ」

幸成は苦笑すると曇りガラスの向こう側に人影が見えた。

「タオル、置いておきますね」

沙耶那の声が扉の向こうから聞こえ、幸成は「ありがとうございます」と答えた。

幸成の声が風呂場のタイルに反響する。

「幸成君？」

「どうした、沙耶那？」

「HAWKの人達はどうして賞賛されもしない事に命を賭けてるのですか？」

「HAWKは、俺達はそれぞれが理由を持つてここにいる。だが、その理由はそれぞれ基本的には知らない。死んだ時や非情な決断をする時に少しでも未練を残さない為だ」

数秒の沈黙。

「…………どうして…………どうして幸成君はHAWKに入つたんですか？」

その声に幸成はゆっくり目を閉じ、入浴剤で緑色に染まつた水の中に潜る。

勢い良く潜つた為、発生した水泡が水の中で轟音となり幸成の鼓膜

を揺らした。

幸成は数秒して水から出ると髪を搔き上げ、天井を眺めながら口を開く。

「俺にはおっちゃんの周り以外に居場所が無かつたんだ。俺は10歳の時におっちゃんに拾われるまでは児童養護施設で暮らしていた」「孤児……だつたんですか？」

「ああ……おっちゃんに拾われたあの日の出来事は忘れもしない」

幸成は目を閉じると口を開いた。

「それは8月20日……寝苦しい夏の夜の事だつた。俺が寝付けずにいると物音が聞こえてきた。俺がそこに行くと夕方まで生きていた皆の死体だつた。職員は殺され、泣き叫ぶ子供も問答無用に……四人組の強盗だ。誰だろつと見境は無かつた……そして俺が最後の一人だつた」

幸成はそこまで言つと息を大きく吸い込み、一拍置いた。

「俺の胸にナイフが突き刺さつた。胸からは血が溢れ出し、声に成らない悲鳴をあげながら死ぬんだつて思つた……いや、俺はそこで死んだ方が良かつたんだ」

「どうして？」

「ナイフが抜かれたその時、目の前が赤く染まつた。そこからは分からない。俺は気が付いたら路地裏にいて強盗の死体に囲まれていた……意識はあつたがどうしても止められなかつた……そこで俺は通り掛かつたおっちゃんに飛び掛かつた。だけど、おっちゃんはそんな俺を止めてくれた。」

「幸成君……」

幸成の声に沙耶那が小さく呟くと幸成は左目に触れた。

「その日から俺の左目は紅く染まり、人間じやなくなつた。死んでも死に切れず、強盗とは言つても人を殺したんだ。俺は死んだ方が

……」

「それは違います！－」

沙耶那は家の中に響くよつた大声で怒鳴ると勢いよく扉を開けた。

「人は生きてこそ意味があります！どんな過ちを犯しても死ぬなんて言っちゃ駄目です！！それに幸成君がいなかつたら私は……」

「なつ！…えつ！…沙耶那！…」

幸成の焦る声に沙耶那はやつと我に返つた。

透き通つた緑色のお湯に半身が漬かつた幸成を見た沙耶那は見る見る顔を赤くしていく。

口をぱくぱく動かし、茹蛸のよつに顔面を赤くした沙耶那は大きな悲鳴をあげた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！…」

「分かつた。分かつたから落ち着け！叫ぶな！…」

「どうした！…？」

その悲鳴を聞き付けたロイはスコトス＆フォースの元になつたHAWK隊員の護身用であるピエトロ・ベレッタ社が開発した拳銃「M92FS ハリートーイA」を構えながらやつて来る。

しかし、幸成と沙耶那の様子から察したロイは舌打ちをすると舌打ちをし、去つて行く。

「幸成君の破廉恥！…」

「俺が悪いのかよ！…」

「で、でもいざれ夜には……」

「何を想像してんのだあ～！」

幸成は怒鳴ると水の中に潜る。

あまりの恥ずかしさとやり切れなさで幸成はお湯の中でありながら、毛穴から汗が噴き出す感覚に苛まれたのだつた……

丑三つ時、草木も眠る時刻。

魔が動き出すその間に洋館の窓からは淡い光が漏れていた。
古風なテーブルを照らす燭台が辺りを照らす。

テーブルには青いバラが生けられた花瓶と黒ずんだソーセージが大量に盛られた皿がある。

黒のモーニングスーツを着た男は皿に盛られたソーセージを切り分けるとフォークでそれを口に運ぶ。

その横にはクレイモアを持つ男性が控えていた。

モーニングスーツの男がソーセージを口にすると重い鉄の扉が開き、一人の少女が入ってくる。

「親にノックを習わなかつたのか、ルーナ・ヴェルドゥーラ？」

「格は私が上だよ。ヴァインキリウス・サンジエルマン郷」

少女は悪戯に笑うと、モーニングスーツの男・・・ヴァインキリウス・サンジエルマンは舌打ちをし、ソーセージを咀嚼する。

「見たよ、あの死体。随分悪趣味な事をするんだね」

「御蔭でブラッドソーセージが出来たさ」

ヴァインキリウスはブラッドソーセージの一本にフォークを刺すと少女に差し出す。

ブラッドソーセージはその名の通り血で出来たソーセージだ。

血液以外に内臓や舌、皮、脂肪で出来たそのソーセージは血液の独特の癖がある事で知られている。

家畜の体を余す事なく使われるソーセージだが、このソーセージに使われている肉は……

「私はいらない」

「へクセなのに血が嫌い、変わった者が私の上司とははたはた泣けてくるよ。なあ、アーサー」

ヴァインキリウスはクレイモアを持つた男・・・アーサー・ウイー

バーに語りかける。

アーサーはゆっくり頷くと少女を一瞥した。

「それで手筈はこの前と同じで？」

「そうだよ、ヴァインキリウス郷。各自分担して狼と狐を狩つてね。それと私は手を貸さないから」

少女の言葉にヴァインキリウスは目を細め、深紅のワインを口に運ぶ。

「それはどうしてだ？」

「貴方達が失敗しない補償が一体何処にあるのかな？奴らに正体が露見したら私が痛苦のミラルダの飼う蟲の餌になるの。そんな危ない橋を渡る馬鹿は何処にいるの？」

少女は口に手を当てて、彼らが失敗するかのような口調で笑うとヴァインキリウスは無表情のままマウザー社の拳銃「モーゼルC96」を構えた。

弾倉が銃把の前にある独特の姿をしたモーゼルC96は20世紀前半で最も知られた自動拳銃とも言われ、様々なメディアでも露出がある。

そのクラシックな銃を向けられた少女は一瞬目をしばたかせたがすぐに笑みを見せた。

「先程の発言は撤回していただこうか、ルーナ・ヴェルドウーラ？」

「貴方、誰に銃を向けているのかな？」

ルーナが微笑むとヴァインキリウスの持っていたC96に青いバラの茎が絡まっていた。

バラの棘がヴァインキリウスの腕に刺さり、C96を取り上げると銃口をヴァインキリウスに向ける。

「実力の差を弁えた方が賢明だよ？」

少女はそう言いつと、バラを元の長さに戻す。

「流石、ルーナ・ヴェルドウーラ。植物を操る能力は伊達ではないようだ」

「分かつたら歯向かうのはやめなさいね。それと、仮に奴らの前で

私の名前を呼ぼう物なら、殺すから」

少女はそう言うと「ラッシュドソーセージによつて血生臭い匂いが充満する部屋から出でいく。

その背中を見送つたヴァインキリウスは「ラッシュドソーセージを噛みちぎると舌打ちをした。

「小娘が……アーサー、ヘクセの中で至高の存在は誰だ?」

「ヴァインキリウス郷、ただ一人だ」

「そうだろ、アーサー。私こそがシュトレイゴイカバールの幹部に相応しい」

ヴァインキリウスはワイングラスを揺らしながらほくそ笑むとグラスを傾ける。

そしてヴァインキリウスは壁に立て掛けられたダーツを見て不敵な笑みを浮かべた。

そこにはダーツの矢で留められた幸成と沙耶那の写真が貼られている。

「私は……」

C96を構えると二人の写真に銃口を向けた。

同時に屋敷の中に銃声が轟き、二人の写真に穴が開く。

弾丸は一人の眉間に穴を開け、その穴の周りを黒く焦がしていた。

「狙つた獲物は逃さない」

ヴァインキリウスはC96から出てくる硝煙を吹き消すのだった……

：

雀が囁り、太陽の光がまだ白い早朝。

三神神社の広い石畳に立った幸成と沙耶那はそれぞれ木刀を持ち、それを構える。

「参ります！」

沙耶那は神緋襖夜宵を模した木刀を正眼に構えると、脇差程度のメツサードルヒを模した木刀を逆手に持った幸成を見る。

「いざ！…」

幸成が笑いながら答えると、それより速く沙耶那の踏み込んだ一撃が幸成の頭に振り下ろされた。

即座に脇差で防ぐと鈍い音が空気を揺るがす。

それを舞台に座つて見ていたロイが驚嘆の声を漏らした。

それを尻目に幸成は沙耶那の頬目掛けて上段回し蹴りを行つが沙耶那はそれを少し体をのけ反らす事で避け、幸成に中段回し蹴りを叩き込む。

そのまま吹き飛ばされた幸成を一警した沙耶那は木刀を攻めの構えである上段に構えながら言つ。

「攻撃の動作の隙が威力を重視するあまり大きくなっています。上段回し蹴りの判断は利に適つていますが逆に意表を突けていません」女子の子に戦闘の説教をされるのが始めての幸成は苦笑いを浮かべながら立ち上がる。

その瞬間、沙耶那は上段の構えを保ちながら幸成に迫ってきた。

沙耶那が飛び込んできたと同時に振り下ろされるのを見越して頭の上で脇差を構えた幸成だったがその予想は外れ、沙耶那は剣道の技「抜き胴」で幸成の腹部を殴打して後ろに抜ける。

鈍い音と同時に幸成の脇腹に鈍痛が走り、幸成は崩れ落ちた。

抜き胴は剣道における面のカウンター的な技だ。

面を避けるか防ぎながら相手の胴を打ち、擦れ違つこの技は振り上

げてから相手の右の胸を打つ。

つまり、上段ならば面同様に振り上げる動作が必要無い。

そうとも知らずに振り上げた木刀を受け止めようと腹部を空けた幸成の完全なミスだ。

呻く幸成に歩み寄った沙耶那は手を差し出す。

「いくらなんでもやられるのが早過ぎます」

「ハハ……格好悪いな、俺」

幸成は自嘲するとTシャツをめくる。

沙耶那の一撃が決まった場所が青く腫れていた。

「容赦無いな、沙耶那は……」

「お父様とはこのように稽古を行つていきましたから」

沙耶那は優しく微笑むと着物の裾から塗り薬を取り出し、幸成の傷に塗つていく。

「いつつう~」

皮膚が軽く裂けているのだろう、非常に染みる。

回復力が高くとも痛覚はしばらく残るのが色々な意味で痛い。

「しかし、最初に私と戦つた時はもう少し動きが良かつたと思いましたが……」

「あの目に付けてる奴の御蔭だよ。肉眼じゃ人並みよりも少し速く動くのが精一杯……もしかして今の沙耶那さんは潜在能力を上げてたりする?」

「いえ、お務めの時以外は使いません」

「それあんだけ動けるつて、化け物だ」

幸成は嘆息を漏らすと白みかかった空を見上げた。

ハツキリ言つてHUD無しで沙耶那には勝てない。

ヘクセ相手に銃器を使わず、神隕褪夜宵と自分の実力だけ戦つていいのだからそれこそ沙耶那に勝てる道理が無いのだ。

「幸成君は一丁拳銃を使うという事情から足技を多用するのですから、ナイフよりもそちらを研いた方が良いでしょう。ナイフは暗殺や敵の攻撃を防ぐ為に使用した方が効率的でしょう」

「防ぐ、か……」

確かに咄嗟に攻撃を防ぐとなれば小回りが利くナイフは適任だ。
しかし、攻撃用に使うのではなく防御用にナイフを？

沙耶那は薬を仕舞いながら俯く幸成に、子供に言い聞かせるような口調で言つ。

「幸成君の『剣』が一丁拳銃ならば、『盾』はナイフ。必ずしも盾が防ぐ物とは限りませんよ。私の場合は神縛褪が『剣』であり、『盾』は神縛褪とその鞘。その特性を理解した時に本質が掴めると思います」

「沙耶那さん、徒手格闘の教官に向いてるかもな」

「これはお父様の受け売りですよ。幸成君はどちらかと言えば攻撃に集中し過ぎて、防御に徹するどどうしても集中力が途切れ弱くなる傾向になります。これは口で説明しても難しいので実戦あるのみです！」

そう言つと沙耶那は木刀を構えた。

「まだやるのか！？」

「当たり前です！さあ、行きますよ！！」

沙耶那による地獄の稽古は、沙耶那の体力が持つまで行われたのだった……

朝食を食べ終えてから一時間が経過したが、沙耶那の攻撃によって生まれた傷が今だに疼いていた。

回復力は高くとも痛みがしばらく残るのは痛いのが本音だ。畳に横たわっていた幸成は鈍痛に顔を歪めた。

「容赦無いなあ、沙耶那は……」

普段なら自分は一步引いて相手を立てる彼女だが、稽古となれば命のやり取りに繋がる為、容赦が無い。

幸成はさっきまで青痣があつた場所を摩ると深い嘆息を漏らす。盾が防ぐ物とは限らないとはどういう事だ？

幸成は腕で目を覆うと小さく「分からねえ」と呟く。

その時、玄関の扉を叩く音が聞こえ、幸成は返事をしながら玄関に向かう。

扉を開けるとそこには鳳寿と菜月が立っていた。

二人の手には学生カバンが握られている。

「来ちゃった！」

「……よろしく」

二人は頬を緩ませると玄関に入る。

菜月は幸成が出て、沙耶那から両親がいないと聞いていたのだろう、その状況を理解し、口元を三日月に歪めた。

「あれえ～？ ユキ君はお泊り？ もしかして夜も…… キヤ～……」

菜月は頬に手を当てて体をくねらせる。

幸成は髪を搔き上げると怒鳴った。

「違つつての……」

「……不潔」

「鳳寿さんまで……」

流石、アイデンティティクラッシャーの資格一級保有者の菜月、どうしてなかなか容赦が無い。

下手をすれば地位はロイと同じ所まで落ちそうだ。
そんな事を言うとロイには非常に悪いのだが……

「とにかく入つて」

「サヤと変態さんは?」

「シャワーを浴びてるよ。ロイは俺の親父に用事があつて雲莊に床
つてるよ」

「そつかあ、残念」

「残念?」

「変態さんをおちょくつて遊ぼつかなと思つてたのに~」

「あんまりロイを虐めるなよ? あれで自称ガラスのハートの持ち主
なんだから」

「自分でガラスのハートとか有り得ないよ」

からからと笑う菜月は腹を抱え、目に涙を浮かべている。
彼女は笑い上戸なのが、息を切らしながら笑い転げた。

「鳳寿さんもよく来たね」

「……アタシは先輩が勉強を教えてくれるつて聞いたから」

「えつ?」

幸成は素つ頓狂な声を出した。

冷静に考えたらふさぎ込んだ鳳寿が殆ど面識が無い沙耶那に誘われ
て来る可能性は低い。

しかし、仮に沙耶那が自分をダシに使つたなら可能性はある。

一応、鳳寿は『闇』の面影を自分には晒してくれているから、自分
自身で弱み(?)を握る幸成を『監視』といつ目的があるのだろう。
こちらも監視しているとも知らずに……

(しかし、おっちゃんも何だつてんだ? このタイミングに……)

幸成は髪を掻き上げると眉を潜めるのだった……

数枚の英語と日本語の混ざった資料を見て三村は頭を抱えた。

「厄介な事になつてきやがつたなあ」

三村が見ている資料には英語と日本語で「PMCの介入について」と書かれていた。

その時、扉が開き、面倒臭そうにロイが入ってきた。いつも結ばれている金髪の髪は結ばれておらず、三村は最初にそれに突っ込んだ。

「その髪はどうした？」

ロイはわらわらの後ろ髪を撫でると片方の手で半分に切れたヘアゴムを見せた。

「切れちまつてよ。つたく、縁起でもねえぜ」

「お前、髪を下ろせば涼しい美人つて感じだな」

三村は笑うとロイは口を尖らせた。

「こつちは赤点の危機なんだ。くだらない事だつたら帰るぞ？」

「帰るつて、今のお前の家はこゝだろ？ 何時から沙耶那さんの家がお前の家になつたんだ？」

「うつせえ！－！冗談抜きで戻るぞ！」

「まあ、待て」

三村はそう言つと先程見ていた資料をロイに投げ、ロイはそれを受け取ると田を通していく。

「PMCの介入？ PMCじつて？」

「民間軍事会社だ」

「Private Military Company」、通称「PMC」。

軍隊や特定の武装勢力等に戦闘員を派遣する会社と思つて頂きたい。それは新しい形態の傭兵組織とも言える。

「それが何でまた……」

「神宮寺財閥に雇われたらしくと政府から通達が入つた。有り得ない金の流れを辿つたら民間軍事会社にたどり着いたんだ。問題は、

その会社だ。アメリカ海兵隊の廃棄された海上プラントに本社を構える『シャドー・サーベラス・カンパニー』だ

「随分と厨一病な名前だな。アレか?日本のオタク文化に乗ろうとして空回りしたアメリカ人が創設者とかそういう組織なんだろ?」「本当にそう思うか?」

三村はシャドー・サーベラス・カンパニーの武器一覧の資料を手渡し、ロイはふざけた笑みを消した。

彼らの武器リストはハツキリ言って凄まじいの一言だ。

米軍の正式拳銃のトライアルで「M92F」と戦つて敗北するも性能的に勝っていたと言われた、自衛隊の使用する「9mm拳銃」をダブルカラム複列弾倉化した「SIG P226」。

ライフル弾を使用するサブマシンガンとして米軍でも試験中の個人携帯武器（PDW）「MP-7」。

他にもSD仕様の武器や精度の高い狙撃銃等も配備されている。民間軍事会社は基本的に退役した軍人等で構成される為、その実力を考慮すればかなり厄介な相手だ。

「奴らが神宮寺財閥に着いたとなればシュトレゴイカバールの他にもシャドー・サーベラス・カンパニーとも相手をしなければならなくなつてくる。自分達は対ヘクセの装備はあつても傭兵に使う装備は麻酔銃以外に無い。最悪だ……」「何で奴らは神宮寺財閥に着くんだ?」

三村はコーヒーを啜ると深い溜息を漏らす。

「シュトレゴイカバールは分からんが、シャドー・サーベラス・カンパニーは簡単だ。金だ」

「やつぱり、か」

ロイは苦笑する。

「神宮寺財閥はヘクセを仲間にしているだろうが、信用はしてない。その抑止力にPMC、綺麗に三疎みが出来ているだろ?」「だつ! 分かんねえ!!」

ロイは金髪をぐしゃぐしゃに搔き乱すと「お前は専門分野以外は駄

目だな」と三村。

「神宮寺財閥はシユトレイゴイカバールが怖いが私兵にPMCがいるから安心、シユトレイゴイカバールは神宮寺財閥を裏切つてもいいがPMCがいるから手出し出来ない、PMCは神宮寺財閥から金を貰つてはいるからシユトレイゴイカバールの牽制をしなければならない。綺麗に抑止力が出来てはいるだろう？財閥は吸血鬼に弱くて、軍人は吸血鬼に強い。しかし、軍人は財閥には弱いって訳だ」「成る程。何となく分かった。それで、俺に何をしようと？」

「お前には神宮寺財閥の監視カメラをハッキングして配置や警備ルートを割り出してもらいたい」

三村の言葉にロイは深い溜息を漏らす。

「買い被り過ぎだ。俺はそんな能力は持つていな……」「本当にそうか？」

三村はロイの言葉を遮るとドスの利いた声でロイを睨む。沈黙は肌を刺すような緊張感のある空気に変わつっていく。

「お前の素性は知つてはいる。HAWKに入った理由も……」

「おいおい、素性は誰も知らないんじゃないじゃないか？」

「一応、三佐だからな。貴様らの素性はだいたい知つてはいる」

それを聞いたロイは苦笑いを浮かべた。

「おっちゃん、実は相当の狸なんだな……分かつたよ」

ロイは手を挙げて観念したように笑うと「ただし！」と人差し指を差す。

「テストが終わつてからだ！赤点を取つたら笑えないだろ？」「

「分かつてはるよ。話は以上だ、陸士長」

三村はそう言つと「一ヒーを飲み干した。

ロイは敬礼をして退出し、その背中を見送つた三村はタバコを吹かす。

「シャドー・サーベラス・カンパニーか……懐柔された犬が……」

三村はサーベラス・・・ケルベロスの意味を持つPMCのエンブレムを一瞥する。

そこには闇に覆われた門の前に立つ黒い三つの頭を犬の絵があるの
だった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6280x/>

赤眼の狼

2011年11月20日09時19分発行